

靈界物語 第一八卷 如意寶珠 巳の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第十八卷』愛善世界社

1996(平成8)年11月04日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序じよ

凡例はんれい

總説そうせつ

第一篇

彌仙みせんの神山みやま

第一章

春野はるのの旅たび〔六二九〕

第二章 嚴いづの花はな〔六三〇〕

第三章 神命しんめい〔六三一〕

第二篇 再探再險さいたんさいけん

第四章 四尾山よつをやま〔六三二〕

第五章 赤鳥居あかとりゐ〔六三三〕

第六章 眞しんか偽ぎか〔六三四〕

第三篇 反間苦肉はんかんくにく

第七章 神かみか魔まか〔六三五〕

第八章 蛙かはづの口くち〔六三六〕

第九章 朝あしたの一驚いつきやう〔六三七〕

第一〇章 赤面黒面せきめんこくめん〔六三八〕

第四篇 舍身活躍しやしんくわつやく

第一章 相見互あひみたがひ〔六三九〕

第二章 大當違おほあてちがひ〔六四〇〕

第三章 救すくひの神かみ〔六四一〕

第五篇 五月五日祝ごがついつかのいはひ

第四章 蛸たこの揚壺あげつぼ〔六四二〕

第五章 遠來えんらいの客きやく〔六四三〕

第六章 返かへり討うち〔六四四〕

第七章 玉照姫たまてるひめ〔六四五〕

靈たまの礎いしず（四）

序じよ

梅うめは散ちりて漸やうやく赤坊あかんぼうの青あをい頭あたまを名残なごりに留とどめ、山櫻やまざくら薫かをるも七日なぬか又また匂にほふ、七日なぬかの空そら
の遅櫻おそびくら、首尾しゆびよく散ちりて葉櫻はざくらの、新装しんさう凝こらす晩春ばんしゆんの、頭あたまもぼかぼかする陽氣やうき、素すて
敵滅きめつ法界ぽうかいもない銀杏いてふの大古木だいこぼくが、圖體づうたいにも似氣にげないデリケートな若葉わかばの衣ころもを着きた
姿すがたも亦また一見いつけんの價値かち無なきにしもあらず、萬壽山まんじゆざんの新緑しんりよく時々じじこくこくに芽めを吹ふき出す惟神かむながら
的てきてんちの天地くわつどうの活動こころ、心の空そらもドンヨリと、曇くもり勝がちなる瑞月ずゐげつが、瑞祥閣ずゐしやうかくの奥おくの間まで、
述のべる靈界れいかい物語ものがたり、十八番じふはちばんの言靈ことたまの、お筥はこを叩たたき口くちたたたく、龍宮城りうくうじやうの乙姫おとひめの憑うつりた
まひし肉にくの宮みやと、誇ほこり顔がほなる黒姫くろひめが、千思萬慮せんしばんりよの經綸けいりんも、明あけて悔くやしき玉手箱たまてばこ、
玉照姫たまてるひめの生魂いくみたまと、母ははのお玉たまを引ひき抜ぬかれ、魔窟まくつヶ原がはらの地下室ちかしつを放はう棄きし、北山村きたやまむらの
高姫たかひめが本城ほんじやうに悄然せうぜんとして歸かへり行ゆく迄までの錯雜さくざつなる物語ものがたり、過くわ去こ、現げん在ざい、未み來らいに亘わたり讀よ

む人々の心に寫る千姿萬態の面白き語草、短き春の夜の夢心地して現を抜かすと云爾。

凡例

一、『靈界物語』が段々發表されて、吾人は始めて從來宣傳してゐた大本の教に幾多の誤謬と錯誤との存したことを知つた。そして同時に吾々は餘りに多く所謂大本的知識の過重に煩はされてゐたことをも發見した。

吾々は今や從來の誤れる所謂大本的知識を一掃し、一切の先入的觀念を排除して白紙の生れ赤兒の心を以て、大本の教に對さねばならぬ時機に到達した。瑞月師が、嘗て『神靈界』誌上に於て、大本の歴史に關する著作は差支ないが、教義的分子を含みた著作は、神意の分つた人からやめて貰ひたいといふ意味のことを言はれてゐたが、その意味が『物語』の巻を逐うて發表されるに従ひいよいよハツキリとして來た。

一、本卷は、大本と最も神縁深き彌仙山の因縁に就て詳しく説かれたものである。

大正十二年一月 編者識

總説

日進月歩文明の、世界と聞えし今年より、年遡り數ふれば、殆ど三十五萬年、
古き神代の物語、神素盞鳴の大神が、天の安河中におき、天の眞名井に誓約して、
瑞の御靈と現れ給ひ、天地百の神達に、千座の置戸を負はせられ、八洲の國の此
處彼處、漂浪ひ給ひ天が下、四方の國內に蟠まる、八岐大蛇を言向けて、再び日
の出の御代となし、皇大神に奉り、大海原の主宰たる、其天職を完全に、遂行せ
むと村肝の、心碎かせ給ひつつ、尊の水火より出でませる、八乙女を四方八方に、
遣はせ給ふ其中に、別けて賢き英子姫、悦子の姫と諸共に、自轉倒島に漂着し、
荒ぶる神や鬼大蛇、醜女探女を言向けて、神の御國の礎を、常磐堅磐に建てたま
ふ、尊き神代の物語、茲に天運循環し、神の御言を畏みて、神代に於ける神々の、

不^ふ惜^{しやく}身^{しん}命^{みやう}の御^ご活^わ動^{どう}、言^{こと}の葉^は車^{ぐるま}轉^{ころ}ぶまに、早^{はや}瀬^せの水^{みづ}のするすると、流^{なが}れ出^いづるを一^{ひと}
言^{こと}も、外^{ほか}へはやらじと息^{いき}を詰^つめ、手^て具^ぐ脛^{すね}曳^ひいて松^{まつ}村^{むら}や、鉛^{えん}筆^{ぴつ}尖^{とが}らせ北^{きた}村^{むらし}氏^し、瑞^{ずい}祥^{しやう}
閣^{かく}に仕^{つか}へたる、役^{やく}員^{ゐん}東^{ひがし}尾^お副^{ふく}會^{わい}長^{ちやう}、加^か藤^{とう}明^{はる}子^この如^に來^よ迄^{らい}、眠^{ねむ}たき眼^{まなこ}擦^{こす}りつつ、名^なさへ
目^め出^で度^たき萬^{まん}壽^{じゆ}苑^{ゑん}、風^{かせ}透^すき通^{とほ}る奥^{おく}の閒^まに、筆^{ふで}の穂^ほ先^{さき}を揃^{そろ}へつつ、言^{こと}葉^はの玉^{たま}を拾^{ひろ}ひ集^{あつ}
めてあ^あらあ^あらか^かくの通^{とほ}り十^{じふ}八^{はち}卷^{わん}の物^{もの}語^{がたり}、月^{つき}の曆^{こよみ}に數^{かず}ふれば、四^{しい}月^が三^{さん}日^{にち}雨^{あめ}降^ふらば、
鋤^{すき}鍬^{くは}あまに釣^つり下^さげよと、農^{のう}夫^{ふう}の氣^き遣^{づか}ふ今^け日^ふの日^ひも、晴^はれてうれしき龜^{かめ}岡^{をか}の、小^こ
高^かき丘^{をか}の一^{ひと}つ家^やに、萬^{よろづ}代^よ迄^{まで}と記^{しる}し置^おく。

第一篇 彌仙の神山

第一章 春野の旅〔六二九〕

風暖かく八重霞 春日と伯母はクレさうで
クレナイに包む彌生空 朧の月は中天に
照らず曇らずボンヤリと かかる山家の夕まぐれ
川の流れば涼々と 轟き渡る和知の里
空を封じて立竝ぶ 老樹の下の小徑を
トボトボ来る宣傳使 神の教をどこまでも
傳へにや山家の肥後の橋 月の光を力とし
神の恵を杖となし 烏は眠る鷹栖の

川邊の里に進み来る
顔も容も悦子姫

水の流れの音彦や
やがては来る夏彦の

九十九曲りの山路を
曲つた腰のトボトボと

これはぬばかりに加米彦が
草鞋に足を擦り乍ら

神子坂橋の袂まで
来る折しも向ふより

スタスタ来る二人連れ
何かヒソヒソ囁きつ

夜目に透かして一行を
心有りげに眺めゐる。

「モシモシ、一寸お尋ね致します。最前から承はれば、路々宣傳歌を謠ひつつお出になつた様で御座いますが、若しやあなたは、三五教の宣傳使様では御座いますまいか」

加米彦は、

「ヤアさう仰有るあなたは、何だか聞覚えのあるやうな感じが致します。臙夜の事とてハツキリお顔は分りませぬが、どなたで御座いましたかなア」

「私は三五教の宣傳使龜彦と申す者、今一人の方は素盞鳴尊様のお娘子英子姫と云ふ方で御座います」

「ア、お懐しや、英子姫様で御座いましたか、妾は悦子でムります。好い所でお目にかかりました。妾は劍尖山の麓に於てお別れ申しましてより、眞奈井ヶ原の貴の寶座を拜禮致し、それより三嶽の岩窟を言向和し、鬼熊別の割據する鬼ヶ城山の岩窟を、四五の同志と共に言靈を以て包圍攻撃致し、それから生野、長田野を越え、神知地山の魔神を征服し、高城山に立向ひ、再び道を轉じ、和知の流れに沿うて聖地に引返し、あなた様に御目にかかり、今後の妾等が取るべき方法を、御相談申上げたいと思ひまして、遙々夜を冒し、此處まで参りました」

英子姫は喜び乍ら、

「ア、左様ですか、妾は其方に別れてより、神様の命に依り、彌仙の深山に、或使命を帯びて登山し、今又父大神の神靈のお告に依りて、龜彦を伴ひ、伊吹山に参る途中で御座います。ア、好い所でお目にかかりました。お連れの方は何方か存じませぬが、何れ三五教の方でせう。此川音を聞き乍ら、出會うたを幸ひ悠く

りきうそくと休息いた致いたしませう」

「それは願ねがうてもないこと。妾わたしもどこか良い所ところがあれば一休ひとやすみ致いたしたいと思おもうて居ゐました。……此この方は音彦おとひこ加米彦かめひこの宣傳使せんでんし、一人ひとりはウラナイ教けうに暫しばらく入信にふしんして居ゐた夏彦なつひこと云いふ男をとこで御座ございます」

「私わたくしは龜彦かめひこです。貴下あなたは由良ゆらの湊みなとの人子ひとこの司つかさ、秋山彦あきやまひこの門前もんぜんに於おいてお目めにかかつた加米彦かめひこさまですか、コレハコレハ妙めうな所ところでお目めにかかりました。又また音彦おとひこさまとは、フサの國くにでお別わかれ致いたしました私わたくしの舊友きういうぢやありませんか」

「左様さやうその音彦おとひこで御座ございますよ」

「遙々はるばると此この自轉倒島おのころじまへお越こしになつたのは、何か深ふかい仔細しさいが御座ございます」

「これに就ついては、種々いろいろ珍談ちんだんも御座ございますが、ユルリと後あとから申まをしあ上げませう。サアサア皆みなさま、打揃うちそろうて此この芝生しばふの上うへで骨休ほねやすめを致いたしませうかい」

「宜よろしからう」

と一同いちどうは老樹らうじゆの蔭かげに打解うちとけ、手足てあしを延のばして休息きうそくしたり。

茲に六人の宣傳使
風に散り布く山櫻
百の話に花咲かせ

六つの花散る冬も過ぎ
香りを浴びて來し方の
思はず時を移しける。

「モシ英子姫様、最前あなたの御言葉に依れば、彌仙山へ神務を帯びて御登山になつたと仰せられましたなア。音彦も一度其靈山へ、是非登山致したいと存じて居ます。随分嶮峻な所でせうなア」

「お察しの通り、實に嶮峻な深山で御座います。晝猶暗く、鬱蒼たる老樹天を封じ、到底日月の光は拜む事は出來ませぬ。併し乍ら、貴方は登山なされますならば、大變都合の好い事が御座います。妾は父の神勅に依りて、一つの經綸を行つて置きました。どうぞあなた方一度行つて下さいませ」

「其御經綸とは、如何なる御用で御座いました。豫め仰有つて下さいませぬか。音彦も其覺悟を致さねばなりません」

「只今申上げずとも、お出になれば、……八ハア之であつたかなア……と自然に

お判りになりませう。先樂しみに、此お話は暫く保留して置ませう」

加米彦「エー英子姫様さう出し惜みをなさるものぢやない、アツサリと云つて下さいナ」

英子姫「ひでこひめ」
「イエイ工宣傳使の言葉に二言は御座いませぬ。一旦申上げぬと云つた事は、金輪際口外する事は出来ませぬ」

「あなた様は綺麗な女神にも似ず、随分愛嬌のない事を仰有いますなア。初めて加米の御願ひしたことを、直様お聞き容れ下されず、クルツプ式砲彈を發射し、

加米等の欲求を撃退なされますか。シテ、あなたは愛嬌の定義を知つて居ますか」
「イヤもう おむつかしい議論を吹つかけられますこと。マアマアぼつぼつと御

登山なされませ。それはそれはアツと言ふ様な仕組がして御座いますワ」
「何だか諄々として詭辨を弄するお姫さまだナア。キベン萬丈加米當る可からず

だ、アハ、ハ、ハ」
「コレコレ加米彦さま、さうツケツケと無遠慮に物を仰有るものでない。チトた

しなみなさらぬか」

「ハイハイたしなみませうよ、悦子さま。無禮ぢやとか、謙遜ぢやとか、遠慮ぢやとか、たしなみぢやとか、種々の雅號が澤山有つて、取捨選擇に殆ど閉口頓死致します」

音彦は顔をシカメ、

「エー縁起の悪い。閉口頓死なぞと、せうもない事を言ふものでない。お前達は哲學とか道學とか云ふ親不孝、不作法の學問をかざつて居るから、仕末にをへない、マアマア英子姫様の仰有る通りハイハイと温順しくして居れば良いのだ。吾々六人の中では、最もお偉い方だ、言はば吾々のお師匠様だ。師の影は六尺下つても踏むなと云ふ位だ」

「あなたも縁起の悪い事を言ひますネ。加米が閉口頓首と云つた事を咎め乍ら、あなたは死の影がどうの斯うのつて、夫れこそ自縄自縛ぢやありませんか」

音彦は吹き出し、

「ハ、ハ、ハ、譯の分らぬ團子理屈を能く捏ねる男だなア」

「お前こそ團子理屈だ。吾々のは餅理屈だ。蚶が餅搗きや加米彦が捏ねる、ポン

ポンと音彦おとひこがすると云いふぢやないか、アハ、ハ、ハ、ハ、

龜彦かめひこは立ち上あがり、

「サア皆みなさま、何時いつまで御話おはなしを致いたして居をつても際限さいげんが有ありませぬ。冗談ぜうだんから暇ひまが出る、瓢箪へうたんから駒こまが出る。駒こまに鞭打むちうち、一日ひとひも早はやく目的地もくてきちへ向むかつて發足はつそく致いたませ

う。ナア英子姫様ひでこひめさま……」

「折角せつかくお目めにかかつて嬉うれしいと思おもへば、神界しんかいの御命令ごめいれい、止やむにやまれませぬ。英子ひでこも直様すぐさまお別れわかれ致いたませう。皆様みなさま左様さやうなら、何れいつ又またお目めにかかる機きくわい會ごが御座ございま

せう」

と會釋あしやくし、早はやくも歩あゆみ出だしたり。

悦子姫よしこひめは會釋あしやくしながら、

「左様さやうならば、姫様ひめさま、ご機嫌きげんよくお出いで下くださいませ。龜彦様かめひこさま、御如才ごじよさいは御座ございま

すまいが、どうぞ姫様ひめさまの御身邊ごしんべんに注意ちういを拂はらつて下くださいませやア」

「龜彦かめひこ、委細承知あさいししやうちかまつ仕まつりました。必かならず必かならず御煩慮ごはんりよくた下くださいますな。サアこれからコン

パスに油あぶらを注さして進すすみませう。悦子姫よしこひめさま、音彦おとひこ、加米かめの宣傳使殿せんてんしどの、夏彦なつひこさま、

左様ならば御機嫌よう……」

「お二人様、お任せよう拔群の功名手柄を現はし給はむ事を念願致します、アリヨース」

と雙方に袂を分つ。二本の白い杖のみ朧月夜の山路を、川上指して上り行く。

春の夜は瞬く中に明け放れ、霞の空を押し分けて、天津日の大神は、まん圓き温顔を差し出して、四人が頭を照し給ふ。心持よき春風に、道も狭きまで散り布く山櫻、花を欺く悦子姫、山路通る床しさは、畫中の人の如くなり。

音彦は急坂を打ち仰ぎ、

「ア、随分嶮しい坂ですなア。英子姫さまが一切沈黙を守つて居られたのも、斯う云ふ胸突坂が澤山あるので、吾々が恐怖心を起し、折角張詰めた精神を、薄志弱行の逆轉旅行と出かけるかと思つての御心配り、イヤもう恐れ入りました。人を導き、向上させてやらうと思ふ宣傳使の御心は、又格別なものですなア」

悦子姫は、

「イヤ決して決して英子姫様の御心中は、さうではありますまい、モ少し意味の

をやつて居るやうだワイ、ハツハ、ハ、ハ、

「ア、夏チヤン、ホーカイなア」

「オイオイ加米彦、夏彦の兩人、早う來ぬか、ナンド、斯んなチツポケな坂に屁古垂れよつて………随分足の遅い奴だなア」

「喧しい言うて呉れない音彦さま、上り坂は前が高いワイ。其代りに下り坂になつたら、ドンナものだ、一瀉千里の勢で、アフンとさしてやるぞ。併し乍ら此日の永いのに、さう急ぐにも及ばぬぢやないか、そこらの木蔭で一つ切腹したらどうだい」

音彦は、

「エー又縁起の悪い事を云ふ加米だナア。エ、仕方がない。悦子姫様、此の平地で一服致しませうか、兩人の奴、大變に屁古垂れて居る様ですから」

悦子姫は氣輕るげに、

「マア此處で悠くりと待つてあげませう」

加米彦は小柴の茂る小徑を、ガサガサ喘ぎ喘ぎ、手負猪の様な鼻息を立て、玉

の汗あせを絞しぼりつつ、漸やうやく二人ふたりの側そばに登のぼり着つきける。

足あしを容いる許ばかりの細路ほそみちを、粗朶そだを背せに負おうて降くだり來くる二人ふたりの女をんなあり、四人よにんの姿すがたを見みて、

「コレハコレハ皆様みなさま、狭せまい路みちを量かさの「たか」い物ものを負おうて通とほりまして、誠まことに濟すみませぬ、どうぞ御勘辨ごかんべん下くださいませ」

加米彦かめひこは、

「サアそれは仕方しかたがありませぬ、天下てんか御免ごめんの大道だいだう、否いな、羊腸やうちやうの山路やまみち、……サアサア皆みなさま、林はやしの中なかへ暫しばらく沈没ちんぼつ致いたしませう。そして敵艦てきかん二隻にせき、暗礁あんせうを避さけた安全あんぜん海路かいりうを通過つうくわさせてやりませうかい」

四人よにんはガサガサと、木きの茂しげみへ避よけると、二人ふたりの女をんなは汗あせを片手かたてに、手拭てぬぐひにて拭ぬぐひ乍ながら、

「コレハコレハ皆みなさま、濟すみませぬ」
と板いたを立てし如ごとき細ほそき坂路さかみちを工さか工みち降り行くだく。

加米彦かめひこは二人ふたりの後姿うしろすがたを見送みおくりて、

「ア、無事に御神輿通過も済んだ。サアサア皆さま、一服のやり直しを致しませう……」

音彦 「あの女は澤山の粗朶をムクムクと負うて歸りよつたが、一體何と云ふ雅名

だらう」

加米彦 「あれかい、きまつて居るワイ。オハラ女が柴を負うて通つたのだ」

「ナニ、斯んな所に大原女が通つてたまるものか。叡山の麓ぢやあるまいし」

「それでも大きな腹をして居つたぢやないか」

「あれはヤセの女だよ。八瀬大原と云つて、畑の小母の産地だよ。此處もヤツパ

リ山地には間違ひない。前の女は大變な瘦女、後のは孕み女だ。それで一人はヤ

セ女、一人はオハラ女だ、斯う宣り直せば、雙方の意見が成立して、複雑な議論

も起らぬだらう」

「モシ悦子姫さま、あなた最前音彦と、大變仲ようして歩いて居ましたなア。氣

をつけなされませや。此音彦は、女房の五十子姫は龍宮の一つ島へ行つて居るも

のですから、【やもめ】鳥も同様、ウツカリして居ると、今行つた女ぢやないが、

いま
今はヤセ女のあなたでも、何時の間にか大腹女になりますよ」

よしこひめ
悦子姫「オツホ、お氣遣ひ下さいますな、決して決して御心配はかけませぬから」

かめひこ
加米彦「ア、それならマア私も御安心だ」

おとひこ
音彦「オイ加米彦、冗談も良い加減にせぬか、永い春日が又暮れて了ふぞ」

よしこひめ
悦子姫「サア皆さま、参りませう」

つくもをり
と九十九折の嶮しき小徑を登り行く。

おとひこ
音彦「今度は加米彦、夏彦、先へ行け、又煩雜い問題を提起されては處置に困るから」

かめひこ
加米彦「さうだらう。ヤツパリ物がある奴は、何處までも注意深いものだ、イヒ、」

かめひこ
加米彦は悦子姫の後に、三尺許り離れて随って行く。七八丁登つたと思つと、

むねつきさか
胸突坂を登り来る二人の姿、半丁許り谷底に、笠ばかり揺ついで居る。

かめひこ
加米彦「ヤア、大きな白い松茸が登つて来るワイ。オイ音彦、夏彦、悦子姫さま

かめひこ
加米彦「ヤア、大きな白い松茸が登つて来るワイ。オイ音彦、夏彦、悦子姫さま

かめひこ
加米彦「ヤア、大きな白い松茸が登つて来るワイ。オイ音彦、夏彦、悦子姫さま

かめひこ
加米彦「ヤア、大きな白い松茸が登つて来るワイ。オイ音彦、夏彦、悦子姫さま

が夫程それほど恥はづかしいのか。何だ、笠かさで顔かほも體からだもみな隠かくしよつて……」

悦子よしこ姫ひめ 「加米彦かめひこさま、又また貴方あなたは嘲弄からかふのかい、良よい加減かげん、冗談ぜうだんはよしにしなさいよ」

加米彦かめひこ 「此このさみしい山路やまみち、私わたくしの様な鳴り物やうものが一つあるのも亦また重寶ちゆうほうでせう。併しかし乍ながら、お氣きに入いらぬとあれば仕方しかたがない。冗談ぜうだんはこれ限りヨシコ姫ひめに致いたませう、

アツハ、、、」

悦子よしこ姫ひめ 「それまた、冗談ぜうだんを仰有おつしやるワ」

加米彦かめひこ 「仰有おつしやいますな。加米彦かめひこに憑依ひよういして居をる雲雀彦ひばりひこの守護神しゆごじん奴め、山やまへ來くると親しん

類るゑへ歸かへつた様に思おもつて、はしやいでなりませぬワイ、ウフ、」

悦子よしこ姫ひめ 「大分音彦だいぶんおとひこさまが遅おくれなさつたよな鹽梅あんばいぢや。少すこし待まち合あはせませうか」

加米彦かめひこ 「ヤツパリ氣きに懸かかりますかな、遅おくれとるのは音彦おとひこばかりぢやありませんか。

腰こしの曲まがつた夏彦なつひこにもチツとは目めを呉くれてやつて下くださいナ。あなたは博愛心はくあいしんがどう

かしてますネー」

悦子よしこ姫ひめ 「何だかケンケン言いつてるぢやありませんか」

加米彦「エーあれや雉子ですよ。音彦の兄弟分ですがなア。二つ目にはケンケン
コンコンと言つては頭を打たれ、腰を打たれ、攻撃の矢ばかり喰つて居ます。

雉子も鳴かねば撃たれまい……と云ひましてなア……」

悦子姫「雉子と云ふ鳥はコンナ深い山に棲みて、何を喰つてるのでせう」

加米彦「アルタイ山の蛇掴の様に、蛇ばかり喰つて居るのでせう」

悦子姫「丸で加米彦さまの様な鳥ですネー」

加米彦「ソラ何を仰有います。私が何時蛇を喰ひましたか」

悦子姫「蛇ぢやありません。あなたは何時も、ヘマばかり喰つてるぢやありません

せぬか、ホ、ホ、」

加米彦「ナア、屁でもない屁理屈を能く竝べなさる。あなたも随分言葉の練

習が出来て、お口丈は悦子姫ぢやなくて、悪子姫になりましたなア」

悦子姫「ホッホ、」

加米彦「ア、何だか交通機關が倦怠して來ました。音彦の來るまで待つてやりま

せうかい」

悦子姫よしこひめ 重寶ちゆうほうなお口くちだこと、進退しんたい維これ谷きはまりて、待つておあげなさるのでせう」
加米彦かめひこ 八八ア、あなた用心ようじんしなさいよ。惡神あくがみが憑ついて居ゐますで………隨分ずぶん言こと靈たま
が濁にごつて來きました。一つひと神靈しんれい注射ちゅうしゃをやつてあげませうか」
悦子姫よしこひめ 有難ありがたう。またユルユル皆みなさまの御協ごけ議ぎの上うへで、御願おねがひ致いたします」
と悦子姫よしこひめが蓑みのを敷しいて、一年いちねん越この霜しも枯がれの萱かやの上うへにドツカとすわる。

千歳ちとせの老松らうしやう杉すぎ檜ひのき
槻け楓ふか雜へで木ぎも苔こけ蒸むして

神かむさび立たてる左さい右うの密林みつりん 躑躅つづじの花はなの此處ここ彼處かしこ

白しろに紅くれなゐ青あを黄き色いろ 艷えんを爭あふ其その中なかを

藪やぶ鶯うぐいすや山雀やますずめ 四十しじふ雀がら鳴なき立たつる

山路やまぢを越こえて何い時つしかに 小廣こびろき田圃たんぼに流ながれ出でる

古ふるき神代かみよの物語ものがたり 唯ただ一ひと言ことも漏もらさず

書かき傳つたへむと土筆つくつくし 鉛筆えんぴつ尖とがらし道みちの邊べに

待構まちかまへ居ゐるしほらしさ 麥むぎの青葉あをばは止とめ葉ばうち

筆を隠して青々と 手具脛ひいて待つて居る

花は一面田の面に 艶を競ふて咲きぬれど

床には置くな、矢張野で見よ紫雲英 虎杖草のここかしこ

萬年筆の芽を吹いて 書き取り清書の準備顔

此物語の主人公 四邊の景色も悦子姫は

音彦、加米彦、夏彦を 吾子の如く労はりつ

親になつたる氣取りにて お山を見當てに進み行く。

加米彦「アーアナント云ふ佳い景色だらう。……音彦さま、向ふに雲の被衣を着

て居るズンと高い高山がそれぢやないか」

音彦「さうだ、あれが目的の木の花姫の御分靈の祀られてある彌仙のお山だ」

加米彦「道理で、首から上は、雲の奴、スツカリ包みて、峰の姿を……【ミセン】

の山だな、併し乍ら泰然自若として動かないあの姿を見ると、實に癩に障るぢや

ないか。俺達ばかりにテクらせよつて、一歩も動かさず、ヂツとして、俺が見た

けら此處まで御座れ、と云ふ鹽梅式だ。丸で吾々を眼下に見くだし、奴隷視して居るぢやないか。何だか輕蔑せられる様な心持がしてきたワイ」

音彦「アハ、ハ、ハ、云ふ事が無いと、何なと言はねば氣の濟まぬ男だなア。さう心配するな、今に、何程威張つて居る彌仙山でも、頭の頂邊を、吾々の足で踏みにじる様になるのだよ。さうだから、時節を待て……と云ふのだよ」

夏彦「皆さま、此美しい紫雲英野で、お辨當でも開いて、お山を拜み乍ら休息致しませうか」

加米彦「待て待て、女王様の御機嫌を伺つた上、認可してやらう。暫く控へて待つて居らう」

夏彦「随分藥罐が能く沸騰りますなア、否かめは能く沸騰しますナア、アハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

悦子姫「皆さま、どうでせう、此麗しい野原で、お山を遙拜し乍ら、くつろぎませうか」

夏彦「ソラ、どうだい、以心傳心、吾輩の身魂は暗々裡に、女王様に感應して居

ただ。斯うして見ると、肉體は主従だが、靈は……」

加米彦「その次を言はぬかい、靈魂が何だい、狸身魂の舐みたまをして、何だか物臭い事を言ふ奴だ、斯んな怪體なスタイルをして、能うソナ事が云はれたものだワイ」

夏彦「ナーニ、スタイルで女が……ウンニヤ、ムニヤムニヤ」

加米彦「又行詰りよつたナ、閻魔さまの淨玻璃の鏡の前では、心の奥まで照されて、恥かしさに忽ち唾とならねばなるまい。グツグツして居ると、舌を抜かれて了ふぞ」

夏彦「舌の一枚や二枚抜かれたとて、澤山に仕入れてあるから大丈夫だよ。今の人間に一枚や二枚の舌で甘んじて居る様な者は、それこそ不便極まる片輪人足だ」
加米彦「本當に能う廻る舌だなア。俺も此奴には一寸ビツクリ舌、イヤ感服舌、アツハ、ハ、ハ」

斯かる所へ、小夜具染の半纏をまとひ、「あかざ」の杖を突き乍ら、ヒヨコリヒヨコリと一人の老翁、四人が前に立現はれ、

「皆さま達は、彌仙のお山へ御参拜のお方と見受けますが、どうぞ私の家へお寄り下さいませぬか。一つお尋ねをしたり、お願いしたい事が御座います」
加米彦はシヤシヤり出で、

「ヤアお前さまは、北光の神さまの様な、崇高な容貌をしたお爺さまだな、コンナ若い宣傳使や、若い男に、老人が物を尋ねるとは、チツと間違つては居やせぬか。一年でも先へ此世へ飛び出した者は、経験が積み、社會學に達して居る筈だ、怪體な事を言ふお爺さまだなア。わしは又、お前さまの姿が木蔭にチラと見えた時から……ヤア占た、一つ沓でも穿かして上げて、張子房ぢやないが、太公望の兵法でも傳授して貰はうと思つて樂しみて居たのだ」
爺「世界の事なら、一日でも先へ生れた丈わしは兄貴だ、教へても上げるが、これ丈長生をして、世の中の酸いも甘いも悟りきつた此爺に、どう考へても合點のいかぬ事が一つあるのだ。これはどうしても神様のお道の人に聞かなくては、分らぬ事だと思つて、お山へ詣るお方を、婆アと二人が、茅屋へ寄つて貰ひ、種々と尋ねて見るけれども、どのお方も完全な解決を與へて下さらぬのだ。此間も英

子姫さまとやら……此お女中よりもズツと綺麗な、神様のお使ひのお方が凜々し
相なお従者を連れて通らしやつたので、一つ尋ねてみた所、二人のお方はニヤツ
と笑うて、何にも仰有つて下さらず、やがて女一人男三人の一行が、お山詣りを
するから、其者に會うて尋ねて呉れいと仰有つたので、毎日日首を長うして待
つて居つたのだ、もしや、お前さま等の事ではあるまいかと思つて、重い足を引
きずつて出て來たのだ」

加米彦「ア、さうだつたか、社會學はまだ未完成だが、神様の事ならば、ドンナ
事でも解決をつけてあげよう。英子姫さまも流石は偉いワイ。手柄を俺達に譲つ
てやらうと思召して、昨夜會つた時にも仰有らなかつたのだ。流石は先見の明あ
りだ。古今來を空しうして東西位を盡したる、世界の外の世界迄踏み込んで、宇
宙の真相を悉皆看破したる、此加米彦がお出でになると云ふ事を、流石は明智の
英子姫様、豫期して御座つたと見える。サアサア何なりとお尋ねなされ。神界に
關する事ならば決して退却は致さぬ、三五教には退却の二字は有りませぬから……

……オツホン」

爺ぢい「さうかな、若いわかにも似合にあはず、能うよそこまで勉強べんきやうをなさつた、感心かんしん々々かんしん。今いま時のどき若い者わかものは、皆心得みなこころえが悪わるくて、神かみさまなソテ、此世このよの中なかに有あるものか、人間にんげんが神かみさまだ、神かみがあるのなら、一遍會いっぺんあはして呉くれ、そしたら神かみの存在そんざいを認みとめてやるなソテ、大ソレた事ことを云ふ時節じせつだ。それにお前まへさまは、何も彼かも御存ごぞんじとは、實じつに偉えらいお方かただ、此爺このぢいも今迄いままでコンナ方かたに會あひたいと思おもうて、待まつて居ありました……ア、神様かみさま、有難ありがたう御座ございます、これと云ふのも全まったく彌仙みせんのお山やまの木この花姫はなひめ様のさま篤あつき御ご守護ゆご……」

と袖そでに涙なみだを拭ぬぐふ。

夏彦なつひこ「モシモシお爺ぢいさま、此奴こいつア、由良ゆらの湊みなとの秋山彦あきやまひこの門番もんばんをして居をつた男をとこです。偉えらさうに口くちばかり開ひらくのですよ。朝あさから晩ばんまで門もんを開ひらくのが商賣しやうばいだから、其情そのだり力よくが未だいまに残のこつて居をつて、大門おほもんの様やうな大けな口くちを開ひらきよるのだ。相手あひてになりなするな。此男このをとこの云ふ位くらゐな事は、私わたしだつて、年の功こうは豆まめの粉こだ、豆まめの粉こは黄きな粉こだ、黄きな粉こはヤツパリ豆まめの粉こだ。猪喰ししくた犬いぬは、犬いぬのどこやらに勝すぐれた所ところが有ありますワイ。私わたしが教をしへてあげませう」

加米彦「コレコレお爺さま、此奴はなア、ウラナイ教の黒姫と云ふ、口ばかり達者な奴に十年間も朝から晩まで、法螺を仕込まれて来た奴だから、何を言ふやら、蜜柑やら、金柑柑で量るやら、なにも分つた代物ぢやありませんわい」

爺「最前から此老爺が一生懸命に頼みて居るのに、お前さま達は、此老人を翻弄するのかい、エーエやつぱり英子姫さまの仰有つた偉いお方は、此御連中ぢや有るまい。アア阿呆らしい、コンナ事なら此重い足を、老人が引摺つて来るのぢやなかつたのに……」

音彦「モシモシお爺さま、さう腹を立てて下さるな。此等二人は雲雀や燕の親類です。ですから、どうぞお望みの事を、私に仰有つて下さいませ。私の力限り神様に伺つて御答を致しませう」

爺「ア、さうかなア、お前さまはどこやらが、締りのある男だと思つて居つた。此處では話が出来ませぬから、お前さま一人、私の宅へ来て下され、婆アや娘が待つて居ります」

音彦「お爺さま、それは有難う御座いますが、私の……此處に御主人とも先生と

も仰ぐ悦子姫さまがいらつしやいます。此お方は吾々の大先生で御座いますから、此方を捨てて私ばかり参る譯にはゆきませぬ」

爺「アーさうだらうさうだらう、ソナナラ、悦子姫さまの先生とお前さまと来て下され、斯んな若い男は此處に待たして置いたら宜しからう」

音彦「併し乍ら、四人はどうしても離れないと云ふ不文律が定められてあるので、此男二人を此處に放棄して置く譯にはゆきませぬ、四人共参りませう。それがお氣に入らねば仕方がありますから御断り申すより途は御座いませぬ」

爺「ア、ソナナラ来て下さいませ。コレコレ二人のお若い、私の家へ来て下さるのは構ひませぬが、あまり喧しう言つて下さるな、娘の身體に障ると困りますから……」

加米彦「オイ夏、貴様一杯奢らぬと冥加が悪いぞ、此中で一番の年長だ、それに「お若い」と云はれよつたぢやないか、是れと云ふのも、俺の好男子の餘徳に依りて若く見られたのだよ。それだから老爺さまが、娘の體に障ると困ります……ナンテ豫防線を張るのだよ。險呑な代物と見込まれたものだなア、アツ

山と山との迫りたる 春野の花に右左

白や紫黄金なす 男蝶女蝶の翩翩と

常世の春を舞ひ遊ぶ 紫雲英の花の咲き満ちた

山の麓の田圃道 景色も殊に悦子姫

谷の水音潺湲と 遠音に響く音彦や

加米彦夏彦諸共に 白髪親爺の豊彦が

賤の伏屋へ徐々と 石の田樂橋を越え

蒲公英の花を踏みすだき 半倒れた萱の家の

漸う表門に着きにける。

豊彦は、三月の菱餅の様になつた門口の戸を敲いて、

「オイオイ、お婆、お客さままだ、早う開けぬか」

「婆、豊彦どのか、マアマア待つて下され、敷居も鴨居も斜になり、戸を噛みて一寸やそつとにや開きはせぬ。お玉はお玉で身體は自由にならず、爺どの、お前も

外そとから力ちからを添そへて下ください。アア貧びんぼう乏ふすると戸とまでが嫌いやさう相さうに歪ゆがみ出だすなり、壁かべは身しんじやう上の瘦やせたせい骨ほねを出だすなり、情なさけ無ない事ことだ、コンナ茅屋あばらやにソソンナ立派りつぱなお客きやくさまに來きて貰もらうた處ところで、腰こしを掛かけて貰もらふ處ところもありやせぬワ

豊彦とよひこは婆ばばアと共ともに内うちと外そとから年寄としよりの金剛力こんがうりきを出だし、左ひだりの方かたへグイツとしやくつた其途端そのとたんに、半破なかばやぶれた古戸ふるどは敷居しきゐを外はづれてバタリと中なかへ轉こけ込みたり。

豊彦とよひこ「エエ、氣きの利きかぬ婆ばばだ、戸倒とたふしものだナ、サアサお客きやくさま、ずっと奥おくへお通とほり下くださいませ」

加米彦かめひこは、

「お爺ぢいさま、奥おくへ通とほれと云いつたつて何處どこに奥おくがあるのだい、門口かどぐちへ這入はいるなり、もう裏口うらぐちぢやないか、ウラナイ教けうなら奥おくの奥おくに奥おくがあり、其又そのまた奥おくにも奥おくがあるものだが、こら又何またなんと狭せまい箱枕はこまくらの樣やうな家うちだなア」

音彦おとひこは氣きの毒どくがり乍ながら、

「コラコラ、加米かめ、又またはつしやぎよる、ちつと沈黙ちんもくせぬかい失禮しつれいな」

加米彦かめひこ「ハイ、如何どうも副守ふくしゆの奴やつ、加米彦かめひこの命令めいれいを遵奉じゆんぽうせないので困こまる、モシモシ

お爺さま、何卒氣に障へて下さいませすな、私の茅屋に這入つて居るお客が申したので御座います」

「さうだらう、私の茅屋に這入つて来たお客の一人だ、さう八釜しく云ふと娘の身體に障ります、ちつとお靜にして下さい」

加米彦、小聲になつて、

「ハイ、承知致しました、然し餘り輕蔑して下さるな、斯う見えても娘の身體に障る様な不躰な事は致しませぬワ」

豊彦「コレコレ婆や、座蒲團を出さぬかい、お茶を酌まぬか、モシモシお姫さま、何卒お腰をかけて下さいませ」

婆「皆さま、よう来て下さいました。早速乍らお尋ね致しますが私等夫婦は誠に運の悪いもので御座いまして、一人の息子に嫁を貰ひ、比沼の眞名井山へ參拜をさせました其途中に、大江山の鬼雲彦とやら云ふ悪人の手下共に搔攪はれ、生きて居るか死んで居るか。今に便りが御座いませぬ、それに又一人の妹娘は、一年半ほど前から身體が變になりました、酔い物が食ひ度いと云ひ出し、腹は段々、

日に日に太り出し、最早十八ヶ月にもなりますのに、脹満でもなければ子でもない様な、譯の分らぬ業病に罹つて苦みて居ります。かう云ふ山奥の一つ家、娘は元來臆病者で、十八才の今日まで親の側を半時だつて離れた事はありません、それだから子の宿る筈もなし、腹を抑へて見れば大きな塊がゴロゴロと動いて居るなり、何が何ぢややら譯が分らず、天にも地にも只一人の娘の爲めに、年寄夫婦が泣きの涙で暮して居ります。それに合點のゆかぬは、此間も三五教の宣傳使の英子姫さまとやら云ふお方が、立派な家來をお伴れ遊ばして此茅屋へ立寄つて下さいまして、娘の容態をつくづくと眺め、これは妊娠だから大切にせよとの御言葉、妊娠なれば遠うの昔に生れて居らねばなりません、もう十八ヶ月にもなりますのに何の音沙汰も無し、英子姫さまの仰しやるには四五日の間に立派な宣傳使を遣してやるから、それに頼みて無事に子を生まして貰へとの事でした。相手も無いのに子が出来ると云ふ様な事が昔からあるものでせうか」

悦子姫「ア、それは御心配でせう、一寸妾が見てあげませう」

とお玉の側に寄り添ひ、腹を撫で、

「ア、これは全く妊娠です、然し乍ら決して、人間と人間との息から出来た子ではありませぬ、何か心當りは御座いませぬか」

豊彦「さう聞けば無い事もありませぬ、一昨年の秋の初め、私の夢に白髪異様の老人が此茅屋に訪ねて御いでになり、立派な水晶とも瑠璃とも譬方ない玉を五つ下さいまして、「之をお前にやるから娘に吞ましてやれ」と仰しやいました。そこで私は「承知致しました、然し乍ら斯んな硬いものが吞めますか」と尋ねましたら、その方の云はれるのには「俺が吞ましてやらう、決して吞み難い物ではない」と仰しやつてお玉の身體をグツと抱へ、胸の邊りに無理に押し込みなさつたと思へば目が覺めました。さうすると娘のお玉がウンウンと魘されて居るので、揺り起こしてやりますと、お玉の身體は一面、汗びしよ濡れになり、私の見た夢と同様の夢を見た、それから身體が何となく苦しくなつて堪らぬと云ひました。何れ夢の事だから明日になつたら苦しいのも癒るだらうと云つて、その晩寝みました。夜が明けて見ればお玉は矢張ウンウンと呻つて居ります。それつきり十八ヶ月の今日まで、腹が段々膨れる許りで、身體の自由も利きませず、不思議な事があれ

ばあるもので御座います、何か悪神の所作ではありませんすまいかな」

悦子姫「ヤ、心配なされますな、悪神どころか立派な神様のお靈魂が宿らせられていらつしやいます。嚴の御靈の大神が御生れになるのでせう。妾が今神様にお願を致します」

と何事か小聲になつて頻りに祈願を凝らしつつある折しも、お玉は「ウン」と一聲諸共に初めて起き直り夢中になつて、

「ア、有難う御座います、これで私も助かります、七人の女の隨一、嚴の御靈の御誕生だと何時やら見えた白髮の神様が仰しやいました、何卒、とり上げの用意をして下さいませ、強い陣痛が催して來ました」

豊彦夫婦は吃驚し、

「ヤア、それは大變ぢや、早く湯を沸かさねばなるまい」

悦子姫「お爺さま、お婆アさま、貴方等は此處にちつとして居て下さい、これ加米彦や夏彦さま、早くお湯を沸かしなさい」

加米彦「ハイ（妙な聲で）ナア夏彦、どうで碌な事ぢや無いと思つて居つた、コ

ンナ山奥へ出て来てお産の湯まで沸かさして頂くとは、思ひも寄らぬ光榮ぢやないか」

夏彦「ソナナ勿體ない事を云ふものぢやない、結構な神様が御出産遊ばすのぢや、その御用の端に使うて貰ふのは餘程の因縁ぢや無くちや、コンナ御用が仰せ付かるものかいヤイ、あら有難い辱ない」

お玉「ウンウン」

音彦「サア早く、加米彦、夏彦、湯を沸かして上げぬかい」

「ハイハイ」

と破れ鍋に水を盛り、閉蓋をチャンとのせ、薪をポキポキ折つて火鉢の火を吹き、つけ、座蒲團で風をおこし、湯沸かしに全力を注いで居る。忽ち聞ゆる赤子の聲、

「ほぎやア ほぎやア ほぎやア」

「ア、目出度い目出度い、サア腹帯を締めてあげよう」

と悦子姫は甲斐々々しくお玉の後に廻り、グツと腹帯を締め、

「サア之でもう大丈夫です、お爺さま、お婆アさま、ご安心なさいませ」

爺、婆「ハイハイ、有難う御座います、とりあげ迄させまして誠に何とも恐れ入った事で御座います」

「サア湯が沸いた様です、どれどれ私が湯を浴せてやりませう、ヤア何と長い事腹の中に居られたせいか、立派なお子さまだワイ」

と音彦は赤子を両手に抱へ、湯の手加減をした上、悦子姫と共に行水をさせる。赤子は盥の中で、火でも身體に焦ついた様に眞赤な顔をして泣き立て居る。

悦子姫はいそいそとして、

「ア、立派な丈夫なお子さまだ。お爺さま、お婆アさま、お玉さま、御安心なさいますよ」

三人黙然として涙を零し俯向き居る。

「何と不思議な事があるものぢや無いか、ナア夏彦、十八ヶ月で子が出来るとは前代未聞だ。俺達は節季が来ると何時も【たらい】（不足）で泣くが、此赤ん坊は、ほんのりと温う暖まつて矢張【たらい】（盥）で泣くのだな、アハ、ハ、ハ、夏彦「コラコラ加米、又そんな大きな聲を出しよると、お玉さまの身體に障った

ら如何するのだ」

「【さはる】のは加米とはお役が違ふ哩、悦子姫さまが【さは】つて御座るぢやないか、アハ、ハ、ハ、」

音彦「コラコラ兩人、靜にせぬか」

「ハイ畏まりました」

お玉「皆様、いかい御世話になりました。生けた子は男で御座いますか、女で御座いますか」

音彦「オ、さうさう、あまり嬉しうて調査するのを失念して居た。アア折角乍ら割れて居ますワ」

豊姫「エ、又女で御座いますか、矢張私の家は養子でなければ治まらぬと見えま

す。倅に嫁を貰つて後を繼がさうと思へば、最前申した通り行衛は分らず、矢張妹のお玉に養子をせねばなりません、今度生れた總領も養子を貰ふ様になりました」

加米彦、又もや【はしや】いで、

「お爺さま、お目出度う、これで貴方の家の運も開ける、養子が三代續けば長者になる」と云ふ事だ、お喜びなさい、私も嬉しい、お目出度い、手の舞ひ足の踏む所を知らずだ。どっこいしよ どっこいしよ」

と跳上り田樂橋を踏み外し、小溝の中へバサリと落ち、

加米彦「ヤア折角の着物を濡らして仕舞った」

夏彦「ハ、ハ、ハ、狼狽者だな」

悦子姫「もうこれでお案じなさる事は要りませぬ、大丈夫です。名はおつけなさい

いますか」

豊彦「誠に濟みませぬが、貴女様のお世話になつた子供で御座いますから、何卒

お名をやつて下さいませ」

悦子姫「承知致しました、ソナナラ妾が名をあげませう、玉照姫とつけませう」

豊彦、豊姫、お玉、一時に口を揃へて、

「有難う存じます」

悦子姫「サアサア私は之からお山へ参拜を致して参ります。又歸りがけに悠くり

伺ひます、左様なら」

と早くも門口を跨げる。三人は何も云はず手を合して悦子姫の方に向つて拜んで居る。音彦は、

「サア、加米彦、夏彦出陣だ」

と悦子姫の後に従ひ舊來し道に引返し、四人は又もや道に這ひ出た急坂の木の根の段梯子を渡つて奥へ奥へと登り行く。

(大正一一・四・二四 舊三・二八 北村隆光録)

第三章 神命〔六三一〕

賤が伏家を後にして、悦子姫の一行は、胸突坂をテクテクと、梯子登りに登り行く。日は西山に傾きて、晝さへ暗き深山を、黒く色彩る群鳥、埒尋ねて右左、ガアガアガアと舞ひ狂ふ、見上ぐる空に鷹鳶、羽一文字に展開し、悠悠迫らず空

中を征服せる態度を示し居る。

加米彦「ヤアこれは大變、大切な一張羅の宣傳使服に鳶の奴、糞をかけよつた。

實に糞瀧の至りだ。オイ鳶の奴、不都合千萬、一先づ此方へ引き戻せ、天地の道理を説き諭して呉れうぞ」

夏彦「アハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、」

音彦「何とか言はねば蟲の納まらぬ男だなア、何程人間が偉いと云うても、空中を自由自在に翱翔するだけの神力は無いから、黙つて泣き寝入るが利巧だなア」

加米彦「エ、忌々しい、音彦さま迄が鳶の應援をしたり、水臭い人だ。糞忌々し

い、ア、臭い九歳の十八歳だ」

音彦「大變其邊が暗くなつて來たぢやないか、道で紛失しないやうに、二尺位距離を保つて行く事にしよう」

加米彦「何程暗くつても、【苦樂】を共にする吾々宣傳使だ、かういふ時には加

米彦には大變都合がよい哩、無形に見ると云ふ天眼通が開けて御座らぬダ。オ

イ夏彦、俺の腰を捉まへて來るのだぞ、貴様は體が小さいから、ひよつとすると

落の葉の下にでもなると、分らぬやうになるからなア

夏彦「お前、それでもエロ―體が動揺して居るぢやないか、何れ歩行すれば全身

は動揺するものだが、お前の動揺振はチト變だぞ、慄うとるのぢやないかな

加米彦「何うでもよいワ、確りと俺の腰を捉まへて居るのだ、放しぢやならぬぞ

夏彦「ハ、ハ、ハ、随分負けぬ氣な男だなア、怖いのだらう

加米彦「こわいともこわいとも、踵の皮が大變硬い哩

音彦「悦子姫さま、かう闇の帳がピタリと降りては仕方が無いぢや御座いませぬ

か、夜になると目の見えない人間は不自由ですなア

悦子姫「何處か適當な場所を夜を明かしませうか、最早山も半分ばかり登つたや

うですが、どうせ今日參拜を済まして歸る譯には行きますまいから

加米彦「ア、目の見えぬ人間は氣の毒なものだ、盲千人の世の中とはよくも云つ

たものだ。目明き一人の加米彦も仕方が無いワ、交際に此處で御輿を下さうかい

夏彦「オイ加米彦、何を云ふのだ、實際目が見えるのか

加米彦「見えるとも見えるとも、目の見えぬ奴は盲ぢやないか

夏彦「ハ、ア此奴は四つ足身魂だな、暗がりで見える奴は狐、狸、鼬か猫か、又違つたら虎、熊、狼と云ふ代物だ。オイ四足先生、今日は十分威張るとよい哩、何處ぞ其邊に免でも居つたら探して丸喰ひなとして來い」

加米彦「誰だつて目は見えるが、それや火を點すか、夜が明けた上のこつた、アハ、ハ、ハ、ハ」

夏彦「大分四足が徹へたと見える哩、ソナラもう四足の稱號だけは只今限り、特別の仁慈をもつて解除してやらうかい」

加米彦「大きに憚りさま、今は他人ぢや、放つて置いてくれ、又御親類になつたら宜敷うお願い申します、オホ、ハ、ハ、ハ」

悦子姫「モシモシ加米彦さま、夏彦さま、さう喧しう仰有ると此お山には「だいじや」が澤山居ますから、些と「おとな」しうなされませや」

加米彦「ハイハイ、何が來たつて「だいじや」御座いませぬ、元來が豪膽不敵な性質、長の先生、千匹や萬匹束になつてお出になつても、些とも「おろちい」事はありませぬ哩」

音彦「エ、喧しい哩、沈黙々々」

茲に四人は去年の名残の枯草の交つた、中年増の頭髮のやうな芝生の上に、右腹を下に足を曲げ體を「さ」の字形につがねて靜かに寢につきたり。

梢を傳ふ猿の群、幾百とも知らず、前後左右にキヤツキヤツと亡國的の啼聲を出して淋しさを添へてゐる。風も吹かぬにザアザアと大蛇の草野を渡るやうな聲、虎狼の唸るやうな怪聲、遠近に聞え來たり、大木を捻折る音、大岩石の一度に崩壊する如き凄じき物音に加米彦は目を覺まし、小聲になつて夏彦の耳に口を寄せ、「オイ、なゝ夏、夏、夏彦ヤイ」

齒、力チ力チ力チ、

「オ、起きぬかい、あの音、きゝ聞きよつたか」

夏彦「喧しう云ふない、悦子姫様の安眠の妨害になるぞ、貴様コンナ深山に來たら是位の事はありがちだよ、キヤアキヤア云うて女でも締め殺すやうな聲のするのは、あれや猿の群だ、ザアザアと音のするのは大蛇隊の大活動の音だ、オンオンと唸つて居るのはあれや狼や熊の先生の「いきつ」て居るのだよ、木の枝

が裂けるやうな音がしたり、岩石が崩壊したりするやうな聲が聞えるのは鼻高の悪戯だ、惟神靈幸倍坐世を口の中で唱へて早く寝ぬかい」

加米彦「寝と云つたつて、コンナ氣味の悪い處で安眠も出來ぬぢやないか」

夏彦「お前は罪障の深い罪の重い代物とみえる哩、梟鳥は夜分になると噪いで晝はコンモリとした木の枝に小さくなつて大きな眼を剥いて慄うて居るが、お前はそれと正反對な晝になると滅多矢鱈に噪ぎ廻し、夜になると蛭に鹽を吞ませたやうに、百足に唾を吐きかけたやうに弱つて仕舞ふのだな、強弱のハ一モ二イが取れぬ男だ。マアマア俺の體にでも喰ひついて慄ひもつて寝るがよい哩」

加米彦「頼む頼む、併しながらコンナ事を、音彦や悦子姫さまに云うて呉れては困るよ、極秘にしてお前の腹へ仕舞つて置いて呉れ」

夏彦「ヨシヨシ、承知した、その代り餘り晝になつて無茶苦茶に噪ぐと素破抜くからさう覺悟して居れ、何と云つても鎌の柄を俺が握つて、切れる方をお前が掴みて居るやうなものだからなア、アハ、ハ、ハ」

加米彦「ソナナ大きな聲で笑ふない、安眠の妨害になるぞ、サアサア寝よう」

夏彦は早くも高鼻をかいてゐる。加米彦は三人の中央に挟まつて夜の明くるのを今や遅しと待つて居る。怪しの聲は間斷なく、且つ時々刻々に強烈に聞え来る。春の夜は明け易く、闇の帳はいつしか空に捲くり上げられた。百鳥の聲は噪がしく囀り初めたり。それと同時に今迄の巨聲怪音はピタリと止まりぬ。加米彦は又もや元氣回復し、

「ア、春の夜と云ふものは短いものだな、今其處に倒けたと思へばもう夜が明けよつた。サアサア音彦さま、目を開けて手水でも使つて登山しませうか、もうこれだけ「ぐつすり」寝たら晝の疲れもやすまつたでせう。私も潰れる程よく寝て仕舞ひました」

夏彦「オ、本當に皆よく寝ましたな、併しこの中に於て一人不寝番を務めて呉れた忠實なお方がありますよ、悦子姫さま、どうぞ論功行賞に漏れないやうに頼みますぜ」

加米彦「ウンさうさう、雀の奴に、鳥の奴、寝る時にチウチウガア云うて居つた。矢張吾々のために不寝番を務めて呉れたと見え、相變らずチウチウカア力

アと忠勤振を發揮して御座る。【ひとり】や二【とり】や、三羽や四羽の鳥ぢやない、何千とも知れぬ程の鳥ぢや」

夏彦「へん誰も聞くものがないのに【やもめ】の行水ぢやないが、一人湯取る哩、ハ、ハ、ハ、ハ」

悦子姫「彌、新しい光明が頂けました。サアサア幸ひ此處に湧いて居る清水で水を使つて、神様に祝詞を奏上しませう」

と傍の清水に口を嗽ぎ手を洗ふ。三人も影の形に従ふ如く同じ事を繰返したり。祝詞の奏上も無事に済み、四人は腰の皮包より焼き飯を出して手軽く朝餉をすまし、悦子姫の先頭にて頂上目蒐けて行進。間もなく頂上に達したり。

年経りたる老樹の茂みを透かして田邊の海はキラキラ光り、船の白帆は右往左往にまたたき居たり。

加米彦「何と云ふ絶景でせう、悦子姫さま、音彦さま、暫く汗が乾く迄御輿を下して呼吸を調べ、其後に御祈念にかかりませうか」

と皆まで云はず、どつかと腰を下し足を投げ出し、膝頭を揉み居る。悦子姫は徐々

と神前に進み、何事が頻りに暗祈黙禱しつつありき。

加米彦「遠く瞳を放てば千山萬嶽重疊として際限無く、各自にその容姿を誇り顔に、特徴を發揮して居る哩。近きは青く、或はコバルト色に山容を飾り、紺碧の海は眼下に輝き、天は薄雲の衣を脱ぎ、奥の奥の其奥迄地金を現はして居る。其中心に名物男の加米彦が大の字になつて、宇宙の森羅万象を睥睨して居る。此場の光景は恰も一幅の宇宙大活人畫のやうだ。天は廣々として際限なく、海は洋々として極まりなし、燕雀何ぞ大鵬の志を知らむ。エイ、燕の奴、小雀の餓鬼、喧しい哩、些と沈黙を守らないか、安眠の、オツトドツコイ悦子姫様が暗祈黙禱の妨害になるぞ」

音彦「コラコラ加米彦、お前こそ妨害になる、些と言靈を愼まぬか」

加米彦「ハイハイ早速言靈の停電を命じます」

悦子姫「サアサア皆さま下向致しませう」

加米彦「モシモシ、一寸待つて下さい、折角苦勞艱難をして頂上を突き止め、祝詞も上げずお祈りもせぬ先に下向されては、何しに此處迄やつて來たのか譯が分

りませぬ、どうぞ暫くの間御猶豫を願ひます」

悦子姫「妾は今重大なる御神勅が下りました、一刻も猶豫をする事が出来ませぬ、一足お先に女の足弱、下向致します。貴方方は悠くり祝詞を上げ、後から追ひついて下さい、アリヨウス」

加米彦「エ、仕方がない、肝腎の女王に見限られては浮かぶ瀬がない。何事も簡単に尊ぶ世の中ぢや、繁文縟禮的の祝詞は略しまして、道々祝詞を奏上しながら下向致します、時間の經濟上一擧兩得だ」

と周章狼狽き悦子姫の後を追うて、口に祝詞を稱へながら、下り坂を地響きさせつつ駆け下る。

音彦、夏彦は悠々と天津祝詞を奏上し神言を上げ、恭しく再拜拍手の式を終へ下向の途につく。

山の五合目邊りにて一行の足は揃ひたり。これより、加米彦は先頭に立ち綾の聖地を指して宣傳歌を謠ひながら進み行く。

(大正一一・四・二四 舊三・二八 加藤明子録)

第二篇 再探再險

第四章 四尾山（六三二）

天と地との神の水火 うまらにつばらに大八洲

天の沼矛の一雫 自轉倒島の眞秀良場や

青垣山を繞らせる 下津岩根の貴の苑

此世を治むる丸山の 神の稜威は世繼王山

力隠して桶伏の 丸き姿の神の丘

黄金の玉の隠されし 貴の聖地の永久に

動かぬ御代の神柱 國武彦の常永に

鎮まりましたして天翔り 國かけります神力を

潜めて茲に彌仙山
 木の花姫の生御魂
 埴安彦や埴安姫の
 神の命の建てましし
 神の都の何時しかに
 開けて榮ゆる梅の花
 薰り床しき松の世の
 彌勒の御代に老松の
 茂る川邊や小雲川
 清き流れの底深く
 四方の神々人々の
 靈魂を洗ふ白瀬川
 神の仕組に由良の
 ほまれを流す生田川
 イクタの悩み凌ぎつつ
 神素盞鳴大神は
 天と地との神柱
 堅磐常磐に建て給ふ
 暗を晴らして英子姫
 萬代壽ぐ龜彦が
 鶴の巢籠る松ヶ枝に
 千代の礎固めつつ
 此世を紊す曲津神
 鬼雲彦を言向けて
 四方に塞がる叢雲を
 神の伊吹に吹拂ひ
 清めにや山家の肥後の橋
 神子坂橋の手前まで

スタスタ來る宣傳使 朧にかかる月影を

透して向ふを眺むれば 蟲が知らすか何となく

心にかかる春霞 シカと見えねど陽炎の

瞬く間もなく宣傳歌 耳さす如く聞え來る

ツと立止まり道の邊に 様子窺ふ折もあれ

夜目にシカとは分らねど どこやら氣分が悦子姫

床しき影とおとなへば 案にたがはぬ麻柱の

神の司の悦子姫 川瀬も響く音彦や

まだシーズンは來らねど 名は夏彦や加米彦の

隨從の影は四人連れ 情無き浮世に揉まれたる

心の底のつれづれを 徒然草を褥とし

互にあかす物語 神徳照らす一イニウ三四

五の御靈の六人連れ 七度八度九十

百度千度萬度 龜と加米との呼吸合せ

顯幽二界に出没し

五六七の御代を來すまで

心の帯を堅く締め

盡くさにや山家の道の邊に

深き思ひを残しつつ

東と西へ別れ路の

積る願ひの山坂を

さらばさらばの聲共に

別れ行くこそ雄々しけれ

悦子の姫はスタスタと

三人の益良夫伴ひて

胸突坂を辿りつつ

心の空に浮かぶ雲

英子の姫の御言葉

由縁ありげに味はひつ

霞を辿る心地して

いと勇ましくかけて行く

山の老樹は大空を

封じて月日を隠しつつ

深き仕組を包むなる

躑躅の花のここかしこ

胸もいろいろいる亂れ咲く

咲耶の姫を祀りたる

木の花匂ふ神の山

惠も高き須彌仙の

山の麓に來て見れば

ア、天國か樂園か

山と山とに挟まれし

あをむぎばたけなたねばな
青麥畑菜種花

げんげ
紫雲英の花も咲きみちて

こころもち
心持よき花むしる

てふま
蝶舞ひ遊ぶ神苑に

こころ
心も赤き丹頂の

つる
鶴の下りたる如くなる

けしきなが
景色眺めて賤の屋の

ほそ
細き煙も豊彦が

ゆき
雪を欺く白鬚を

をりから
折柄吹き来る春風に

いぢらせ乍らコツコツと
「あかざ」の杖にすがりつつ

かみ
神の使ひか眞人か
やつれし人に似もやらず

あふうそな
威風備はる翁どの
頼むとかけし言の葉の

せつな
刹那の風に煽られて
心もそよぐ悦子姫

かみ
神にひかるる思ひにて
伏屋の前に来て見れば

さんぐわつみつか
三月三日の菱餅に
紛ふべらなる門の戸に

おどろ
驚き乍ら何氣なう
表戸開く音彦が

よしこ
悦子の姫を伴なひて
しけこき小屋の上り口

やす
休らふ折しも老夫婦
蝶よ花よと育みし

生命と頼む掌中の
娘のお玉が病氣の

心にかかる物語
うまらにつばらに宣りつれば

慈愛の権化の悦子姫
眞玉手玉手さし延べて

娘のお玉を撫でさすり
首を傾けとつおいつ

老の夫婦に打向ひ
豊彦豊姫お玉さま

必ず心配遊ばすな
一生癒らぬ脹れ病

生命にかかる氣遣ひは
【ない】た涙を晴らしませ

嚴の御靈の大神が
五六七の御代の礎と

神の水火をば固めまし
お玉の方の體を藉り

三つの御靈の睦み合ひ
宿りましたる神の御子

人の呼吸にて固めたる
曇りの多き魂でない

水晶玉のミツ御靈
嚴の御靈を兼ねませる

三五の月の大神の
教を守る神人の

今日は嬉しき誕生日
黑白も分かぬ暗の夜も

愈いよいよ開あき春はるの空そら　ア、惟かむながらかむながら神かみ々々

御みたま靈ささち幸ははひましませと　祈いのる折をりしも忽たちまちに

ホギヤアホギヤアと産うぶの聲こゑ　爺ぢぢと姿ばばアは云いふも更さら

おつたま消げたるお玉たままで　妊おと娠とがしてから十八月じふやつき

神かみの惠めぐみに恙つつがなく　生うみ落おとしたる音おと彦ひこや

萬よろづよ代いは祝いはふ加か米め彦ひこが　手ての舞まひ足あしの踏ふむ所ところ

知しらぬ許ばかりに雀こをどり躍し　芽め出で度たい芽め出で度たいお芽め出でたい

千ち代よに八や千ち代よに伊い勢せ蝦えびの　曲まがつた腰こしの夏なつ彦ひこが

百ももの齡よはひを重かさねつつ　ピンピンシヤンと跳はねまはる

此この瑞ずあし祥しやうのミツ御みたま靈ま　悦よし子この姫ひめの計はからひに

玉たま照てる姫ひめと命めい名めいし　述のぶる挨あい拶さつそこそこに

口くち籠ごもりたる涙なみだ聲こゑ　涙なみだの雨あめを凌しのぎつつ

門かど口ぐち出いづる四よつの笠かさ　四よつつの杖つゑは地ちを叩たたき

春はるの霞かすみに包つつまれて　笠かさは空くう中ちゆうに揺ゆらぎ行ゆく

夜は烏羽玉と暮れ果てて
一夜を明かす森の中

鴉の聲と諸共に
又もや進む四つの杖

彌仙の山の絶頂に
四足の草蛙に恙なく

七尺餘りの身を乗せて
神の御聲を笠の内

嚴の御前のいと清く
鬼も大蛇もコンパスの

谷間を指して下り行く
茲に四人の一行は

峰の嵐に送られて
老木茂る谷路を

流れに沿ひて逸早く
進み進みて檜山

神の恵の木の花も
一度に開く梅迫や

道も直なる上杉の
郷を後に味方原

深き仕組は白瀬川
浪音高き音彦が

加米と夏とを伴なひて
悦子の姫を守りつつ

綾の聖地に上り来る
珍の御言を蒙りし

悦子の姫の胸の内
うちあけかねし苦みは

神かみより外ほかに世よの人の計はかり知しられぬ仕組しぐみなり

ア、惟かむながらかむながら神々々かむながらかむながら 御靈幸みたまさちはひましませよ。

悦子姫よしこひめは、世繼王山よつわうざんの麓ふもとに、神かみの大命たいめいを被りかうむて、加米彦かめひこ、夏彦なつひこ、音彦おとひこに命めいじ、

些ささやかなる家いへを作つくらしめ、ここに國治立命くにいはるたちのみこと、豊國姫命とよくにひめのみことの二神にしんを鎮祭ちんさいし、加米彦かめひこ、

夏彦なつひこをして之これを守まもらしめ、自みづからは音彦おとひこを伴ともなひ、神素盞鳴大神かむすさのをのおほかみの隠かくれ給たまふ近江あふみの

竹生島ちくぶしまに出立しゅつたつせむとする折をりしも、悦子姫よしこひめの在處あrikaを尋たづねて來きたる四人よにんの男女だんぢよ、日ひは漸やうや

く西山せいざんに没かくれし黄昏時たそがれどき、門もんの戸とを叩たたいて、

「モシモシお尋たづね申まをします。此このお家うちは悦子姫様よしこひめさまのお館やかたでは御座ございませぬか」

と優やさしき女をんなの聲こゑ。

加米彦かめひこ「ヤアどこやらで聞きいた事ことの有ある様やうな聲こゑだ……おい夏彦なつひこ、表おもてを開あけて見みよ」

夏彦なつひこ「此木このきの生はえ茂しげつた山やまの裾すその一軒家いっけんや、薄暗うすくらくなつてから、女をんなの聲こゑを出だして尋たづ

ねて來くるよな者ものは、どうせ本物ほんものであるまい……加米彦かめひこ、御苦勞ごくらうだが開あけて下くださら

ぬか。私わしは又また彌仙山みせんざんの様やうな聲こゑがすると困こまるからなア」

加米彦「エー氣の弱い男だなア。晝になるとビチビチはしやいで、夜になると悄氣て了ふ加米彦……オツトドッコイ夏彦の様な男だなア」

夏彦「ハ、ハ、ハ、オイ加米彦、チツト勘定が違ひはしませぬか、ソナ計算をや

つて居ると、一年も経たずに破産の運命に陥り、身代限りの處分を受けますぞ」

加米彦「ナーニ、一寸神靈術に依つて、人格交換をやつたのだ。お前の肉體には

加米彦が憑り、加米彦の肉體にはお前の靈が憑つて居るのだから、所謂、お前が

戸を開けるのは畢竟加米彦が開けるのだ。……オイ加米彦の代表者、夏彦が命令

する、……早く開けないか」

夏彦「エー何とかかとか言つて、責任を忌避する事ばかり考へて居やがる。……

ア、仕方がない、ソナラ准加米彦が戸を開けてやらうかい」

と小聲に囁き乍ら、ガラリと開けた。

夏彦「ヤアあなたは紫姫様、……ヤア青彦さま、馬さま、鹿さま、久し振だ。サ

ア這入つて下さい。……オイオイ夏彦の代理、紫姫様の御光來だ。悦子姫様に御

取次を申さぬか」

加米彦「モウ人格變換だ。併し悦子姫様に申上げるのは、矢張加米彦の特權だ」と一閒に入り、

「モシモシ悦子姫さま、紫姫さま一行が見えました」

悦子姫「それは良い所へ来て下さった。實は夜前から、一寸、神界の御用があるので、鎮魂をかけて置いたのです。青彦、馬公、鹿公さんも來ましたでせう」

加米彦「ヤアあなたは變な事を仰有いますネ」

悦子姫「天眼通、自他神通の妙法を以て、人の靈魂を自由自在に使うたのです、ホ、ホ、」

加米彦「ヤアそんな事があなたに出来るとは、今迄思はなかつた。人は見掛に依らぬものですネ」

悦子姫「紫姫さまを一時も早く、私の居間へお連れ申して下さい」

「承知致しました」

と加米彦は、次の間に下り、

「ア、やつぱり女は女連れだ。モシモシ紫姫さま、悦子姫様が特別待遇を以てあ

なた一人に限り、拜謁を許すと仰せられます。どうぞ奥へお通り下さい」

紫姫「ハイ有難う御座います」

と奥の一間に姿を隠したり。

悦子姫「コレ音彦さま、加米彦さま、あなた暫く、妾の聲の聞えぬ所に居て下さい。

少し御相談がありますから……」

加米彦「女は曲者とはよく言つたものだ、ナア音彦さま、今迄は音彦々と仰有

つたが、紫姫さまがお出でになるが早いから、一寸相談があるから、聞えぬ所へ往

て下さい……ナンテ本當に馬鹿にされますなア」

音彦「何は免も角、皆さま、暫く林の中へでも往つて、面白い話でも致しませう。

何時吾々は斯うやつて居つても、悦子姫女王から、ドンナ御命令が下つて、何處

へ出張を命ぜられるやら分つたものぢやない。今の内に一つゆつくりと、芝生の

上で打解けて話を致しませうかい。青彦さま、馬さま、鹿さま、サア参りませう」

と音彦は先に立ち、半丁許り離れたる木下闇に、探り探り進み行く。

加米彦「ア、暗い暗い、丸で彌仙山に野宿した時の様だ」

夏彦 『キヤツキヤツ、ザアザア、ウンウン、バチバチ、ガラガラ……ガ、サアこれから幕開きと御座い』

加米彦 『エーしやうもない事言ふな。言靈の幸はふ國だ。併し乍ら夏彦、貴様は紫姫さまに電波を、チヨイチヨイ送つて居るが、長持の蓋だ、片一方はアイても、片一方はアク氣遣ひはないワ。モウ今日限り、執着心を棄てたが宜からうぞ』

夏彦 『何を言ひよるのだ。蛙は口から、……それや貴様の事だよ』

加米彦 『ナーニ、貴様の靈が俺の肉體に始終出入しよつて、ソナ心を出しよるのだ。貴様の靈が憑依した時の戀の猛烈さ……と云つたら、九寸五分式だ、まだも違へば軋死式、首吊り式、暴風雨地震式の戀の雲が包んで來よつて、暗愴咫尺を辨ぜずと云ふ……時々幕が下りるのだよ。もう良い加減に改心をして、俺の肉體を離れて呉れ。其代りに小豆飯を三升三合、油揚を三十三枚買つて、四辻まで送つてやる、斯れでモウさつぱりと諦めるのだよ』

夏彦 『何を言やがるのだ。勝手な熱ばかり吹きよつて、……彌仙山の極秘を、音彦さまの前で暴露しようか』

加米彦「どうなつと勝手にしたが大膽不敵の加米彦は梟鳥式だ。斯う云ふ暗夜になればなる程、元氣旺盛となつて來るのだ。彌仙山に野宿した時は、貴様の副守護神が俺の肉體に憑依しよつて、臆病な態を見せたぢやないか。他人の事ぢやと思つて居れば、皆吾が事であるぞよ、改心なされ……」

夏彦「どこまでも嚴重な鐵條網を張りよつて、攻撃する餘地がなくなつた。まつ四角な顔に四角い肩を聳やかし、四角四面な、冗談一つ言はぬ様な風を装つて居乍ら、ぬらりくらりと、まるで蛸入道の様な代物だなア。カメと云ふ奴ア、六角の甲を着て居る奴だが、此奴は二角程落して來よつた。カメと鼈との混血兒だなア。……オーさうさう混血兒で思ひ出した。コンコン鳴く奴ア、やつぱり、ケツだ。小豆飯に油揚式の靈魂だ。其勢か、能く口が滑らかににる哩」

音彦「オイ加米彦、充分に今日は氣焰を吐いて聞かして呉れ。明日はお別れせにやならぬかも分らないからなア」

加米彦「エーそれや音彦さま、本當ですか」

音彦「どうやらソナ氣配がする様だ。どうも悦子姫さまのお顔色に現はれて居

と仇笑ひつつ先に立ち歸つて行く。加米彦、門口より、

「モシモシ悦子姫様、モウ御安産は濟みましたかな、男でしたか女でしたか、…何と云ふお名をおつけになりました。…玉照彦ですか…」

悦子姫「ホ、ホ、ホ、加米さまですか。エライ失禮を致しました。サア皆さまと一緒にお這入り下さいませ」

加米彦「お役目なれば、罷り通るツ。悦子姫殿、紫姫殿、許させられえ」とワザと體を角立て、紙雛の様なスタイルで、稍反り氣味になつて、悦子姫の居間にズーツと通る。

悦子姫「加米さま、冗談も良い加減にして置きなさらぬか。妾は明早朝、音彦さまと此處を立出で、或る所へ参ります。加米彦さまと夏彦さま、どうぞ留守をシツカリ頼みます」

加米彦「へー、ヤツパリ…ヤツパリですなア」

悦子姫「エツ、何ですと」

加米彦「ヤア、何でも有りませぬ。ヤツパリあなたは神界の大切な御用をなさる

お方、到底吾々へツポコの計り知る可らざる御經綸が有ると見えますワイ」

悦子姫「ホ、ホ、ホ、」

紫姫「ホ、ホ、ホ、」

音彦「唯今承はれば、私はあなたと共に、どつかへ参るのですか」

悦子姫「ハイ御苦勞様乍ら、どうぞ妾に従いて来て下さいませ」

音彦「ハイ承知仕りました。どこまでも、神様の爲ならば、お伴致しませう」

加米彦「ヤア音彦の命、萬歳々々」

と、度拍子の抜けた大聲で呶鳴り立てる。

音彦「加米彦さま、永らく御昵懇になりましたが、暫くお別れせなくてはなりま

せぬ。どうぞ機嫌よく留守をして居て下さいませや」

加米彦「ハイハイ畏まりました。あなたも、悦子姫さまと御機嫌よく、相提携し

て、極秘的神業に御参加下されませ」

と意味有りげに、ニタリと笑ふ。

夏彦「悦子姫様、私はお伴は叶ひませぬか」

悦子姫 「ハイ有難う御座います。併し乍ら神様の御命令で、あなたは暫く、妾の
歸るまで、加米彦さまと留守をして居て下さいませ」

加米彦 「アハ、ハ、ハ、態を見い、サア明日からは此加米彦の、何事も指揮命令に
服従するのだぞ。……モシモシ悦子姫さま、どうぞあなたのお留守中は、夏彦が

吾々の命令に服従致します様に、厳しく命令を下しておいて下さい。上下の區別
がついて居ませぬと、凡ての點に於て矛盾撞着、政治上の統一を紊しますから……

……」

悦子姫 「加米彦さま、あなたお年は幾歳でしたかネー」

加米彦 「ハイ私はザツト二十才で御座います」

悦子姫 「違ひませう……」

加米彦 「イ工別に……さう澤山も違ひませぬが……精神上から申せば、先づ二十

才……現界に肉體を現はしてからは三十三年になります」

悦子姫 「それは大變な違算ぢやありませんか」

加米彦 「何分亡父が貧乏暮しをして居たものですから、素寒貧で、十三(仰山)

何事も御指導下さいませ」

夏彦「お互様に宜しうお願い致します」

悦子姫「どうぞお二人さま、公私混同せない様に頼みますで……」

二人一度に、

「ハイハイ承知致しました」

と両手を突き、今度は眞面目になつてお受をする。

紫姫「青彦さま、馬さま、鹿さま、これから妾は、悦子姫様の神様より重大なる

使命を蒙りました。明朝未明に此處を立出で、妾の行く所へ、御苦勞乍ら従いて

来て下さい。さうして青彦さまと云ふお名は、一寸都合の悪い事が有りますから、

今日限り名を改めて、日の出神様より若彦とお改へになりましたから、其お積も

りで居て下さいや」

青彦「ハイ承知致しました。何だか天の稚彦命様に能く似たよな名ですなア。嬉

しい様でもあり、悲しい様な氣持も致します。併し乍ら、何事も神命のまにまに、

絶対服従を致します。どうぞ宜しう……」

紫姫「ハイ、不束な妾、どうぞ宜しう御指導を仰ぎます。……まだ夜明けまでに

は間が御座いますれば、皆さま一休眠致しませう」

音彦「それや結構です。サア皆さま、お休眠なさいませ。お先へ失禮」

と横になつて、早くも高躰をかく。

加米彦「ナント罪のない男だなア。今物を言つて居つたかと思えば、早高躰だ。

人間も茲まで總てに超越すれば、モウ占たものだ、悦子姫様の眼力も偉いワイ」

夏彦「コレコレ加米彦さま、皆様のお就寝の御邪魔になります。あなたも早く、

おとなしくお睡眠なさい」

加米彦「コレハコレハ上官の御命令、確に遵守し奉る、恐惶頓首、アツハ、、、」

と笑ひ轉けた儘、呼吸不整調な高躰をかく。一同は之れに倣うて、残らず寝に就

きたり。

鶏の聲に目をさまし、悦子姫は音彦を伴ひ、綾の大橋打渡り、山家方面を指し

て進み行く。紫姫は、由良川の川邊傳ひに、西北指して三人の男を伴ひ、行先を

も告げずトボトボと下り行く。嗚呼、紫姫は今後如何なる活動をなすならむか。

(大正一一・四・二五 舊三・二九 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・一 王仁校正)

第五章 赤鳥居〔六三三〕

天火水地と結びたる 青赤白黄をこき交せて

緑滴る足曳の 山と山とに包まれし

由良の流れに沿ひ乍ら 彼方に立てる紫の

煙目あてに進み行く 紫姫の宣傳使

草木も萌ゆる若彦や 馬に鞭鞭つ膝栗毛

鹿と踏み締めテクテクと 肩も斑鳩、飛ぶ空を

笠西坂の頂上に 四人は漸く着きにけり。

若彦「紫姫様、此風景の佳い地點で四方の景色を觀望して息を休めませうか」

紫姫「妾もさう思つて居ました、彌仙のお山は紫のお容姿を現はし給ひ、連峰を

壓して高く雲表に頭を突出して、實に何とも云へぬ雄大さで御座いますね」

若彦「左様です、春の彌仙山は又格別ですな、彼方に見ゆる四尾の神山、コンモ

リした木の繁茂、桶伏山もちりと見えて居ます、實に遠方から見た四尾山は一

層の崇高味を増すやうですな、昨夜あの山麓の悦子姫様のお館を訪ねた時は、そ

の様に立派な山ぢやと思ひませなんだが、矢張大きなものは近寄つて見るよりも、

遠見の方が餘程真相に觸れる様ですな」

紫姫「ア、佳い景色にうたれ、思はず時間を費やしました、そろそろ出掛ませう

か」

馬公「もう些と休みていつたら如何です、之から奥へ行けば山と山と、雙方から

壓搾した様な殺風景な難路許りですよ、充分聖地を此處から憧憬して名残を惜し

み、四尾山に袂別の挨拶を終つて行かうではありませぬか、随分此先は急坂があ

りますから………」

紫姫「サア、も少し休みませうか」

鹿公「ア、さうなさいませ、充分英氣を養つて参りませう、一歩々々大江山に

接近するので、此安全地帯で充分に浩然の氣を養つて行く事に致しませ

う。然し乍ら最早大江山の鬼雲彦は遁走し、後には鬼武彦の御眷屬が御守護して

居られるなり、三嶽の岩窟は滅茶々々となり、鬼ヶ城亦鬼熊別の敗走以來、敵の

影を留めて居ないぢやありませんか、それに又貴女は吾々を此方面へ用向も仰有

らずに引き連れておいでになつたのは、少しく合點が参りませぬ、一體全體如何

遊ばす積りですか。少し位お洩らし下さつても滅多に口外は致しませぬがな」

紫姫「いいえ、悦子姫様を通じて大神様の「一切秘密を守れ」との御神命なれば、

假令貴方と妾の仲でも之ばかりは發表する事は出来ませぬ、臆て真相が分るでせ

う」

鹿公「紫姫様は、吾々二人は元來貴女の従僕、さう叮嚀なお言葉をお使ひ下さつ

ては實に恐れ入ります、何卒今後は鹿、馬と仰有つて下さいませ」

紫姫「いえいえ、今迄の妾なれば極端なる階級制度の習慣で主人氣取りになるで

せうが、三五教に救はれてより上下の隔壁を念頭よりすつかり散逸させて仕舞ひました。人間の作つた不合理な階級制度を墨守するは、却て大神様の御神慮に違反する事となりませう。元は一株の同じ神様の分霊ですからな」

鹿公「ハイ、有難う御座います。左様ならば今後は主従の障壁を撤去し、私交上に於ては平等的交際を指して頂きませう。然し乍ら教理の上の事に就いては矢張り師弟の關係を何處迄も維持して行き度う御座います、何卒之だけはお認め置きをお願ひ申します」

紫姫「何だか妾がお前さまの師匠なぞと云はれると、足の裏まで「くすぐ」つた様な氣がしてなりませぬ」

鹿公「今後は其積りでお願ひ致します、然し乍ら貴女は花の都へは歸り度うは御座いませぬか」

紫姫「それは人間ですもの、故郷に歸り度いは山々ですが、神様の御命令を完全に果さなくてはなりません、それ迄は妾は故郷の事はすつかり念頭から分離して居ます、何卒今後は故郷の事は云つて下さいますな……、サア若彦さま、参りま

せう』
と潔く驅出す。

紫姫の一行は 巖の靈や瑞靈

神の恵を河守驛や やすやす渉る船岡の

深山を左手に眺めつつ 人の心のあか鳥居

鬼武彦が眷屬の 旭明神祀りたる

祠の前に立ちどまり 行く手の幸を祈りつつ

又もや北へ行かむとす 頃しもあれや山林に

悲しき女の叫び聲 鳥の啼く音が猿の聲か

合點ゆかぬと立ちとまり 頭を傾け聞き居れば

助けて呉れいと手弱女の 正しく叫びの聲なりき。

若彦は此聲に引きつけらるる如き面持にて前後を忘れ耳をすまし居る。

馬公「モシモシ若彦さま、何を茫然として居なさる、あの聲は如何ですか、悲し
相な乙女の救援を求むる聲ぢやありませんか」

若彦「何とも合點のゆかぬ聲だ」

叫び聲は益々烈しく聞え来る。

紫姫「皆さま、御苦勞ですが妾は此祠の前で御祈念を致して待つて居ますから、
道は暗う御座いますが氣を注げ乍ら、あの聲を尋ねて實否を調べて來て下さいま
せぬか」

若彦「ハイ、畏まりました、貴女お一人此處にお待たせしても濟みませぬから、

鹿公を添へて置ませう」

紫姫「いえいえ、決して御心配下さいませ、妾は之より宣傳使となつて如何な

る魔神の中にも單騎進撃をやらねばならない者で御座います、何卒お構ひなく一
刻も早くあの聲の方に向つてお進み下さいませ」

若彦「委細承知致しました、戦況は時々刻々に報告致させます、サアサア馬公、

鹿公、サア出陣だ」

馬公うまこう「ここに馬うまが居をります、千里せんりの名馬めいば、御跨おまたがり下くださいませ、敵てきに向むかつて天晴あつぱれ名將めいしやうの武者振むしやぶりを發揮はつきするも一寸妙ちよつとめうですぜ」

鹿公しかこう「馬うまでお氣きに入いらねば鹿しかも居をります、兒屋根こやねの命みことさまは鹿しかにお乗のり遊あそばした

ぢやありませんか、成なる可べくは私わたくしに恩命おんめいを下くだし給たまはらば結構けつこうですが……」

若彦わかひこ「馬公うまこう、鹿公しかこう、馬鹿ばかくち口くちたたく猶豫いうよがあるか、サア早はやく行ゆきませう」

馬うま、鹿しか「エー、馬鹿ばか々々ばかしい、突貫とつくわんとつくわん々々、お一二いちにお一二いちに」

と暗くらがりの道みちを聲こゑをあげて進すすみ行ゆく。以前いぜんの聲こゑはピタリと止とまりぬ。三人さんにんは暗夜あんや

に方向ほうかうを失うしなひ當惑たうわくに暮くる折をりしも暗中あんちゆうに人ひとの聲こゑ、

甲かが「サア、もう之これで大丈夫だいぢやうぶだ、ああして松まつの下したに猿轡ざるくつわを箝はめて引括ひっくくつて置おけば逃に

げる氣遣きづかひはない哩わい、マアゆつくりと暗くらがりを幸さいはひ休息きうそくでも遊あそばさうぢやないか」

乙おつ「休息きうそくしようと言いつたつて俄にわかに暗くらくなつて寸魔尺すんましやくこく哭なげぢや、まるで釜かまを被かぶつた様やう

ぢやないか」

甲かが「釜かまを被かぶれば空そらの星ほしは見みえない筈はずだ、あれ見みよ、雲くもの綻ほころびからチラホラと星ほしの

光ひかりが幽かすかに瞬またたいて居あるぢやないか」

乙 何、何處もかも天地暗愴、星一つだに見えぬ悲しさだ

甲 之程立派に星が見えて居るのに貴様は又何處を向いて居るのだ、アハ、

やられ居つたな、八疊敷に

乙 八疊敷て何だい

甲 大方狸に鞆丸でも被されよつたのだらう

乙 何、ソナ氣遣ひがあるものか、ヤア方角を間違つて居つた。下ばかり見

て居つたものだから、星が見えなかつたのだ、ホんに彼方此方に星の金米糖が光

つて居る哩

甲 それこそ方角が天と地がつて居つたのだ

乙 何、地と違つた丈だよ、アハ、。然し貴様と俺と二人では彼の女を此暗

がりに昇いで行く譯にもゆかず、道で又三五教の宣傳使にでも出會つたら大變だ

からなア

甲 ちつたア出世しようと思へば之位な苦勞はせなくちや成らないよ。何時も黒

姫さまが苦勞は出世の基ぢやと仰しやるぢやないか、ソナ弱い事を言はずに、

サア之これから棒片ぼうちまきれにでも括くくりつけて、貴様きさまと俺おれとが昇あいで魔窟まくつヶ原がはらの岩窟いはやへ歸かるとしよう。さうすれば富彦とみひこだつて虎若とらわかだつて、俺達おれたちに對たいし今迄いままでの樣やうに無暗むやみに威張あらなくなるよ。吾々われわれは殊勳者しゆくんしやとして黒姫くろひめさまの信任しんにん益々ますます厚あつく、鼻高々はなたかだかと高山彦たかやまひこの御おんた

大將いしやう以上いじやうに待遇たいぐうされるかも知しれないよ、アハ、ハ、ハ、ハ、

鹿しかは俄にはかに女をんなの作り聲つくごゑを出だして、
鹿公しかこう「コレコレ、瀧公たきこう、板公いたこう、俺わしは黒姫くろひめぢや、その女をんなを大切たいせつに踏縛ふんじばつて早く昇あいで、此この黒姫くろひめの後あとに跟ついて御座ござれ、愚圖ぐづ々々くづして居をると三五あななひけう教ねがへに寢返ねがへりを打うつた青彦あへが馬公うまこうや鹿公しかこうの古今無雙ここんむさうの英雄えいゆう豪傑がうけつを引率ひきつれ、お前達まへたちの首くびを捻切ねちきるかも知しれぬ。サアサ早く用意よういをなされ、コンナ處ところで愚圖ぐづ々々くづして居をると云いふ事ことがあるものかいのう」

甲かひ「ヤ、呼よぶより誹そしれとは此處ここの事ことか、今いまの今いまとて、…へ…一寸ちよつと…貴女あなたさま様のお噂うはさを致いたして居をりました。イヤもう骨ほねの折おれた事ことで御座ございました。お節せつの阿魔女あまつちよずゐ隨ず分ぶん手が利きいて居をりましたよ」

鹿公しかこう「ア、さうぢやらう さうぢやらう、彼奴あいつは仲々なかなか手の利きいた奴やつぢや、強情がうじやうな

女ぢや、サアサア早く月の出ぬ間に用意をなされ」

甲、「乙、「ハイ、畏まりました、暫時お待ち下さいませ」

鹿公、「そのお節は何處に置いてあるのだい」

乙、「ハイハイ、此處から十間許り先方の松の木の麓に猿轡を箝ませ、手足を縛つ

て根元に確り括つて置きました」

鹿公、「それはお骨折ぢやつた、然し息の絶える様な事はして無からうな」

乙、「何、貴女、何うせ連れて歸つて殺すか、此處で殺すか、手間は同じ事ですも

の、あの通り猿轡を箝めた以上は、もう今頃はコロリといつて居るかも知れませ

ぬ」

甲、「イエイエ、滅多に死んでは居りますまい、此瀧公が息の絶れない様に、聲を

出さない様に、そこは注意周到な者です、大丈夫ですよ」

鹿公、「俺も一寸調べがてらにお前の後について行かうかな」

甲、「サアサ黒姫様、御實檢下さいませ、貴女に實地を見て貰へばお馬の前の功名

も同然、いやもう無上の光榮で御座います」

鹿公しかこう 「それはお手柄てがらお手柄てがら、サア早く見みせて下ください」

板公いたこう 「随分ずぶん險難けんなんな暗くらがり道みちで御座ございますから、私わたくしがお手てを把とつて上あげませう」

鹿公しかこう 「イヤイヤ、滅相めつさうな、年としは寄よつても未まだお前まへの様な若わかいお方かたに助たすけられる程ほど、

糞碌まうろくはして居をりませぬ哩わい、手てを握にぎられると發覺はっかくの……どつこい……八角はっかくの糞くそをこ

めて氣張きばつても……お節せつの手てを握にぎつて妙めうな事ことをするでないぞ」

板公いたこう 「阿呆あほうらしい、何なにを仰おつしやいます、ソナラ私わたくしの後あとから足音あしおとをたよつて來き

下くださいませ、ア、暗くらい暗くらい」

と探さぐり足あしに歩あるき出だす。三人さんにんは息いきを凝こらし闇やみを幸さいはひ跟ついて行ゆく。

瀧公たきこう 「オイ、板公いたこう、何どの邊へんだつたいな、あまり暗くらくつて鼻はな抓つままれても分わからぬ様やうだ、

テント方ほう向かうがとれぬぢやないか」

板公いたこう 「ヤ、此處こゝだ此處こゝだ、オイお節せつ、これから魔窟まぐつヶ原がはらの結構けつこうな處ところへ送おくつてやる

のだ、満足まんぞくだらう。オイお節せつ、返事へんじをせぬか」

瀧公たきこう 「馬鹿ばか云いうない、聲こゑをたてぬ様やうに猿轡さるべつわを箝はめて置おいた者ものが返事へんじをするものか

い、狼狽うろたへた事ことを云いふな」

板公「オ、さうだつたな、サアサアお節、解いてやらう、ヤア偉い猿轡だ、息を絶らしては面白くない、ちつと緩めてやらう、ヤア暖いぞ暖いぞ、確かに此耆婆扁鵲の診察に依れば極めて安心だ。恢復の見込たしかだ。豫後良だ」

馬、妙な聲を出して、

「ヒュー、ドロドロドロ、怨めしやア、假令生命はとらるとも、魂魄此土に留まりて、瀧公、板公の素首引き抜かいでやむべきか……」

瀧、板は、

「ヤア、出やがつた、こいつア堪らぬ」

と無茶苦茶に駆け出す。過つて傍の谷川へザンブと二人は陥ち込みたり。

馬公は手早く綱を解き猿轡を外し、

「ヤアお節さま、しつかり成さいませ、もう大丈夫です」

お節は初めて気が付いたと見え、

「何、汝悪神の家來共、もう斯うなる上はお節が死物狂、目に物見せて呉れむ」

馬公「ヤア、それは違ひます、私は三五教の馬と申すもの、貴女のお聲を尋ねて

お助けに來たのです、御安心なさいませ。今二人の悪者共は驚いて逃行く途端に、此谷川へ落ち込みました。あまり暗いので如何なつたか知りませぬが、吾々は決して悪者では御座いませぬ。サア鹿公、若彦さま、此お節さまの手を引いて廣い道まで連れて行つてあげませうか」

お節は初めて安心の態、

「これはこれは危い處をようこそお助け下さいました。ア、神様有難う御座います」

と天に向つて合掌し感謝する折しも、山を覗いて出る半圓の月、忽ち道は判然と見え出しにける。

馬公「ア、有難いものだ、これで安心だ、サア早く、紫姫さまがお待ちかね、参りませう」

とお節の手を把り、四人は紫姫の暗祈黙禱を凝らす祠の前にやつと歸り來たりぬ。

鹿公「紫姫様、鹿の野郎が功名手柄、お褒め下さいませよ。目的物は首尾よく手に入りました」

紫姫「ア、それはそれは、御苦勞様、何處のお方だつたか知らぬが危い處で御座いましたな」

お節「ハイ、有難う御座います、力と頼むお爺さまには死に別れ、お婆アさまにも亦死別れ、今は頼りなき女の一人暮し、許婚の妾が夫の後を慕ひ、聖地向つて進み来る折しも、道に踏み迷ひ魔窟ヶ原を通りました。所が後より「オーイオー」と男の聲、何は免もあれ、怪しき奴と一生懸命に長い道を此處まで逃げて参りました、折あしく道中の岩石に躓きバタリと轉けて倒れた所を、追ひかけて来た二人の男、折り重なつて妾を高手小手に縛り、松の木の麓に連れて行つて、打つ蹴る殴るの亂暴狼藉、妾は力の限り何れの方かお通りあらばお助け下さるであらうと、女々しくも聲をたてました。さうすると二人の悪者は妾の口に箝ます猿轡、最早叶はぬと觀念の目を睜り、氣も鈍くなります際、思はぬお助けに預かりました。此御恩は死すとも忘れませぬ、皆様能くお助け下さいました」と嬉し涙に泣き伏しける。

鹿公「モシ若彦さま、察する處貴方の「れこ」ぢやありませんか」

「ハイ……」

と云つたきり若彦は俯向き居る。

鹿公「アハ、ハ、これはこれは、お恥しう御座るか、久し振りの戀女房の對面、

柔和しい言葉の一つも掛けておあげなさつては如何ですか、吾々が居ると思つて

云ひ度い事も能う云はず、泣き度うても能う泣かず、吾と吾心を詐つて居らつし

やるのでせう。吾々であつたなればソナ虚偽な事は致しませぬワ、ア、お前

は女房か、能うマア無事に居て呉れた、これと云ふも神様のお蔭、會ひたかつた

會ひたかつた」としつかと抱きしめ嬉しめ涙に暮れにけり……と云ふ場面だ。吾々

は暫く退却を致さう、ナア若彦さま、お節さまとゆつくり程經し思ひ出の物語、

しつぱりとなされませや、ずつしりとお泣き遊ばせ、紫姫さま、馬公、暫く氣を

利かせませう」

若彦「イヤ有難う御座います、皆様のお蔭、斯様な處でお節殿に會ふのも神様の

お攝理で御座います。もしもしお節どの、私を覚えて居ますか、青彦ですよ」

お節「ア、貴方が青彦さま、お懐しう御座います。能うマア無事で居て下さいま

した」

と嬉しさに前後を忘れ、青彦の手に獅噛み付く様に身體をもだえ泣き叫ぶ。

鹿公「カチカチ、観客の皆さま、これで幕切と致します。今後の成行は又明晩續き物として演じます、何卒不相變御鼻肩を以て賑々しく御入來あらむ事を偏に

希ひ上げ奉ります、アハ、ハ、ハ、」

紫姫「オホ、ハ、ハ、ハ、鹿公、時と場合に依ります、洒落もいい加減にしなさいや」

馬公「オイ鹿、何を云ふのだ、サアサア皆さま、月も出ました、もう一息だ、天の岩戸まで急ぎませう」

(大正一一・四・二五 舊三・二九 北村隆光録)

第六章 眞か偽か〔六三四〕

紫姫は紫の姿を装ふ彌仙山

四尾の山や桶伏の珍の聖地を伏し拜み

西坂峠を後に見て若葉もそよぐ若彦や

心の馬公鹿公を伴ひ進む春の道

山追々と迫り来る心も細き谷道を

傳ひ傳ひて河守の里を左手に打ち眺め

船岡山を右に見て日もやうやうに酉の刻

暗の帳はおろされて一行ゆくてに迷ひつつ

道のかたへの小やけき神の祠に立寄りて

息を休むる折柄に俄に女の叫び聲

紫姫は立ち上り耳を傾け聞き終り

若彦、馬、鹿三人を聲する方に遣はして

様子探らせ調ぶれば思ひがけなき愛娘

闇の林に縛られて息絶え絶えと苦しみの

中を助けて三人が

忽ち登る月影に

心照らして歸り来る

何處の方と訪へば

若き女の物語

驚く若彦一同は

互に労りかばいつつ

月の光を力とし

四邊に注意を爲し乍ら

劍尖山の麓なる

珍の聖地に立向ふ。

三男二女の一隊は、月もる山道を漸くにして皇大神を齋き祀れる大宮の前に無

事参向する事を得たり。水も子の刻丑の刻と夜は段々と更け渡り、涼々たる谷川

の水の音を壓して聞え来る祈りの聲、凄味を帯びて許々多久の、鬼や大蛇や曲津

見の、靈寄り來む言靈の濁り、清き流れの谷川にふさはしからぬ配合なり。

紫姫「皆様、妾は神様のお告により、半日許り此お宮の中で御神勅を承はらねば

なりませぬ、何卒其間、産釜、産盥の河原の谷水に御禊をなし、神言を奏上して

待つて居て下さいませ」

わかひこ 若彦「委細承知仕りました。サアサア馬公、鹿公、お節殿、参りませう」
と神前の禮拜を終り天の岩戸の下方、紫姫が指定の場所に進み行く。夜はほのぼ
のと明けかかる。谷の向岸を見れば一人の女、二人の従者らしき者と共に産釜、
産盥の水を杓にて汲み上げ、頭上より浴び、一生懸命皴枯れた聲を絞つてウラナ
イ教の宣傳歌を唱へ居る。四人はつかつかと進み寄るを、婆アは頻りに四人の來
たのも知らずに水垢離を取り居たり。
馬公「モシモシ何處の婆アさまか知らぬが、この聖地へやつて来て、勿體ない神
様の御手洗を無雑作に頭から被り、怪體な歌を謠うて何をして居るのだ、些と心
得なさい」

婆、水を被りながら、

「何處の方か知らぬが、神様のため世界のために誠一心を立てぬく、日本魂の生
粹の眞正の水晶魂の守護神さまの命令によつて、この結構なお水で身魂を清め、
結構な歌を宇宙の神々に宣べて居るのに、お前は何を云ふのだい、結構な言靈が
お前には聞えぬのかい」

馬公「一向トンと聞えませぬ哩、何だか其言靈を聞くと悪魔が寄つて来るやうだ」
鹿公「オイ馬公、野暮の事を云ふない、牛の爪ぢやないが先から分つて居るぢやないか。悪魔の大將が、悪魔の乾兒を集めやうと思つて全力を盡し、車輪の活動をやつて御座るのだ、人の商賣を妨害するものでないぞ」
馬公「別に妨害はしようとは思はぬが、アンナ聲出しやがると何だか癢に觸つて、反吐が出さうになつて來た。オイ婆アさま、もう好い加減にやめたらどうだい。この産盃はお前一人の専有物ぢやないぞ、好い加減に退却したらどうだい」
婆「何處の若い衆か知らぬが老人が世界のため道のため、命がけで修業をして居るのだ。私の言靈が偉いお氣に觸ると見えるが、それは無理もない、お前に憑いて居る悪魔が恐れて居るのだ、其處を辛抱して暫く私の言靈を謹聽しなされ、さうして修業の仕方私の方を私の手本として頭の先から足の裏まで、一分一厘の垢もない處まで落しなされ、さうしたら結構な結構なウライナイ教の神様のお道へ入信を許して上げる。今時の若い者は何でも彼でも新しがつて昔の元の根本の神様の因縁や性來を知らず、誠の事を云うてやれば馬鹿にしてホクソ笑ひをする者

許りぢや、十萬億土の根の國、底の國へと落されて、萬劫末代上られぬやうな目に遇ふもの許りぢやから、それが可憐相で目を開けて見て居れぬから、世界の人民の身魂を立替立直し、大先祖の因縁から身魂の罪障の事から、何も彼も説いて聞かして助けてやる結構のお道ぢやぞよ。お前も縁があればこそ、コンナ結構な私の行を見せて貰うたのぢや。ちと氣分が悪うても辛抱して聞きなされ」

馬公「それは大きに御親切に有難う、私も元は都で生れたものだが、御主人の娘さまと比沼の眞名井山へ參拜しようと思つて行く途中で、大江山の鬼の乾兒に欺され、岩窟の中に放り込まれ、エライ目に遇つた。そこへ偉い人が出て来て私を助けて下さつたので、何でも此邊に結構な神様が御座ると聞いてお禮詣りに來たのだよ」

婆は、一生懸命に水を被りながら此方も向かず聲を當に、

「さうだらう、さうだらう、眞名井山に詣つてお蔭どころか、鬼の岩窟へ釣り込まれたのだな。眞名井山と云ふのは、それや云ひ損ひぢや、あれは魔が井さまと云うて神様の擬ひぢや、變性女子の三つの御靈と云うて、どてらい惡神が變性男

子の日本魂の根本の生粹の神様の眞似をしよつて、善に見せて悪を働いとるのぢや、暫く待ちなさい、私が結構の事を教へて上げる、三五教とやら云ふ教は三五の月ぢやと云うて居るが、三五の月なら満月ぢや、片割れ月の變性女子だけの教が何になるものか、雲に隠れて此處に半分、誠の經綸が聞きたければ私について御座れ、三千年の長い苦勞艱難の一厘の經綸を、信仰次第に依つて聞かして上げぬ事もない、マア其邊にへたつて此方の修業がすむまで待つて居なさい」

と又もや婆は頻りに水を被る。二人の男も影の形に従ふやうに、水を汲み上げてはザブザブと黒い體に浴びせて居る。婆は漸く水行を終り、頭の先から足の裏迄すつくり水氣を拭ひ取り、念入りにチヤンと風を整へ、紋付羽織を着用に及び、二人の男を伴ひ、谷川の足のかかる石を、蛇が蛙を狙ふやうな眼つきで、ポイポイと免渡りに渡りつく。お節は腰を折り兩手をもみながら、

「黒姫の先生様、久しうお目に掛りませぬ、お健康でお目出度う」

黒姫「ヤアお前は才、お節ぢやつたか、何と云つてもかと云つても、ひつ括つても捉へてでも、聞かさにや置かぬは女の一心、大慈大悲の心をもつて助けてや

らうと、瀧、板の二人に跡を追はせたが、何處をお前は迂路ついとつたのだ工、サアサア私について御座れ。ヤアお前は青彦ぢやないか、三五教に呆けてまだ目が醒めぬか」

若彦「ハイ有難う、お蔭ではつきり目が醒めました」

黒姫「さうだらう、若い者は能う氣の變るもので、彼方へ迂路々々、此方へ迂

路々々して仕方の無いものぢや、お前を助けてやり度いと思つて、どれだけ骨を

折つたか知れたものぢやない。サア悠くりと私の所までお節と一緒に出来な

れ、三五教も、一寸尤もらしい事を云ひよるが、終には箔が剥げて何程金太郎の

お前でも愛想が盡きたらう、肝腎要の嚴の靈の本家を蔑にして、新米の出来損ひ

のやうな三五教に呆けて見た處で、飯に骨があつて喉に通りやせまいがな。一杯

や二杯は珍らしいので喉にも觸らないで鵜呑みにするが、三杯目位からは、二チ

ヤづいて舌の先にザラザラ觸り、それを無理に呑み込めば腹の具合が悪くなつて

下痢を催し、終の果にはソレ般若波羅蜜多と云うて腹を撫でたり、尻の具合迄悪

くして雪隠へお千度を踏み、オンアボキヤ、ビルシヤナブツ、マカモダラニブツ、

チンラバ、ハラバリタヤと、陀羅尼を尻が稱へるやうになつて仕舞ふ、さうぢやから食つてみにや分らぬのだ。加減の好いウラナイ教の御飯を長らく食べて居つて、榮耀に剩つて餅の皮を剥ぎ、まだ甘い事があるかと思つて、三五教に珍しい食物があるかと這入つて見たところ、味もしやしやりも有りやせまいがな、三五教ぢやなく、味無い教ぢや、ア、よい修業をして御座つた。よもや後戻りはしやしまいなア」

若彦「ヘイ、何うして何うして三五教ナンか信じますものか、これから貴方の使に従つて、犬馬の勞をも惜しまぬ覺悟でございます」

黒姫「それは結構ぢや、お節、あの頑固な爺や婆アが、國替したので悲しいやら嬉しいやら、好きな青彦と氣樂に添はれるやうになつたのも、全くウラナイ教のお蔭ぢやぞエ、あのマア何と好う揃うた若夫婦ぢやなア」

と打つて變つて機嫌を直し、青彦の背中をポンと叩いて笑ふ。

馬公「お安くない所を拜見さして貰ひましてイヤもう羨望萬望の次第で御座います」

鹿公しかこう「何なんと妙めうぢやないか、此こ處こには産釜うぶがま、産盥うぶだらひと云いうて眼鏡めがねのやうに夫婦めをとの水溜みづたまりが綺麗きれいに湧わいて居をる、河かはを隔へだててお節サンせつさんに若彦わかひこ、オツトドツコおをひこイ青彦あをひこさま、何なんと好よい配はい合がふだ、俺等おれたちも早はやく誰人だれかの媒妁なかくどで配偶はいぐうしたいものだ、ナア馬公うまこう………」
黒姫くろひめ「お前まへは初はじめて見みた方かたぢやが、青彦あをひこの弟子でしぢやな、さうして名なは何なんと云いふのぢや、最前さいぜんから聞きいて居をれば四足よつあしのやうな名なを呼よびて御座ござるが、本當ほんたうの名なで聞きかして下ください、大方おほかた副守ふくしゅ護神ごじんの名なだらう、一寸ちよつと見みたところでは馬鹿うましらしいお顔かほぢや、何程なにほど立派りつぱな女房にようぼうが欲ほしいと云いうても、そのスタイルでは駄目だめぢやなア、四足よつあしの守しゅ護神ごじんをこれからウラナイ教けうで追おつ放ほり出だして、結構けつこうな龍宮りうぐうの乙姫おとひめ様の御眷屬ごけんぞくを守しゅ護神ごじんに入いれ替かへて上あげよう、何どうぢや嬉しいか、恥はづかしさうに男をとこだてら俯うつむいて、氣きの弱よわい事ことだ。併しかし其處そこが良よい所ところぢや、優やさしいものぢや、人間にんげんも恥はづかしい事ことを忘わすれては駄目だめぢや、サアサア四人よにんとも私わしの處ところへお出いなさい。此この二人ふたりの男をとこも一人ひとりは彌みせ仙山んざんの、ではなない彌仙山みせんざんの木花咲耶姫このはなさくやひめの神かみ様さまが好すきと云いつて大變たいへんに信しん仰かうをして居をつたが、モウ一つ偉えらい日ひの出神でのかみ様さま、龍宮りうぐうの乙姫おとひめ様の事ことを悟さとつて、かうして一いつし生懸命やうけんめいに信しん神じんをして居をるのぢや」

青彦 「ア、さうですか、それは熱心な事ですなア」

馬公 「お婆アさま、一寸待つて下さい、私には一人連が御座います」

黒姫 「極つたこつちや、お前の連は鹿ぢやないか」

馬公 「イヤイヤま一人、元は私の御主人であつた紫姫と云ふ結構なお方が居られます」

ます

黒姫 「その方は何處に居られるのだ、早う呼びて来なさい」

馬公 「三五教の宣傳使に、つい此間からなられました、今日初めて大神様へ御参

拜なされました。今お宮で御祈念をして居られます」

黒姫 「ア、さうかな、コレコレ青彦、お前は改心をしてウライナイ教に戻つた土産

に、其紫姫とやらを歸順させて来なさい、三五教へも暫く這入つて居つたから、

長所もあるけれど、短所も澤山知つて居るだらう、其お前が三五教に愛想を盡か

した経歴でも説いて聞かして、その紫姫を早く連れて来なさい」

青彦 「確かに請合つて歸順さして来ます、どうぞ私達を元の如くお使ひ下さいませ

ぬか

黒姫「使うて上げるとも、ヤア私が使ふのではない、龍宮の乙姫様がお使ひ遊ばすのだ」

斯かる所へ静々とやつて来たのは紫姫なり。

紫姫「若彦さま、馬公、鹿公、エローお待たせ致しました。サアサア下向致しませう」

一同は、

「ハイ」

と、どことも無く躊躇気味の生返事をして居る。

黒姫「ヤアお前が紫姫と云ふのか、三五教の宣傳使と云ふ事ぢやが、神界のために御苦労様で御座います、どうぞ精々、世界のために活動して下さい」

紫姫、嬉しさうな顔つきで、

「ハア貴方は龍宮の乙姫様の生宮、好い所でお目にかかりました。妾は三五教の宣傳使になりましたから、まだ日も浅う御座いますので、何も存じませぬ、何卒老練な貴女様、宜しく御教授を願ひます」

黒姫「ア、宜しい宜しい、三五教でも結構だ、何れ私の話を聞いたらきつと兜を脱いでウライナイ教にならねばならぬ。發根の合點のゆく迄、お前は矢張三五教の宣傳使の肩書をもつて居なさるが宜敷からう、無理にウライナイ教に入つて下さいとは申しませぬ、神が開かには開けぬぞよ、無理に引張には行つて下さるなど大神様が仰有つてござる、心から發根の改心でなければお蔭はないから」

紫姫「一寸お見受け申しても、立派な貴女の神格、一目見れば貴女の奉じたまふお道は優れて居ることは愚かな妾にも觀測が出来ます。何卒宜敷く御指導を願ひます」

黒姫「ヤア何と賢明な淑女ぢやなア、コンナ物の好う分る方が何うして三五教のやうな教に入つたのだらう、世の中にはコンナ人がちよいちよい隠れて居るから、何處迄も探し求めて、誠の人を集めねばならぬ。誠の者許り引き寄せて大望な經綸を成就させるぞよとは、大神様のお言葉、ア、恐れ入りました。變性男子の靈様、眞實の根本の變性女子の靈様、サアサア皆様、神様にお禮を申しませう」

と黒姫は意氣揚々として祝詞を奏上し、得意の色を滿面に浮べ、鼻をぴこつかせ、

肩かたを揺ゆり、歩あゆみ振ぶりも常つねとは變かはつて、いそいそと崎き嶮くたる山やま道みちを先さきに立たち、魔ま窟くつヶ
原らの隠かく家れがさして一いつ行かう八はち人にん進すすみ行ゆく。

(大正一一・四・二五 舊三・二九 加藤明子録)

第三篇 反はん間かん苦く肉にく

第七章 神かみか魔まか〔六三五〕

四よ方もの山やま々やま紅も葉みぢして 錦にしき織おりなす佐さ保ほ姫ひめが
衣ころもを飾かざる秋あきの空そら 日ひ脚あし短みじき山やま坂さかを

下つて来るウラナイの

道の教のへボ司。

七八人の荒男、普甲峠の麓の木蔭に休らひ乍ら、雑談に耽り居る。

甲「此頃の比沼眞名井の参詣者は、随分澤山にあるではないか。三五教の宣傳使が到頭あの聖地を占領して了ひよつて、終にはウラナイ教の高姫さまの懐刀とまで持て囃された青彦までが、たうとう三五教へ陥落して了ひよつた。音彦、加米彦兩人も變な奴だが、何時陥落するか分りやしないぞ。此頃の高姫さまや、黒姫さまの御機嫌の悪い事と云つたらないぢやないか。なぜあの様に何でもない事にツンケンと目に角を立てるのだらう」

乙「きまつた事よ。俺達は毎日日日、路傍宣傳をやつて居つても、一つも土産がないものだから、誰だつて吾々の様な喰ひ潰しを、澤山養うて置くのは詰らぬから、自然に黒姫さまだつて御機嫌が悪くなるのは當然だ。何時も仰有るだらう。お前達一人が一人づつ信者を拵へて來れば、十人で十人の信者が出来る。その信者が又一人づつ殖やして行けば、別に宣傳使がなくても、自然に教線が擴まると

仰有つただらう。それに毎日日日、斯うして往來の人を掴まへて宣傳にかかつて居つても、誰一人歸順する者がないぢやないか。比沼の眞名井さまは、三月に一遍位三五教の宣傳使が出て来る丈だ。それに自然に信者が殖えて来る。それだから、要するに吾々はモ一つどつかに徹底せない所があるのだらう。今日は何とかして、一人でも入信者を拵へて歸ななくては、合はす顔がないぢやないか」

丙「さうだと言つて、來ぬ者を無理に引つ張つて歸んだ所で仕方がない。心の底から……ア、ウライナイ教は有難い神様だと云ふ感じを與へてやらねば、本當の信仰に導く事は出來ぬぢやないか」

甲「それもさうだが、何ぞ良い方法は有るまいかなア。俺達は一生涯懸命に言葉を盡し教理を研究して説き立てるのだが、どうしたもののか、誰も彼も九分九厘になるとみな逃げて了ふ。偶信者が出來たと思へば、青彦やお節の様に、直に三五教へ走つて了ふ。本當に妙だなア」

丁「目的は手段を選ばずと云ふ事がある。一つ、是れ丈チヨイチヨイ詣る、比沼の眞名井の參詣者を計略を以て入信させたらどうだ」

乙「何ぞ良い妙案奇策があるのか」

丁「あるともあるとも、併しお前達の様な馬鹿正直者では、到底出来ない藝當だ

から、先づ發表は見合はず事にしようかい」

丙「さうだと言つて、今日も又獲物なしに歸る譯にも行かず、日はズツプリ暮れ

て了つたなり、内へ歸つて大きな顔して、麥飯も頂けぬぢやないか。ドンナ手段

でも構はぬ、良い方法があるなら教へて呉れ」

丁「何でも俺の言ふ様にするか、俺の妙案奇策を用ゐたら成功疑ひなしだ。天に

口あり壁に耳、大きな聲では言はれぬが、實は斯う斯う斯ういふ手段だ」

と一同の耳元に口を寄せ何事が囁いた。一同は、

「合點だ合點だ」

と唸き、大道の中央に五人の男、横になつて道を塞ぎ、酒に酔うた氣分で寢轉ン

だ。甲乙丙の三人は依然として傍の森林に身を潜めて居る。日はズツプリと暮れ、

誰彼の顔も見えなくなつて了つた。向ふの方より男女の二人、ひそひそと囁き乍

ら、斯かる計略のありとは、神ならぬ身の知る由もなく、空の星や山の形、木の

枝などを目標に、覺束なげに歩み來り、一人の横腹をグツと踏み、
「キヤツ」と驚き逃げむとする途端に、二人は二三人の腹、脚の邊りを踏み、
這つてバツタリと倒れたり。

丑公「タ、誰ぢやい、俺の鞆丸を踏みよつて……馬鹿にしやがる」

寅公「俺も何處の奴か、腰を踏みよつた」

辰公「アイタ、腹をグサと踏みよつて……ヤイヤイ何處の奴だ、人の體を

土足にかけて……一體何をするのだ。……オイ皆の奴、起きぬかい、此奴ア何で

も夫婦連と見える。モウ量見ならぬ、皆寄つて集つて叩き延ばし、フン縛つて、

宮津の海へ放り込んだらうかい」

「贊成々々」

と何れも作り聲、滅多矢鱈に四方八方より叩きつける。

男「コレハコレハ誠に濟まぬ事を致しました。あまり暗いものですから、足許も

見えず……どうぞ御勘辨を遊ばして下さいませ」

寅公「ナー二勘辨も糞もあるものか。俺を誰だと思つて居やがる。大江山の鬼雲

彦の一の乾兒、鬼虎だぞ。モウ斯うなる以上は何と云つたつて、叩き延ばし、大江山の本城へ連れ歸り、手足をもぎ取り、酒の肴にしてやるか、さもなければ海へぶち込むか、二つに一つだ、……オイ兄弟、俺達に無禮を加へた代物だ、此奴二人共殺つて了へ」

「ヨーシ」

と又もや無性矢鱈に叩く、踏む、蹴る、有らむ限りの打擲をやつて居る。女は悲鳴を揚げ、

「人殺しイ 人殺しイ」

丑公「ナ―ニ、人殺しとは貴様の事だ、スツテの事で俺を踏み殺さうとしやがつたぢやないか。まかり違へば俺達が殺される所だ。殺すか、殺されるか、どちらかが死ぬのだ、モウ斯うなる以上は何と云つても、思ふ存分制敗をしてやらう」
男「お腹が立ちませうが、知らず知らずの不調法、どうぞ今度ばかりはお見逃し下さいませ」

寅公「ヤア何と言つても一度量見ならぬと言つたら、金輪奈落の底迄量見ならぬ

のだ。オイ皆の奴、槍だ、刀だ、早く持つて来い。………コラ夫婦の奴、貴様が來ると思つて最前から、數十人の手下を四邊の森林に忍ばせ、待つて居た。と二人の男女に向つて殻竿勝の様に叩きつける。夫婦は悲鳴をあげ、

「助けて呉れい 助けて呉れい」と聲を限りに泣き叫ぶ。忽ち此場に現はれた二三人の大男、

「ヤアヤア吾こそはウラナイ教の宣傳使だ。大江山の鬼雲彦が家來の奴輩、假令何百人一度に攻め來る共、ウラナイ教の神の神力を以て、汝惡魔の一群、片つ端から滅し呉れむ、覺悟を致せ」

寅公「何猪口才な、何程神力があると言つても、多寡が知れた二人や三人の木端武者、味方は殆ど百人、グツグツ吐さず、一時も早く此場を立去れツ。吾々に無禮を働いた二人の男女、是れより制敗する所だ。俺達の行動を妨ぐると、汝等諸共手足を縛り大江山の本城へ連れ歸り、五體をグタグタに切つて切つて切り屠り、酒の肴にして呉れむ、覺悟を致せ」

大男「ハ、ハ、ハ、何を吐しやがる、何ほど鬼雲彦の家來、假令百萬千萬一度に攻

め寄せ来る共、ウライナイ教の神力、唯一本の指先にて、汝等を縦横無盡に斬り立て難立て、海の藻屑と致し呉れむ、覺悟を致せ」

辰公「ヤアヤア家來の奴輩、此兩人は申すに及ばず、邪魔ひろぐウライナイ教の三人の奴輩、四方より取圍み、槍を以て唯一突き、大江山の本城へ一時も早く連れ歸れ」

一人の男、暗がりより、

男「ヤア鬼の奴輩、ウライナイ教の言葉を喰つて見よ、手も足もビクとも致さぬ様に、靈縛を加へて呉れむ。一二三四五六七八九十百千萬」

丑、寅を始め五人の男、

「アイタ、痛いわ痛いわ、手も足も石地藏の様になつて動きやらぬ……才イもしウライナイ教の大先生達、如何なる鬼の乾兒の吾々も是れには閉口致します。偉い御神力だ。どうぞ靈縛を解いて下さい。決して決してモウ貴方等には相手にはなりません、併し乍ら此二人の男女は吾々を土足にかけた無禮者、これ丈はどうしても貰うて歸ります」

暗中より、

「まださう云ふ事を吐すと、今度は言靈の神力に依つて、汝が五體をグタグタに解體しよか。サアどうぞや、一二三四……」

「アイタ、ヤア叶はぬ叶はぬ、どうぞ勘忍して下さいませ」
暗がりより、

「ソナラ汝を赦して遣はす。二人を此處に残して一時も早く此場を立去れ……
……ヤイヤイ森の中の數百人の鬼の眷族共、手足が動かなくなつて物も言はず、
憐れな者だ。此方が今日は特別を以て赦してやらう。黙つてサツサと大江山へ歸つて行け……」
「ヤイそこな腰拔共、貴様も早く立去らぬか」

寅、丑、鷹、辰、鳶、一時に泣き聲を出して、
「逃げと仰有つても、手も足も、チツトも動きませぬ。どうぞ靈縛を解いて下さいませ」

暗がりより、

「オ、さうだつたな、貴様丈を忘れて居つた。サア靈縛を解いてやる、一二三四

………これで結構だ、サア早く逃げ歸らう」

五人一度に、

「有難う御座います、モウ此れ限り悪い事は致しませぬ。なんとウラナイ教は偉い御神力で御座います、恐れ入りました」

暗がりより、

「エー四の五の吐さず、トットと歸れ」

忽ち五人の影は足音立てて一生懸命、西方指して走つて行く。暗がりより三人一度に、

「ハ、ハ、ハ、人の恐れる悪逆無道の鬼神共、脆いものだ。とうと御神力にくたばりよつたワイ。モシモシ旅のお方、偉い危ない事で御座いました。お怪我はありませんか」

男「ハイ有難う御座います。私は彌仙山の麓に住居致す、綾彦と申す者、一人は私の女房のお民と申します。比沼の眞名井ヶ原へ参詣を致し、途中に日を暮らし、由良の湊まで行つて宿をとらうと思ひ、此處までやつて來ました所、大江山の鬼

共に取圍まれ、生命を夫婦共取られようとする、危急存亡の場合、お助け下さいましてコンナ有難い事が、天にも地にも御座いませうか。此御恩を如何して返したら宜しう御座いませうか」

お民「誠に誠に、危い所、生命を拾うて下さいまして……貴方様は、吾々夫婦が生命の親で御座います。御恩返しには、如何なる事でも仰せ付け下さいませ。夫婦の者が力の盡せる限り御用を致します」

暗がりより、

「私はウライナイ教の者で御座います。浅、幾、梅と申す三人の者。あなたも是れから神様の御恩報じに、無い生命だと思つて、ウライナイ教の道に入り、神様の爲にお働きなさい。それが一番、吾々に對する恩返し……また神様に對する孝行と申すもの、……」

綾彦、お民一時に涙聲、

「ハイ有難う御座います。モウ斯うなる以上は無生命を拾つて貰うたので御座いますから、仰せに従ひます、如何様の事なつと仰せつけ下さいませ」

浅公「ヤアよしよし、承知致した。サア是れから吾々が館へお越しなさい。斯う云ふ所にグツグツして居ると、又劍呑です。私達は急いで歸らねばなりません。あなたも一緒にお越し下さい、何時蒸し返しに来るかも知れませぬよ」

夫婦「それはそれは有難う御座います。生命を助けて戴いた上に、又今晚御世話になるので御座いますか」

浅公「何、ソナ御心配はチツトも要らない。世界の人を普く救ふのが、ウラナイ教の神様の御趣旨だ。サアサア歸りませう」

夫婦「有難う御座います。然らばあなた様方の御厄介に與りませうか」

浅公「チツトも遠慮は要らぬ、サアお出なさい。あなたは道の勝手も知らないし、マンなかをお出でなさい。吾々は後先を警護して上げませう」

夫婦「何から何まで御親切に……何時の世にかは忘れませう。是れと云ふのも、眞名井の神様のおかげ……」

浅公「コレコレ御夫婦、今何と仰有つた、眞名井の神様のお蔭と云はれましたが、眞名井の神様にお蔭があるなら、参拜した下向の途に、コンナ災難に遭ふ筈がな

いぢやありませぬか。もしも吾々ウライ教の取次が來なかつたならば、あなたは、それこそ大變な目に遇つて居るのですよ。モウ眞名井さまの事はスツカリと思ひ切つて、私達の信ずるウライナイ教へ入信しさい」

夫婦「入信指して下さいませるか、有難う御座います」

と三人の中に挟まれ、薄明りの道をトボトボと、魔窟ヶ原指して誘はれ行く。魔窟ヶ原の中途迄歸り來る折しも以前の丑、寅、鷹、辰、鳶の五人、

「ヤアこれは、淺公、幾公、梅公、御苦勞で御座いました。今私達が御神前で御祈願をして居りました所、普甲峠の麓に大江山の鬼雲彦の眷族數多現はれ、二人の旅人を捕まへて無體の亂暴、既に生命まで奪らむと致して居るのが天眼に映りました。ヤアこら大變だと、又もや天眼通を光らかし見れば、森蔭に潜む百人餘りの鬼の手下共、ヤア此奴ア助けねばなるまいと氣を焦てど、何分遠隔の土地、そこへ天眼に映じたのはあなた方三人、二人の叫び聲を聞きつけ、韋駄天走りに驅つけるのが見えた時の嬉しさ、吾々五人は神前より一生懸命に靈縛をかけると、鬼の手下の奴共、身體強直し苦み悶へる可笑しさ、蜘蛛の子を散らすが如く逃げ

失せよつた。あの時に吾々が、此方から應援せなかつたら、随分貴方等も危いものであつた」

浅、幾、梅の三人、

「それは御苦勞でした。併しさう仰ると、吾々の働きはサツパリ　ゼロの様に聞えますなア」

寅公「イヤ決して決して、あなた方が居つて呉れたばかりに、此方の鎮魂が利いたのだ。全くはあなた方三人の功績が九分九厘だ。……ヤア其處に御座るお二人の方、靈眼で見た通りだ。能うマア貴方、助けて貰ひなさつた。型の良い方だ。

サアサア吾々の本據へお越しなさいませ」

夫婦「これはこれは、あなた方はウライナイ教のお方で御座いますか、いかい御世話になりました。どうぞ宜しうお頼み申します」

寅公「ヤア何事も神様の御引合せだ。モウ斯うなつては兄弟も同様だ。何の隔ても、遠慮も要らぬ。互に心を打明けて神様の爲に働きます。御大將の黒姫様や、高山彦さまも大變に御喜びなさいませう」

夫婦 「あなた方の御大將が御座いますのか」

寅公 「へエへエ、有りますとも、それはそれは立派な、偉い方ですよ。吾々は影も踏めぬ位な者です。サアサア今日の吾々の手柄を、一つ歸つて御大將に報告致しませう」

夫婦 「どうぞ宜しう、あなた方から御頼み下さいませ」

寅公 「ヤア心配なさるな。神の道は結構なものですよ。一寸會うても十年の知己

の様なものです……サアサア行かう」

と十人の同勢は地底の岩窟指して歸り行く。

（大正一一・四・二五 舊三・二九 松村眞澄録）

第八章 蛙の口（六三六）

黄金の峰と聞えたる
彌仙の山の麓邊に

此世を忍ぶ豊彦が
娘お玉の訝かしや

去年の秋よりブクブクと
息も苦しく日に月に

むかつき出した布袋腹
豊彦夫婦は日に夜に

心を痛め木の花の
神に願を掛巻くも

畏き神の夢の告げ
眞名井ヶ原に現れませる

豊國姫の大神の
御許に綾彦お民をば

一日も早く参らせよ
天地かぬる大神の

貴の御靈の御心と
諭し給ふと見るうちに

忽ち夢は破られて
雨戸を叩く雨の音

秋の木の葉の凧に
吹かれて落つる騒がしさ

夜も漸くに明けぬれば
兄の綾彦妻お民

二人に命じて逸早く
時を移さず豊國姫の

珍の命の御前に
参向せよと命ずれば

正直一途の孝行者

親の言葉を大地より

重しと仰ぎ夫婦連れ

草蛙脚絆の扮装に

若草山を乗り越えて

空も真倉の谷徑を

進み進みて一本木

田邊、丸八江、由良の川

息も切戸の文珠堂

天の橋立右に見て

親の言葉に一言も

小言は互に岩淵や

廣野を過ぎて五箇の庄

比治山峠の峰續き

比沼の眞名井の神靈地

瑞の寶座に參拜し

草の枕も數重ね

普甲峠の麓まで

すたすた歸る二人連れ

忽ち暮るる秋の空

黒雲低う塞がりて

心は暗に怖々と

歸り來れる道の上

思はず躓く人の影

忽ち五人の荒男

前後左右に立ち上り

殺して呉れむと呶鳴りつつ

打つやら蹴るやら毆るなら

綾彦お民は聲限り 助けて呉れえと叫ぶ聲

聞くより忽ち暗がりに 現はれ出でた大男

ウラナイ教の言靈に 悪者共を追ひ散らし

綾彦お民を伴ひて 魔窟ヶ原の岩窟に

意氣揚々と歸り行く 道に出會うた五人連れ

手柄話の花咲かし 土産澤山黒姫が

隠家指して歸り行く。

浅、幾の兩人は例の岩蓋を剥つて一行十人と共に滑り入る。

浅公 高山彦様、黒姫様、只今歸りました

黒姫 ヤア、お前は浅公か、ヤ、幾公、梅公、えらう遅いぢやないか、何を

居つたのだい、何時までも日が暮れてから其處らをブラブラ歩いて居ると、大江

山の鬼の眷族と間違へられるから、日が暮れたら直に歸つて來るのだよ、今日は

又えらい遅い事ぢやないか、ヤ、今日は見馴ぬ方がお二人、これや又如何ぢや、

えらう頭の髪も亂れて居る、何かこれには様子でもあるのかな
幾公「これに就いて色々苦心話が御座います、それが爲に今日は吾々一同の者が遅くなりしました、三五教の宣傳使數多の人民を迷はずに依つて、吾々は三五教の宣傳使を見つけて出し、天地の道理を説き聞かせ歸順させむものと普甲峠を降つて來ました。暗さは暗し、風はピューピューと吹いて來る、浪立ち騒ぐ海原は太鼓の様な音をたててイヤもう凄じい光景、忽ち騒がしい物音、何事ならむと吾々一同は耳をすまして聞き居れば「人殺し人殺し、助けて呉れえ」との嫌らしい聲が聞えて來る、ア、これや大變だ、人を助けるのがウライナイ教の神の教、吾身は如何なつても構はぬ、假令大江山の鬼の餌食にならうとも神に仕ふる吾々、此悲鳴を聞いて如何して捨てて歸れようか、人を助くるは宣傳使の役と、生命を的に聲する方に窺ひ寄り見れば、案に違はぬ百人近くの鬼雲彦が眷族の者共、覆面頭巾の扮装、槍、薙刀に棍棒、刺股氷の刃、暗に閃かし十重二十重に取り圍み、中で二人の男女を捕へて四五人の男、打つ蹴る殴るの亂暴狼藉、大江山の砦に連れ歸りバラモン教の神の贄にせむとの企み、と覺つた吾々は矢も楯も堪らず、一生

懸命熱湯の汗を絞り、ウラナイ教の大神様、何卒々々この旅人が生命を救はせ玉へ、吾々の生命はたとへ無くなつても、と幸魂を極端に發揮し暗祈黙禱すれば、アーラ不思議や吾身體に忽ち降り給ふ天津神國津神八百萬の神等、日の出神を先頭に龍宮の乙姫、吾々三人が肉體に懸らせ給ひ、天地に轟く言靈の聲、一二三四と皆まで言はずに、さしも強力無雙の鬼雲彦が手下共、朝日に露の消ゆるが如く、魂奪はれ骨は碎けて生命惜しさに涙と共に頼み入る。思へば憎つくき奴なれど、彼等と雖も元は神の分靈、善を助け悪を許すは大神の慈悲、と心の裡に見直し宣り直せば、百に餘る豪傑どもは、チウの聲も能う立てず足音を忍ばせ乍ら、風の如く魔の如く水泡と消えてやみの中、そこで吾々八人は豫ての計略、オツト、ドツコイ……計略を以て旅人を苦しめむと致す鬼共に、言靈の鐵鎚を加へ今後を戒め置き二人のこれなる夫婦を救ひ花々しく立ち歸つて候」

黒姫「ヤア、それは御苦勞であつた、人間と云ふものは目前の時になれば神様が
お使ひ下さるもの「腐り繩にも取りえ」と云ふ事がある、私もお前の様な穀潰し
を澤山に養つて置いてつまらぬ者ぢや、棄かすにも棄かされず、大根の葉に「ね

「ち」が着いた様なものぢやと思つて居つたが、目前の時にそれ丈の神力が出れば萬更捨てたものぢや無い。ヤ、御苦勞だつた、サアサア一服して下され、然し乍ら丑、寅、辰外二人の男は今迄何をして居つたのだ、淺、幾の様にお前もチツと活動をせなくては神様に濟むまいぞや」

寅公「吾々は御神前に於て……否無形の神殿に向つて祈願する折しも、忽ち吾々の天眼通に映じた普甲峠の突發事件。やれ可憐相な二人の旅人、神力を以て助けてやらむと心は千々に焦慮れども、何を云つても遠隔の地、ア、仕方が無い、遠隔神靈注射法を實行せむかと思ふ折、又もや吾々が天眼に映じたのは淺、幾、梅の三人、これや良い靈代だと五人一度に三人の身體に神懸りし、群がる魔軍に向つて、言靈の神力は申すに及ばず、あらゆる靈力を盡して戦へば、敵は蜘蛛の子を散らすが如く、散り散りパツと花に嵐の當りし如く、霞となつて消え失せたり

ツ

淺公「アハ、ハ、ハ、」

黒姫「何は兔もあれ、藪醫者が手柄をした様なものだ、篋で鬼の首とつたも同然、

けふは離れの室で御神酒でも澤山頂いてグツスリと寝たが良い、コレコレ旅の方、神様の尊い事が分りましたかな」

綾、民「ハイ、何とも有難うて申し様が御座いませぬ、只もう此通り……」

と夫婦は両手を合せ黒姫の顔を伏し拜み、熱い涙をポロポロと零すのみである。

黒姫「お前は眞に幸福な御夫婦ぢや、結構な御神徳を頂きなされた、袖振り合ふ

も多生の縁、躓く石も縁の端と云うて、コンナ結構な神様の教の取次に助けて貰

うとはよくよく深い昔からの果報が現はれたのぢやぞえ、私も何ぢやか始めて會

うた人の様な気がせぬ、之からは總ての娑婆心を捨てて神界の爲に千騎一騎の活

動をしなされや、就いては夫婦ありては御用の出来ぬ神のお道ぢやから、お前は

明日から夫婦別れて御用をするのだ、死んで別れるのは辛いけれど、此世に生き

て居れば矢張り同じウラナイの道に御用するのだから會ふ機會は幾らもある、お

前は何と云ふ名だ」

「ハイ、綾彦と申します。妾はお民と申します」

黒姫「ア、さうか、綾彦は俺の側で御用をするなり、お民は矢張りウラナイ教の

支所でやしろで高城山たかしろやまと云う處ところ、そこには意地いぢくねの………悪わるくない松姫まつひめが控ひかへて居る、お民たみは松姫まつひめの側そばへ行いつて御用ごようをなさるのだ、御承知ごしやうちがゆけば明日あすから、幾公いくこうに送おくらしてあげよう」

お民たみ「ハイ、如何いかなる事ことでも神様かみさまの御爲おんためなれば否いやとは申まをしませぬ、然しかし何卒どうぞ三四日よつか許ばかり一いつしよ緒おに置おいて下くださいますまいか、とつくり夫婦ふうふの者ものが相談さうだんを致いたし度たう御座ごいますから………」

黒姫くろひめ「ア、其相談そのさうだんがいかぬのだ、人間心にんげんこころで取越苦勞とりこしくらうをしたつて何なにになるものか、何事なにごとも神様かみさまに絶對ぜつたいにお任せまかするのだ、夫婦ふうふ別わかれるのが辛つらいかな、それはお若い身みの上うへだから無理むりも無い、年寄としよりの私わしでさへも夫婦ふうふは無なければならぬ者ものぢやと思おもうて居をる位くらゐぢや、然しかし年寄としよりは又例またれい外ぐわいぢや、末すゑが短みじかいから………、若わかい者ものは何程なんぼでも會あう機き會わいが、長ながい月日つきひには有あるものぢや。あの木貂きてんと云いふ奴やつは、夫婦ふうふ仲なかの良よいものぢやが決けつして夫婦めをとは一いつしよ緒しよに棲すまひはせぬ、雄をすの方ほうが東ひがしの山やまの木きの洞うろに棲すみて居をれば、雌めすの方ほうは屹度谷きつとたにを隔へだてて、西にしの山やまの木きの洞うろに棲すま居をし、西にしからと東ひがしからと互たがひに見張みはりをして居をるさうぢや、若もし雌めすの棲すみて居をる大木たいぼくの麓ふもとへ獵師れふしでも出でて來きた

ら、燈臺元暗がり、近くに居る雌に氣がつかいでも遠くから見居る雄がチヤン
と之を悟つて、電波を送つて雌に知らせ、雄に危険が迫つた時は又遠くから見
居る雌が電波を以て雄に知らせると云う事だ。その通りお前も兩方に分かれて互
に妻は夫を思ひ、夫は妻を思ひ、偶々會うた時のその嬉しさは何とも云へぬ味が
出るぞえ、之だけ若い者ばかり澤山居るのだからお前の様な若夫婦を一緒におい
て置くと、いろいろと若い者が修羅を燃やしてごてつき、お前も亦辛いであらう
から、明日は直にお民は高城山へ行つて御用をして下さい」
「何事も神様にお任せした以上は、何卒貴女の思召の通りお使い下さいませ」
黒姫「ア、さうかさうか、結構結構、本當に聞譯の良い人ぢや、サアサ今晚は奥
へ行つて寝みなされ、俺も大變草臥れたから今晚は之で寝みませう、然しこれこ
れお若いのに、神様に手を合せお禮を申して寝みなされや、必ず必ず神様の祀つて
ある方に尻を向けたり足を向けてはなりませんぞえ」
夫婦「ハイ有難う御座います、然らば寝まして頂きます」
と奥を目蒐けて兩人は徐々進み行く。

黒姫「アーア、世の中は思ふ様にいかぬものだなア、今斯う云うて若夫婦に生木を裂く様な命令をしたが、思へば思へば可憐相な者だ。俺とても其通り、高山彦さまが二三日他所へ行つてお顔が見ええでも淋しくて仕方が無いのに、鴛鴦の様な仲の良い若夫婦が別れて御用するのは、私に比ぶれば幾層倍辛いだらう。ウライ教の雙壁といはれた龍宮の乙姫の此生宮でさへも、高山彦さまを夫に持ったのが露見れてより、夏彦や常彦は直に飛び出し、それから後は毎日日何とか、かとか云つて、岡餅を焼いて法界悋氣の續出、コンナ事では折角築き上げたウライ教も崩解するかも知れない、何ほど一旦綱かけたらホーカイはやらぬと、色の黒き尉殿が鈴を振る様に矢釜しく云つても駄目だ、ア、いやいやいやオンハと、三番叟もどきに逃げて去ぬ奴が踵を接するのだから、法界悋氣の深い連中の中へ、何ほど可憐相でも若夫婦を交へて置く事は出来ぬ。アーア若夫婦、必ず必ず黒姫は邪慳な奴ぢやと思つて呉れな、口先では強う云うては居るものの、涙もあれば血もある、ア、可憐相だ、青春の血に燃ゆる二人の心、察しのない様な黒姫ぢや御座いませぬ」

と獨語ちつつ同情の涙に暮れて居る。

かかる所へ高山彦現はれ來り、

「ヤア黒姫か、夜も大分更けた様だ、もうお寢みになつたら如何です」

「ハイ、只今寢みます」

「お前に一つ相談がある、聞いて呉れまいか」

「之は又改まつたお言葉、相談とは何事で御座いますか」

「外でも無い、俺は一つ大に期する處があるのだ、之からフサの國へ一先づ立ち

歸り、大に高姫さまの後援をして大々の活動を仕様と思ふ、お前は此處に居つて

自轉倒島を征服して下さい、明日からすぐ出立しようと思ふから……」

「工、何と仰しやいます、夫婦は車の兩輪、唇齒輔車の關係を保たねばなりません

ぬ、例へば男は左の手足、女は右の手足も同様、片手片足では大切な神業に奉仕

する事は出來ますまい、ちつとお考へ直しを願ひます」

「木貂、一名雷獸と云ふ獸は随分仲の良いものだが、夫婦は決して一緒に居ない

ものだ」

「エ、措いて下され、妾の模像ばかりやるのですな、ソナナ玩弄物の九寸五分を突きつけた様な同情ある恐喝手段にのる様な黒姫とは違ひますわいな、ヘン…
…いい加減に擲擄つて置きなさいよ、ホ、ホ、ホ、」

「ヤア眞劍だ、強つてお暇を願ひ度い」

「まつたくですか、ハ、ア、宜しい、御勝手になさいませ、外に増花が出来たと見えます、もの云ふ花は此黒姫一人だと妾が心で自惚して居つたのは妾の不覺、薊の花に接吻をして來なさいよ」

「そう怒つて貰つては困るぢやないか、二つ目には妙な處へ論鋒を向けるのだな、晝演壇に立つて滔々と苦集滅道を説くお前の態度と今の態度とは丸で別人の様な、聲の色まで變つて居るぢやないか」

「ヘンきまつた事ですよ」

と肩を高山彦の方へニコツと突き出し、首を斜にし目を細うし、
「野暮な事仰しやるな、【こゑ】は思案の外ぢやないか、ホ、ホ、ホ、」
と鰐口を無理に「おちよぼ」口に仕様とつとめる。巾着を引き締めた様に縦の皺

が一所に集中し、牛蒡の切り口の様に口の邊りが見えて居る。

高山彦は、

「ア、もう寝まうか」

と黒姫の背中をポンと叩く。

「勝手に一人寝やしやんせいな」

と黒姫は、故意とピーンとした顔を見せ、向返つて背中を向ける。

「ハ、ハ、ハ、ハ、非常な逆鱗だ、どれどれ今晚は山の神さまに巨弾を撃たれて、只一

人赤十字病院に收容されるのかな、アハ、ハ、ハ、」

と寢室に歸り行く。黒姫は水鏡を燈火に照し顔の修繕をなし、羽ばたきし乍ら四

邊を見まはし目を細うし、

「どれ夫の負傷を、女房としてお見舞申さねばなるまい」

と又もや一室にいそいそ走り行く。

黒姫が許可を得て淺公、幾公、梅公、その他十數名の老壯連は御神酒頂戴の名

の下に、「會うた時に笠脱げ」式にガブリガブリと酌いでは飲み酌いでは飲み、酔が廻るにつれ徳利の口から「火吹き竹飲み」を初め出しける。

甲「オイ、梅の大將、随分よく飲むぢやないか」

梅公「きまつた事だ、大蛇の子孫だもの、飲む事にかけてたら天下第一品だ、親譲りの山を呑み田を呑み家まで呑みて、酒の肴に親の脛を噛り、此奴手に負へぬ奴ぢ

や、七生（升）までの勘（爛）當ぢやと云つて放り出されたと云ふ阿哥兄さまだ。

親爺が七升の爛をせいと云つた時は流石の俺も一寸弱つたね、朝九一合、晝九一

合、晩九一合、夜中に九一合、夜明け前に九一合、マア一寸ゴシヨゴシヨ（五升）

とやつた處で、それ以上は腹の蟲が「梅公、あまりぢや、もう此上は六升だ、七

升（七生）迄怨み升」と副守の奴でさへも弱音を吹いたのだからな」

甲「随分酒豪だな」

梅公「酒豪な守護神だ、然し之だけ、酒飲みの梅公も此頃はずつと改心して、滅

多に飲みた事はあるまいがな、偉い者だらう」

浅公「アハ、ハ、ハ、飲み度いと云つたつて飲ます者が無いものだから氣の毒なも

のだ」

梅公「酒の酔い本性違はずだ、何程酔った處で足が【ひよろ】つくの、頭が痛い、眩暈が來るの、八百屋店を開業するのと云ふ様な不始末な事は、ちつとも、無いのだからな、それで今日の様な妙案奇策を捻り出すのだ、今晚斯うして貴様達が甘い酒に舌鼓を打つ様にしてやつたのは俺のお蔭ぢやないか、随分うまいつつたぢやないか」

寅公「あの暗がりに飲まぬ酒に酔うた氣になつて、冷い土の上に横はり、向うから一歩々々近づいて來る足音、何處を踏まれるか分つたものぢやない、其時の心のせつなさ、腰をトウトウ土足で踏まれ、鞆丸を踏まれた時の痛い痛くないのつて一生懸命の放れ業だ、随分俺も骨を折つた、何ほど梅公が賢うても俺達が實行せなくては今夜の芝居は打てやしない、あまり威張つて貰うまいかい」

辰公「俺だつて臍の上をギョツと踏まれた時の苦しき、早速ベランメーカー調で業託を云はうと思つても満足に聲も出やがらぬのだ、皆の奴、氣が利かぬ者だから暗がり紛れに旅人だと思つて俺の頭と云はず背中と云はず、幾ら叩きよつたか分

つたものぢやない、コオこれを見い、背中が青くなつて居るワ」

梅公「アハ、何ぬかしよるのだ、蛙ぢやあるまいし背中の青くなつたのが

如何して分るかい、兔角芝居は幕開きはしたものの馬の脚や猪になる大根役者が、

うまくやつて呉れるかと思つて随分氣を揉みたよ、マアマア木戸錢取らずの奉納

芝居だから、あれ位で観客も何とも云はぬが、下足賃でも徴つて見よ、それこそ

一人も這入る者はありませんやせないぞ、然し寅公、辰公、鳶公、貴様等五人は如何し

やがつたかと思つて心配して居つたら、何時の間にか先に行きよつて天眼通だの、

何のと甘い事を云ひよつたね」

寅公「當意即妙、神謀奇略の智勇兼備の大將だ、知識の源泉たる吾々、何處に抜

け目があるものかい、サアサ良い加減に寝まうぢやないか」

淺公「オ、寝みても宜からう、膝坊主でも抱いて寝エ、アア、今晚の女は隨

分素敵な奴ぢやないか、アンナ良い女房を持ったハズバンドは随分に幸福だらう

な、エー怪體の悪い、あれ程堅苦しい事云つて居た黒姫の大將は婿を持つ、「や

もめ」ばつかりの俺達は指を啣へて、見て居るより仕方が無い、そこへ又うら若

い綺麗きれいな夫婦ふうふがやつて來きやがつて、隨分ずぶん貴様きさま達たちも氣きが揉もめる事ことだらう、ア

ハ、ハ、ハ、

と酔よひに乗じやうじて四邊あたり構かまはず罵ののしつて居をる。綾彦あやひこ、お民たみは黒姫くろひめの命めいに依より、一室ひとまに行いつて寢しんに就つかむと廊下らうかを通とほる折をり、思おもはぬ酒さけの酔よひの笑わらひ聲ごゑ、立たち聞ききは不道徳ふだうとくとは知しり乍ながらも、つひ氣きにかかりフツと耳みみを傾かたむけ聞きいて居をれば、どうやら自じ分の事ことらしい、二人ふたりは顔見合かほみあはせ何事なにことかひそひそ囁ささやき乍ながら一睡いつすゐもせず其夜そのよを明あかしける。

(大正一一・四・二六 舊三・三〇 北村隆光録)

(昭和一〇・六・一 王仁校正)

第九章 朝あしたの一驚いつきやう〔六三七〕

晩秋ばんしうの長ながき夜よはいつしか明あけて、朝霧あさぎり籠こむる東南とうなんの天てんに、太陽たいやうは霞かすみて低ひくうか
かり居をる。高山彦たかやまひこは漸やうやく起おき上あり、不便ふべんの地ちに似にあはぬ贅澤ぜいたくざんまい三昧さんまい、朝風あさぶる呂ろ、丹前たんぜん、

長火鉢、入り日の影に當つたやうな細長き體に、長煙管を持つた黒姫と二人睦まじさうに、ニタニタと、昨夜の夢を思ひ出してか、悦に入つて居る。斯る處へ新參者の夫婦連、恭しく兩手をつかへ、綾彦「コレハコレハお二人様、お早う御座います、昨夜はいかい御厄介になりまして、吾々夫婦は暖かく寝さして頂きました。どうぞ今日より、折角の思召では御座いますが、吾々夫婦にお暇を下さいませ」

黒姫、怪訝な顔にて、

「お前は昨夜来た許りぢやないか、あれ程固い事を云つて居つて、一夜の間にさうグラグラと心をかへて何うするのだい。大方お民を高城山へ遣はすのが、夫婦共お氣に入らぬのだらう、ヤアそれは若い夫婦として御無理もない、併しながら此處が辛抱だ、前夜も云つたやうに、一つの苦勞心配と云ふ事がなければ、人間は誠の花が咲きませぬぞや」

「重ね重ねの御教訓、誠に有難う御座います、併し乍ら吾々夫婦は一旦神様にお任せした以上は、假令夫婦がこの儘生別れにならうとも、ソナ事に執着心は持

ちませぬ。併しながら、夜前承れば皆様のお酒の上のお話に、八人の方が八百長をお行りなされて、私をウラナイ教に引き込む手段で、俄に芝居を仕組まれましたので、私のやうな馬鹿正直者は、到底あの方々と共に暮す事は出来ませぬから、どうぞお暇を下さいませ」

黒姫「何と妙な事を仰有るぢやないか、誠正直一方のウラナイ教に、ソナ八百長芝居があるものか、大方お前旅の疲れで、ソナ夢でも見たのだらう」

綾彦「イエエ決して夢では御座いませぬ、夜前貴方様に御挨拶をして、寝さして貰はうと思ひ、廊下を通りますと、皆さまがお酒に酔ひ、面白さうなお話、聞くとともに吾々夫婦の耳に雷の如くに響いたのは、夜前普甲峠の辛辣な計略、一伍一什の自慢話、私は腹が立つやら恐ろしいやら、一旦有難いと思つた信念も煙と消え、唯口惜しさに二人は一睡もせず、夜の明けるのを待つて泣いて居りました。必ず夢ぢや御座いませぬ、何卒お暇を下さいませ」

黒姫「不思議の顔をして、

「何とお前合點が行かぬ事を仰有る。どうかして居るのぢやないかな、此處の若

い者には、毎日噛みて含めるやうに誠の道が説き聞かしてある。鶉の毛で突いた
ほども嘘を云ふものはない、あまり正直で間が抜けて、當世に役に立たぬやうな
代物ばかりぢや、ソナ筈は斷じてありませぬ、それや何かの幻でせう」
「イエイ工決して幻でも何でも御座いませぬ、現に夜前のお方が自慢話に仰有つ
たのをお民は確かに聞きました」

と聞くより黒姫は訝しがり、

「一寸待つて下さい、妙な事を云ひなさる、今調べて見ませう。これこれ淺公、
幾公、梅公、寅公、辰公、鶯公、皆々此處へ、尋ねたい事がある、出て來なさい」
と稍慄ひ聲で唖鳴り立てる。此聲に一同八人はバラバラと現はれ來り、各自蛙踞
ひになつて、

「今吾々を、お呼びになつたのは、何御用で御座いますか、ねつから間に合ひま
せず、偶に人を助けた位で澤山の御馳走を戴き、まだ其上に何彼の恩命を下し給
ふのは餘り勿體なくて冥加に盡きます、何一つ御恩報じも致さず、誠に恥かしい
次第で御座います。ヤアお前は夜前の人、マアマアよかつたね工、これと云ふの

も全くウラナイ教の神様のお蔭だ、次には私達のお蔭だよ、此御恩は何時迄も忘れてはなりませんぞえ」

綾彦、煮え切らぬ返事、

「へエ」

お民「ヒン」

浅公「これこれお民さまとやら、その返事は何だ。瘦馬か何ぞの様に「あげづらをしてヒンなぞと、命の恩人に向つて嘲弄するのかい、イヤ挑戦的態度を執るのだな」

お民「へん」

黒姫「お前達八人の者、夜前の話をもう一遍詳しくして下さらぬか」

梅、肩を怒らし得意顔で、

「ア、夜前の吾々の功名手柄話ですか、よう聞いて下さいました。唯一回だけは折角の神謀奇略、ではない辛苦艱難したことが、貴女のお心に十分徹底しないやうな心持がして物足りないと思つて居ました。それはそれは随分澤山な鬼の手

下共たども」

と針小棒大しんせうぼうだいにべらべらと喋り立てるを黒姫くろひめは、

「ア、それは嘘うそぢやあるまいなア」

「エ、決して決して決して嘘うそと坊子ぼうづの頭あたまは生うまれてから【いう】た事ことがありません、正銘しやうめいネットプライスの物語ものがたりですよ」

「それでもお前まへ、夜前酒やぜんさけを飲のみて、種々しゆしゆの手段しゆたんを廻めぐらし、八百長やほちやうをやつて此方このかたを無理むりに信仰しんかうさせ、引張ひっぱつて來きた手柄話てがらばなしを交かはる交かはるやつて居ゐたぢやないか、誠まこと一つひとつの神かみの教をしへの道みちに居ゐながら、何なんと云いふ事ことをするのだい。綾彦あやひこ夫婦ふうふが大變殘念たいへんざんねんがつてこれから暇ひまをくれと云いうて居ゐらつしやる所ところだ。何程なんぼ云いつて聞きかしてもお前等まへらは駄だ目めだ、サア只今ただいま限り淺あさ、幾外いくほかにん六人破門はもんする。エ、汚けがらはしい、ウラナイ教けうを破やぶる者ものは外そとからでない、ウラナイ教けうから現あらはれるから氣きをつけよと神様かみさまが仰有おつしやつた、何程なんぼ要害堅固けんこな針はりをもつて固かためた丹波栗たんばぐりでも、中なかからはぢけ落ちおるやうに、お前等まへらはウラナイ教けうの爆裂彈ばくれつだんぢや、神様かみさまのお道みちの面汚つらよこし、ア、汚けがらはしい、トツトと一時いちじも早はやく歸かへつて下ください」

「それは何を仰有います、傘屋の丁稚ぢやないが、骨折つて小言を聞かされては梅公一同も一向算盤が合ひませぬ」

「それでも蛙は口からと云うて、現在お前の口から自白したぢやないか」

梅公は空とぼけて、

「ア、あれですかい、夜前は澤山なお酒を頂いて気が緩みたものですから、其處へ大江山の悪魔の靈が襲うて来よつて、吾々八人の功名手柄を抹殺しやうと思ひ、私を初め皆にのり憑り、酒は私には餘り吞まさず、悪靈が皆飲みて仕舞ひ、遂には私等の口を藉りて反間苦肉の策をやりよつたのですよ、眞實に悪靈と云ふものは油斷のならぬものですなア、アハ、ハ、ハ、ハ。オイ淺、幾、寅、辰、鳶、鷹公、貴様も餘程腹帯を締めぬと昨夜の様に魔靈に襲はれ、鬼の容器になつて仕舞うぞよ辰公」偉さうに云ふない、貴様にも矢張鬼が憑いて居るのぢやないか」

梅公「それやさうだ。お互さまぢや、悪平等的に、吾々八人にすつかり憑依しよつたのだ、ア、何だか気分が悪い、どうぞ高山彦さま、黒姫さま、一遍悪魔の入りぬやう、ウンと神靈注射の鎮魂をして下さいませな」

黒姫「オホ、ア、さうだつたか、大抵ソナ事だと思つて居た。之から氣をつけなさい、追て鎮魂して上げるから、谷川にでも行つて充分體を清めて來るのだよ」

梅公「オイ、大江山の鬼の住宅七軒の奴、サア洗濯だ。又もや鬼の來ぬまに洗濯婆サン婆サン」

と志やり散らし乍ら、尻引きからげ、細い岩戸を潜り谷川目蒐けて走り行く。後には高山彦、黒姫、綾彦、お民の四人。

黒姫「ヤア油斷のならぬ惡靈ぢや、折角の綾彦夫婦が善の道に救はれようとなさる最中に、執拗なる鬼の靈がやつて來よつて引落しにかからうとする。高山さま、確りせない、何時惡靈が襲來するやら分りませぬなア」

高山彦「ヤアさうだなア、これこれお二人のお方、心配なさるな、今お聞の通りだから決してウラナイ教にはソナ悪いものは居りませぬ、安心なされ」

綾彦「惡靈と云ふものはソナナものですか、へエ油斷がなりませぬなア」

黒姫「隅から隅まで、蜘蛛の巣を張つたやうに手配りをして居ますから、一寸も

油斷は出来ませぬよ、貴女は未だウラナイ教は初めてですから、靈の事を云つても分りますまいが、暫く信神して見なさい、何も彼もすっかり分つて來ます、さうしたらお前さまの疑も氷解するでせう」

お民「ア、左様で御座いましたか、誠にお氣を揉ましまして申譯が御座いませぬ、どうぞ宜敷お願い致します」

黒姫「ア、それで好い好い、奥へ往つて神様にこの解決がついたお禮を云つて來なさい」

二人は叮嚀に頭を下げ、静々と神壇の間に進み行く。

梅公外七人は黒姫の面部にさつと現はれた低氣壓の襲來を、危機一髪の間によつと許され、虎口を逃れた心地して谷川目蒐けて楔のために走り行く。梅公は道々、

「嗚呼恐ろしや恐ろしや
あらぬ智慧をば絞り出し

劍を渡る心地して
反間苦肉の策を立て

漸く目的成就して

意氣揚々と立ち歸り

黒姫さまの御前に

忠臣氣取で報告し

やつと解けた閻魔顔

福祿壽の様なハズバンド

高山彦の目の前で

手柄話を諄々と

竝べ立つれば黒姫も

相好崩して感歎し

褒美の積りで甘酒を

どつさり飲まして呉れた故

出會ふうた時に笠ぬげと

世の諺の其儘に

前後を忘れて舌鼓

うつて廻つた酒の酔ひ

副守か何か知らねども

功名心にかり出され

迂闊と喋つた謀み事

天に口あり壁に耳

いつの間にかは綾彦や

お民の奴に顛末を

一切残らず聞き取られ

知らぬが佛、神心

白河夜船のぐうぐうと

夢路を渡り起き上り

互に顔を見合せて

旨くやつたな、ようやつた

俺おれの知識ちしきはこの通りとほ

文殊菩薩もんじゅぼさつも丸まる蹴はだし

是これから信者しんじやを集あつめるは

是これより外ほかに手段しゆだんなし

これや好よい事ことを覺おぼえた

心竊こころひそかに誇ほこりつつ

肩かた肱ひぢ怒いからす折柄をりからに

黒姫くろひめさまのたか高こゑい聲こゑ

こいつアてつきり御褒美ごほうびと

喜よろこび勇いさみ八人はちにんが

西瓜頭すめくわあたまを竝ならぶれば

電光石火でんくわうせきくわかつち雷かづちの

轟とどろくやうな凄すこい聲こゑ

膽玉きもと取とられ臍へそぬかれ

爪つめを取とられて恥はぢをかき

此この難關なんくわんを如何いかにして

突破とつぱし呉くれむと首くびひねる

折をりしも浮うかぶ守しゆご護じん神しん

法螺ほらを副守ふくしゆのべらべらと

布留ふる那なの辨べんの黒姫くろひめを

煙けぶりに捲まいて大江山おほえやま

鬼おにの惡靈あくれいの仕業しわざよと

大責任だいせきにんを轉嫁てんかする

早速さつそくの頓智とんち、梅公うめこうが

甘うまい理屈りくつに欺あざむかれ

閻魔えんまの顔かほは忽たちまちに

急轉直下きふてんちよくかの地藏顔ぢざうがほ

鬼おにと佛ほとけの入替いれかはり

やつと破門を助かつて

黒姫さまの命令で

憑依もしない悪霊を

放り出すために谷川で

禊をせいと教へられ

胸撫で下ろし皺延ばし

國家興亡はまだ愚か

危急存亡の身の始末

川に流した心地して

漸く此處にやつて来た

あゝ面白い面白い

孫呉に勝る兵法を

際限もなく編み出し

蝨殺しに諸人を

一人も残さずウライの

教の道に引き入れて

鼻高姫や黒姫の

笑壺に入るが吾々の

上分別では在るまいか

知識の浅い浅公よ

意氣地の弱い幾公よ

【うめい】智慧出す梅公の

手足の爪でも頂戴し

煎じて飲めば偉くなる

寅公、辰公、鳶公よ

是から俺の云ふ事を

聞いて出世をするがよい

黒姫さまの大將が

口を極めてべらべらとお節を説いてウラナイの

道に入れよと全力を盡して見てもあの通り

辨論よりも實行だ直接行動に限るぞや

さは然りながら皆の者夢にもコンナ計略を

高山さまや黒姫に必ず喋舌つちやならないぞ

若しも分つた其時は皆、各々の鼻の下

大旱魃の大恐慌蛙は口から、うっかりと

酒を飲む時や心得よ心一つの遣ひよで

賢も見える又阿呆に見えるところ思へば口だけは

どうぞ慎み下されよ賛成のお方は手をあげて

拍手喝采してお呉れあゝ惟神々々

御靈幸倍坐しませよ月は盈つとも虧くるとも

朝日は照るとも曇るとも假令大地は沈むとも

黒姫さまが怒るとも金輪奈落この秘密

云うてはならぬぞお互の 身の一大事と心得て

必ず口外するでない 秘密はどこ迄秘密だよ

神の奥には奥がある 其又奥には奥がある

奥の分らぬ梅公の 智慧の奥山踏み分けて

確と梅公に従いて来い こいでこいでと松世はこいで

末法の世が来て門に立つ 一つ違へば俺達も

門に立たねば、ならぬとこ 持つて生れた智慧の徳

大きな顔して黒姫に 賞めて貰うて傲然と

ウラナイ教の宣傳使 あゝ面白い面白い

唯何事も人の世は 曲津に見直し聞直し

身の過ちは都合好く 宣り直すのが智慧の徳

あゝ惟神々々 叶はぬ時があつたなら

頭を下げて梅公に ドンナ事でも聞くがよい

聞くは當座の恥なれど 聞かずに知つた顔をして

失敗しつぱいしたら末代まつだいの それこそ恥はぢとなる程ほどに

阿呆あほう正直しやうぢき今迄いままでの 態度たいどすつくり立替たてかへて

權謀けんぼう、術策じゆつさく、戰略せんりやくに 心の底こころから立直たてなほせ

あゝ惟かむながらかむながら神々々 何故なぜに是程これほどよい智慧ちゑが

梅公うめこうだけは出でるである あゝ其その筈はずぢや其その筈はずぢや

嚴いつの靈みたまのお筆先ふでさき 一度いちどに開ひらく梅うめの花はな

梅うめで開ひらいて常磐ときはの松まつで 世界せかい治をさめる神かみの道みち

見違みちがひするなよ皆みなの奴やつ 黒姫くろひめさまは偉えらくとも

高山たかやまさまを貰もらうてから 何なんとはなしに【ぼつ】とした

これから俺おれが全軍ぜんぐんの 參謀さんぼう總長そうちやうである程ほどに

參謀さんぼう本部ほんぶの梅公うめこうの 指揮しき命令めいれいに從したがつて

事ことを執とるなら毛けの條すぢの 横幅よこはば程ほども違算あさんなし

餘程よつほど偉えらい守護しゆご神じん 俺おれに守護しゆごをして御座ござる

必かならず俺おれが云いふでない 日ひの出神でのかみや龍宮りうぐうの

乙姫さまのお脇立おとひめ なか 中でも一層偉い奴いっそうえら やつ
吾が神勅を輕蔑しわ しんちよく けいべつ 必ず「ぬか」りを取らぬやうかなら
皆の奴等に氣をつけるみな やつら き あゝ惟神々々かむながらかむながら
叶はぬ時の神頼みかな とき かみだの アハ、ハツハア アハ、

一同いちどう 「アハ、、、隨分偉くメートルを上げたものだなア」
梅公うめこう 「何をごてごて吐くのだ、貴様等の命の親だ、お飯の種だ、サアサア黒姫さ
まがお待ち兼だ。御襖がすみたら歸らう」
一同いちどう はバラバラと元の地底の岩窟に向つて歸り行く。
(大正一・四・二六 舊三・三〇 加藤明子録)

第一〇章 赤面黒面せきめんこくめん (六三八)

谷川に襖を濟まして、梅公一行は再び地底の館に歸り來たり、
梅公「高山彦様、黒姫様、お蔭で大江山の悪霊も、スツカリ退散致しました。そこら中が何ともなしに軽くなつた様で、明晰な頭腦が益々明晰になり、モウ是れで大宇宙の根本が、現界、神界、幽界の、萬事萬端手に取る如く明瞭に、梅が心鏡に映ずる様になつて來ました。随分御襖と云ふものは結構なものですなア」
黒姫「さうだるさうだる、何時もそれぢやから、朝と晩と晝と、間さへあれば、お水を頂きなさいと云うとるのぢや。火と水とお土の御恩が第一ぢや。何時も水を被るのは、蛙の行ぢやと言つてブツブツ叱言を云つてらつしやるが、今日は合點がいつただらう」
梅公「ヤアもう徹底的に分りました。有難い事には、日の出神様と龍宮の乙姫さまが私の肉體にお懸り下さいまして、結構で御座いました」
黒姫「これこれ梅公、何と云ふ傲慢不遜な事を言ひなさる。日の出神様は、誠水晶の生粹の根本の元の身魂でなければお憑りなさらず、又龍宮の乙姫さまは、因縁の身魂でなければ、誰にも、彼れにもお憑りなさる筈がない。「昔から神はも

のを言はなんだぞよ。世の變り目に神が憑りて、世界の人に何かの事を知らせねばならぬから、因縁の身魂に神が憑りて、世界の初まりの事から、行末の事、身魂の因縁性來を細かう説いて聞かして、世界の人民を改心さすぞよ。稻荷位は誰にも憑るが、誠の大神は禰宜や巫子には憑らぬぞよ」と變性男子の身魂が仰有つて御座る。それに何ぞや、下司の身魂にソナ結構な神様が憑りなさる筈があるものか。日の出神の生宮が、さう二つもあつたり、龍宮の乙姫さまの生宮が、さう彼方にも此方にも出來て堪るものか。お前は一寸良いと直によい氣になつて、慢心をするなり、一寸叱られると、直に青くなつてビシヨビシヨとして了ふ。それと云ふのも、モ一つ腹帯が締つて居らぬからぢや。身魂相應の御用をさされるのぢやから、慢心をし、高上りをしてブチヤダレ又様にしなされや、燈臺下はまつ暗がり、自分の顔の墨は分るまい。空向いて世の中を歩かうと思へば、高い石に躓いて、逆トンボリを打たねばならぬぞよ。開いた口がすばまらぬ様なことのない様に、各自に心得たが宜いぞ」

梅公「ヤア承知致しました。併し乍ら、臨時御降臨遊ばしたのだから仕方があり

ませぬ」

黒姫「そら何を云ひなさる。神憑には公憑、私憑と二つの種類がある。其中でも私憑と云ふのは、因縁の身魂丈によりお憑りなさらぬと云う事ぢや。國治立命は變性男子の肉體、日の出神は系統の肉體、龍宮の乙姫は又その系統の肉體と、チヤンと定つて居るのぢや。公憑と云うて、上の方の身魂にも、中の身魂にも、下の身魂にも臨機應變に憑ると云ふ様な、ソナ自墮落な神さまとは違ひまつせ。龍宮の乙姫さまを、何と云うて居りなさる。チツトお筆先でも拜讀きなさい。お筆さへ腹へ締め込みておきたら、目前の時に、ドンナ神力でも與へて下さる。兔角お前達は、字が悪いと云、読み難いと云、クドイと云、首尾一貫せぬと云、肉體が混つとると云、ここは神諭ぢや、此點は人諭ぢやと、屁理屈ばつかり仰有るから、サツパリ譯が分らぬ様になつて了うのだ。日の出神の生宮のお書き遊ばしとお筆先を審神したり、しやうとするから間違ふのだ。是れから、絶対に有難いと思つていただきなさい」

梅公「私はお道を開く因縁の身魂ぢやありませんか」

黒姫「きまつた事ぢや。因縁なくて、此結構なウラナイ教へ來られるものか」

梅公「因縁の身魂の中でも、私は最も因縁の深いものでせう。高姫さまは高天原

に因縁のある名ぢやし、黒姫さまは、「くろう」の固まりの花が咲くとお筆先に

因縁があるなり、私は三千世界一度に開く梅の花と云ふ、變性男子の初發のお筆

先に出で居る因縁の名ぢやありませんか。何と云つても梅は梅、一度に開く役は

梅公の守護神のお役でせう」

黒姫「此廣い世界に、梅の名のつくのは、お前ばかりぢやないわいな」

梅公「それでも、今あなた、因縁の身魂ばかり引き寄せて有ると仰有つたぢや

ありませんか。ウラナイ教へ引寄せられた人間の中に、梅の名の付いた者が、一

人でもありませんか。松で治めると云ふ、松に因縁のある松姫さまは、高城山であ

の通り羽振りを利用し、なぜ此梅公は、さうあなたから輕蔑されるのでせう」

黒姫「もうチツと修業しなされ。さうしたら又、松姫と肩を並べる様にならうも

知れぬ。併し今日は初めて綾彦、お民に、宣傳を、龍宮の乙姫の肉體が、直接に

してあげるから、お前もシツカリ聴きなされ。そして此肉體の宣傳振をよく腹へ

締め込みて、世界を誠で開くのぢやぞえ

梅公「それは有難う御座います。吾々も傍聴の榮を得まして……」

黒姫「コレコレあまり喋るものぢやない……男だてら……口は禍の門ぢや。黙つ

て謹聴しなさい」

と押へつけ乍ら、少し曲つた腰付をして底太い聲を張上げ歌ひ始めたり。

昔の昔その昔 遠き神代の初めより

國治立の大神は 千座の置戸を負ひ給ひ

世を良に隠れまし 三千年の其間

苦勞艱難遊ばして 此世を永久に開かむと

種々雑多と身をやつし 蔭の守護を遊ばされ

ミロクの御代を待ち給ふ 時節参りて煎豆に

花咲く御代となりかはり 變性男子の御身魂

道具に使ふて昔から 末の末まで見通され

尊たふときお筆ふでを出いだしまし 世よに落おちぶれた神かみがみ々々を

今こんど度いつしよ一いっしよ緒しよに世よにああげて それぞれれお名なを賜たまひつつ

神かみの御ご用ように立たて給たまふ 時じ節せつ來きたのを龍りう宮ぐうの

乙おと姫ひめ様さまは活くわ潑つぱつな 御お察さつの良よい神かみ故ゆゑに

今いままで生いのち命ちと蓄たくはへた 金きん銀ぎん、珠しゆ玉ぎよく、珊さん瑚こ珠じゆも

残のこらず寶たから投なげ出だして 大おほ神かみ様さまへ獻たてつり

穢きたない心こころをスツパりと 海うみへ流ながして因いん縁ねんの

身み魂たまと現あれし黒くろ姫ひめを 神しん政せい成じやう就じゆの機き關わんとし

現あらはれ給たまうた尊たふとさよ 今いままで龍りう宮ぐうの乙おと姫ひめの

醜みぐるしかつた御み靈たま丈だけ 系ひつ統ぽうの身み魂たまに憑つられて

懺ざん悔げ遊あそばし一いち番ばんに 改かい心しんなされた利り巧かう者もの

三さん千ぜん世せ界かいの世よに落おちた 神かみ々々さまは龍りう宮ぐうの

乙おと姫ひめさまを手て本ほんとし 力ちから一いつ杯ぱい身み魂たまをば

磨みがいて今こんど度ごの御ご大たい謨もに お役やくに立たつた其その上うへで

それぞれお名を頂いて 結構な神と祀られる

三千世界の梅の花 一度に開くと云ふ事は

永らく海の底の底 お住居なされた龍宮さま

肉のお宮にをさまりて 廣い世界の民草に

誠一つのお仕組を 現はしなさるお働き

日の出の神と引つ添うて 今度の御用の地となり

神の大望成就させ 天にまします三體の

大神様へ地の世界 斯うなりましたとお目につけ

お手柄遊ばす仕組ぞや 此お仕組は三五の

神の教を嚴御靈 變性男子の筆先に

くまめる様に書いてある 其筆先の読み様が

足らぬ盲のミツ御靈 變性女子が混ぜ返し

蛙の行列向ふミツ 瑞の御靈と偉相に

日の出神の筆先を 何ぢや彼ンぢやとケチをつけ

くろひめ 黒姫までも馬鹿にする
され共此方はどこまでも

こば 耐り耐り出て来たが
あま 餘り何時まで分らねば

ぜひ 是非に及ばず帳を切り
あく 悪の鑑と現はして

まんごう 萬劫末代書き残す
へんじやう 變性男子は唯一人

へんじやう 變性女子も亦一人
それ何ぞや三つ御靈

みつ 三つもあつてたまるか
このこと 此事からが間違ひぢや

へんじやう 變性男子は經の役
へんじやう 變性女子は緯の役

たて 經と緯とを和合せ
にしき 錦の機を織る仕組

ひ 日の出神が地となりて
りうぐうさま 龍宮様のお手傳ひ

こんど 今度一番御出世を
あそ 遊ばす事を知らないか

かなら 必ず必ず三五の
よこ 緯の教に迷ふなよ

たて 經が七分に緯三分
これでなければ立派なる

まこと 誠の機は織れないに
あななひけう 三五教の大本は

しだい 次第々に紊れ来て
たて 經が三分に緯七分

變性男子は先走り

變性女子は彌勒さま

何ぢや彼ンぢやと身勝手な

理屈を竝べて煙に巻く

此儘棄てて置いたなら

變性男子の永年の

艱難苦勞も水の泡

水の泡にはさせまいと

系統の身魂を選び抜いて

日の出神が現はれて

誠の筆先書きしるし

一度讀めよと勸むれど

變性女子の頑固者

どうして此れが讀まれよかと

聲を荒立て投げつける

それ程厭なら讀までよい

後で吠面かわくなと

言うて聞かしてやつたれど

譯の分らぬ頑固者

神の恵を仇に取り

何ほど親切盡しても

モウこの上は助けやうが

無いと悔みて高姫が

何時も涙をポロポロと

零して御座るお慈悲心

それに續いて分らぬは

金勝要の大御神

この肉體もド澁とい

まだまだ澁しぶとい奴やつがある

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

生命いのちの綱つなが切きれるとも

日ひの出での神かみの筆ふで先さきは

當あてにならぬと撥はねつける

木この花はな姫ひめの生いき宮みやと

嘘うそか本ほん真まか知しらねども

現あらはれ出いでた男をとこ女めらう郎

火ひが蛇じゃになるがどうしようが

改かい心しんさせねば置おくものか

縦たてから横よこから八はつ方ほうから

探さぐ女め醜しこめ女つがを遣つかはして

いろいろ骨ほねを折おるけれど

固もとより愚ぐ鈍どんな生うまれつき

石いしの地ぢ藏ざうに打うち向むかひ

説せつ教けうするよな鹽あん梅ばいで

どうしても聞きかうと致いたさない

木この花はな姫ひめの肉にく體たいを

改かい心しんさせねば何い時つまでも

神かみの仕し組ぐみは成じやう就じゆせぬ

ウラナイ教けうも榮さかやせぬ

サア是これからは黒くろ姫ひめの

指さし圖づに従したがひ身みをやつし

千せん變べん萬ばん化くわに活くわ動どうし

一日ひとひも早はやく因いん縁ねんの

身み魂たまを改かい心しんさす様やうに

祈いのつて呉くれよ黒くろ姫ひめも

これから百ひやく日にち百ひやく夜よは

劍尖山の谷川の 産のお水で身を清め

一心不亂に祈念する ア、惟神々々

御靈幸はひましませよ

と汗をブルブルに掻き、身體一面ポーツポーツと湯氣を立て、

「アア苦しいこと。……世界の人民を助けようと思へば、竝大抵ぢやない、變

性男子や高姫さまの御苦勞が身に浸みて、「おいと」しう御座るわいの、オンオ

ンオン

と泣き崩れる。

これより黒姫は、百日百夜、宮川の瀧に水行をなし、高山彦の懇望もだし難く、

一旦數多の信徒を宣傳使に仕立てて、自轉倒島の東南西北に間配り置き、手に手

を把つて、フサの國へ渡り、高姫の身許に着きける。高姫は三五教の勢力侮り難

きを黒姫より聞き、黒姫を北山村の本山に残し置き、自らは二三の弟子と共に、

自轉倒島に渡り、再び魔窟ヶ原に現はれ、衣懸松の下にて庵を結び、三五教覆滅

の根據地を作らむとして居たのである。又もやそれより由良の湊の一人の司、秋山彦が館に於て、冠島、沓島の寶庫の鍵を盗り、遂には如意寶珠の玉を呑み、空中に白煙となりて再び逃げ歸りしが、それと行違に黒姫は、又もや魔窟ヶ原に現はれ、草庵の焼跡に新に庵を結び、前年高姫と共に築き置きたる地底の大岩窟に居を定め、極力宣傳に従事して居たりしなり。然るに黒姫の部下に仕ふる夏彦、常彦、其他の弟子共は、フサの國より扈從し來り乍ら、少しも黒姫に夫ある事を知らざりける。黒姫は獨身主義を高唱し、盛んに宣傳をして居た手前、今更夫ありとは打明け兼ね、私に高姫に通じて、神界の都合と稱し、始めて夫を持つた如く装ひける。高山彦の表面入婿として來るや、以前の事情を知らざりし弟子達は、黒姫の此行動に慊らず、遂にウライナイ教を脱退するに至りたるなり。夏彦、常彦以下の主なる者は、此時高城山に立籠り、東南地方を宣傳し居たれば、梅、淺、幾などの計らひに依りて、新に入信したる綾彦の事は少しも知らざりける。また高城山の松姫が侍女として仕へ居るお民の素性も、氣が付かず、唯普通の信者とのみ思ひて取扱ひ居たりしなり。黒姫は又もや劍尖山の麓を流るる宮川に、綾彦

外一人を伴ひ、襖の最中、紫姫、青彦の一行に出會し、青彦が再びウライナイ教に復歸せしと聞き、喜び勇みて、この岩窟に意氣揚々として歸り來たりしなり。

黒姫「サアサアこれが妾の假の出張所だ。大江山の惡魔防ぎに地下室を拵へて有るのだから、這入つて下さいませ。……青彦、お前は勝手をよく知つてる筈ぢや。

どうぞ皆さまを叮嚀に案内をしてあげて下さいな」

鹿公「ヤアこれは又奇妙なお住居ですな、三五教の反對で、穴有教だなア、ヤア結構結構、穴有難や穴たふとやだ」

と一人々々、ゾロゾロと迂り込む。

黒姫「モシモシ高山彦さま、極道息子が歸つて來ました。どうぞ勘當を赦してや

つて下さい」

高山彦「ヤアお前の常々喧しう言つて居つた……これが青彦だらう」

青彦「ハイ始めてお目にかかります。どうぞ宜しう御願ひ致します」

高山彦「ハイハイ、もう是れからは、あまりグラつかぬ様にして下さい」

青彦「決して決して、御心配下さいませな」

高山彦「ヤアなんと綺麗な娘さまがお出になつたぢやないか」

青彦「此お方は由緒ある都の方で御座いますが、お伊勢様へ御参拜の折、黒姫様の

言靈を聞いて、大變感心遊ばし、「どうぞ妾も入信が致したう御座いますから、

青彦さま、頼みて下さいな」なんて、それはそれは優しい口許でお頼みになり

ました。私もコンナ綺麗な方が、男ばかりの所へお出になつては、嘸御迷惑だ

らうと思ひましたけれども、折角のお頼み、無下に斷る譯にもゆかず、黒姫様に

御取次致しました。黒姫さまは二つ返辭で承知して下さいました」

紫姫「ホ、、、、、」

と袖に顔を隠す。

黒姫「コレ青彦、チツと違つては居らぬかな」

青彦「アーさうでしたかなア。あまり嬉しかったので、精神錯亂致しました。ど

うぞ見直し聞直しを願ひます」

黒姫「青彦お前は久振で親の家へ歸つたのだから、氣を許して奥でゆつくりと寝

なされ、今は新顔ばつかりで、お前の知つて居る者は、みなフサの國の本山へ往つたり、高城山へ行つて居る、馴染がなくて寂しいだらうが、氣の良い者ばつかりだから、氣兼ねなしにユツクリと休まつしやい。馬公鹿公も、トツトとお休み、又明日になつたら結構な話を聞かしてあげる。……サテ紫姫さまとやら、あなたは三五教の宣傳使におなりになつたのは、何を感じてですか。何か一つの動機がなければ、あなたの様な賢明な淑女が、あの様な瑞の御靈の混ぜ返し教に入信なさる道理がない。みな奥へ行つて睡眠みて了つたから、誰も聞く者もないから、遠慮なしに話して下さいな」

紫姫「ハイ有難う御座います、別に是れと云ふ動機も御座いませぬ。國家の爲社會の爲に舍身の活動をなさる瑞の御靈の大神さまに同情を表しまして、つい何とはなしに宣傳使になりました」

黒姫「それはそれは結構な事だ。身魂の因縁がなくては、到底尊い宣傳使にはなれませぬ。三五教もウラナイ教も、みな變性男子、變性女子と、經と緯との身魂が現はれて錦の機の仕事をなさるのでやが、併し乍ら、素盞鳴尊は天の岩戸を閉

めるお役で、大神様が、此世の亂れた行方がさしてあると仰有る。ナンボ神様の仰有る事でも……これ丈亂れた世の中を、治める事を措いて、亂れた方の御守護をしられて堪りますか。そこで吾々は元は三五教の熱心な取次だが、今では變性女子の行方に愛想をつかし、已むを得ず、ウライ教と名をつけて、神様の御用をして居りますのぢや。同じ事なら三五教の名が附けたいけれど、高姫や黒姫は、支部ぢやとか、隱居ぢやとか言はれるのが癢に障るので、已むを得ず結構な結構なウラル教の「ウラ」の二字を取り、アナナイ教の「ナイ」の二字をとつて、表ばつかり、裏鬼門金神の變性女子の教は一寸も無いと云ふ、生粹の日本魂のウライ教ぢや。お前も、同じ宣傳使になるのなら、喰はせものの三五教を廢めてウライ教になりなされ。あなたのお得ぢや。否々天下の爲ぢや」

紫姫「素盞鳴尊さまは、それ程悪いお方で御座いますか。世界萬民の爲に千座の置戸を負うて、世界の悪を一身に引受け、人民の悪い事は、みな吾が悪いのぢやと言つて、犠牲になつて下さる神さまぢや有りませぬか」

黒姫「それはさうぢやけれども、モ一つ我が強うて改心が出来ぬものぢやから、

神界のお仕組が成就しませぬ。何と云うても、高天原から、手足の爪まで抜かれて、おつ放り出される様な神ぢやから、大抵云はいでも分つとる。お前も能う胸に手を當てて御思案なさいませ」

紫姫「ウラナイ教には、ちツとも……仰有る通り裏がないので御座いますか」

黒姫「勿論の事、見えた向きの、真正正銘、併し乍ら、神様のお仕組は奥が深いからなア、一寸やそつとに、人間の理屈位では分りませぬ。マアマア暫く絶対服従で信神して見なさい。御神徳が段々分つて来るから」

斯く話す折しも、慌ただしく走り歸つた二人の男。

黒姫「ヤアお前は瀧と板とぢやないか」

「ハイ左様で御座います」

黒姫「昨日から此處を飛び出した限り、どこをウロウロ迂路ついとつたのだい」

瀧公「ハイ昨日遅がけに、一人の女が通りましただらう。それをあなたが捉まへて来いと仰有つたものだから、此奴ア又、梅公の故智に倣つて、一つ大手柄を現はし、あの女を入信させてやるか、あまり諾かねば、何れ三五教の奴だから、叩

き潰つぶしてやらうかと思おもうて、あなたの御命令ごめいれいで追おひかけて行ゆきました」

黒姫くろひめ「誰たれが叩たたき潰つぶせと言いったのか。丹波村たんばむらのお節せつに違ちがひないから、捉つかまへて来こい

と言いったのだ、そして其そのお節せつを如何どうしたのぢやい」

瀧公たきこう「板公いたこうと二人ふたり、尻しりひ引き捲まくつて……お節せつは走はしる、二人ふたりは追おひかける、船岡山ふなをかやまの

手前てまへまでやつて来くると、日ひは暮くれかける。お節せつは石いしに躓つまずきパタリと倒たふれたので、

其間そのあひだに追おひつき、無理無體むりむたいに手足てあしを括くくり、暗やみの林はやしに連つれ往いつて、グツと縛しばりつけ、

猿轡さるくつわを箝はませ、再ふたび姿すがたを改あらため、……コレコレどこのお女中ぢよぢゆうか知しらぬが、コンナ

所ところに悪者わるものに括くくられて可愛想かあいさうに……と云いつて助たすけてやる。さうすれば如何いかなお節せつも

ウラナイ教けうの親切しんせつに感かんじて、三五教あななひけうを思おもひ切きるだらう……と思おもひまして、一寸智ちよつとち

慧えを出だしました。さうした所ところが、お前まへさまがやつて来きて、種々いろ々と仰おつ有しやるものだけ

ら、暗くらがり乍ながら御案内ごあんないしました。……あなた覺おぼえが御座ございます……忽たちちお節せつは

息いきが切きれ、厭いやらしい聲こゑを出だして、化ばけて出でよつた、其途端そのとたんに私わたくしは尻餅しりもちを搗ついて、

暗くらさは暗くらし、傍かたはらの谷川たにがはへサクナダリに落おち瀧たきつ、腰こしイタツ磐根いはねに打据うちすゑて、それ

はそれは酷えらい目めに遭あひました。暫しばくは氣きを取り失うしなうて、半死はんじにになつて了しまひ、苦くるしみ

て居るのに、あなたは側へ来て居り乍ら私を見殺しにして歸りなさつたぢやないか。何時も人を助ける助けると仰有るが、アンナ時に助けて貰はねば、常に御大將と仰いで居る甲斐がありませんワ」

黒姫「そら何を云うのだ、妾が何故ソナ所へ行く必要があるか、又何とした亂暴な事をするのだい。ソナ事がウラナイ教の教にありますか。モウ今日限り、破門するツ、サア出て行け出て行け」

瀧公「悪人は悪人とせず、鬼でも、蛇でも、餓鬼蟲けらでも助けるのが、ウラナイ教ぢや有りませぬか。出て行けとはチツと聞えませぬワ」

黒姫「モシ紫姫さま、斯う云ふ取違する者がチヨコチヨコ出来ますので、誠に困ります。併し乍ら、コンナ者ばかりぢや御座いませぬ。これは大勢の中でも、選りに選つて一番悪い奴で御座います。そして又入信してから、幾らもならぬものですから、つい脱線をしましてナ」

板公「モシモシ黒姫さま、餘り甚いぢやありませんか、私が悪人なら、モツとモツと大悪人が澤山居りますで……綾彦だつて、お民だつて、改心したのは、あ

なた知らぬか知らぬが、それはそれは大變な酷い事をやつて入信させたのだ。私も兄弟子の兵法を倣つて巧くやらうと思つたのが當が外れた丈のものですよ、あれ程喧しう下の者が噂をして居るのに、あなたの耳へ這入らぬ筈はない、一年からになるのに、世界が見え透くと云ふあなたが、知つとらぬとは言はれませぬ。腹の底を叩けば、「權謀術數的手段は用ゐるな。併し俺の知らぬ所では都合よく行れ、勝手たるべし」と云ふ、あなたの御精神でせう」

瀧公「ソナナこたア、言はなくても定まつて居るワイ。あれ程、神の取次する者は、獨身でなければ可かぬと仰有つた黒姫さまでさへも、ヤツパリ言うた事をケロリと忘れて因縁だとか、御都合だとか理屈を付けて、ハズバンドを持たつしやるのだもの、言ふ丈野暮だよ」

黒姫「何を言ふのだ。早う出て下さい」

瀧公「都合が悪うおますかなア……初めての入信者の前ですから、成るべくは、ソナナ内幕話は言ひたくはありませんが、お前さまが今日から除名すると仰有つた以上は、今迄の師匠でもなければ、弟子でもない。力一杯奮戦して、どこまで

も素破拔きませうか」

黒姫は唇を震はし、目を逆立て、クウクウ歯を喰ひしばつて、怒つて居る。

瀧公「モシ黒姫さま、怒る勿れ……と云ふ事がありますなア。怒つて居るのぢや

ありませんか。チツと笑ひなされ」

黒姫「ウーム ウーム」

と齒を喰ひしばり、目を剥いて居る。

紫姫「これはこれは瀧さまとやら、板さまとやら、良い加減にお静まりなさいま

せ。夜前あなたがお節さまを惱めて御座る所を、妾外三人の者がよく見て居りま

した。黒姫さまは決してお出でぢやありません。妾の連の鹿と云ふ男が黒姫さま

の……暗を幸ひ……聲色を使ったのですよ。それに黒姫さまがお出でになつたな

ぞと仰有つてはお氣の毒ですワ、お節さまはこの奥へ来て、スヤスヤ寝みてゐら

つしやいますよ」

「エー何と仰有る、お節さまが……そいちやア大變だ」

紫姫「さう御心配なされますな、青彦さまも見えて居ります」

瀧公たきこう「ヤアうつかりして居ると、ドンナ目に合ふか分らぬぞ。仇討かたきうちに………岩窟退いはやたい治ぢに來きよつたのだなア。………オイ板公いたこう、黒姫くろひめさまはどうでも良い。生命いのちあつての物種ものだねだ、見付みつけからぬ間に、一刻いっこくも早く此場このばを退却たいきやくだ」
と瀧たきは驅出かけだす。板いたも續つづいて、

「オイ合點がってんだ」

と後あとを追おふ。黒姫くろひめは、

「オイこれこれ、瀧公たきこう、板公いたこう、待まつた待まつた、言いひたい事ことがある」

瀧板たきいたの兩人りやうにんは、岩穴いはあなの外そとから内うちを覗のぞいて、

「黒姫くろひめさま、左様さやうなら、ゆつくりと、青彦あをひこやお節せつに、脂あぶらを搾しぼられなさつたが宜よか

らう、アバヨ、アハ、、、、、ウフ、、、、」

と云いつた限きり、何處どこともなく………それ限きりウラナイ教けうには姿すがたを見みせなくなりけり。

紫姫むらさきひめは氣きの毒どくがり、

「モシモシ黒姫くろひめさま、お腹はらが立たちませうが、若わかい人ひとの仰有おつしやる事こと、どうぞ宥ゆるして上あ

げて下さいませ、……イヤもう人を使へば苦を使ふと申しまして、御苦心の程、お察し申します」

黒姫「これはこれは、ご親切によう言うて下さいました。無茶ばかり申しまして困ります。これと言ふのも、決して決して、瀧や板が申すのぢや御座いませぬ。又さう云ふ様な悪い事をする男ぢや有りませぬが、素盞鳴尊の悪神の眷屬が憑つて、吾々を苦めやうと思つて、アンナ事を言つたり、したりするのです。チツとも油断はなりませぬ。悪神に使はれた、瀧公板公こそ不憫な者で御座います、オンオンオン」

と泣き眞似をする。

紫姫「黒姫さま、モウお休みなさいましたらどうでせう。大分夜も更けた様です」

黒姫「ハイ有難う、ソナラお先へ御免蒙りませう。明日又ゆつくりと、根本の

お話を聴いて貰ひませう」

紫姫「ハイ有難う」

と互に寢に就きにける。

(大正一一・四・二六 舊三・三〇 松村眞澄録)

第四篇 舍身活躍しやしんくわつやく

第一章 相見互あひみたがひ (六三九)

降りみ降ふらずみ空そら低ひくう 四邊あたりは暗くらく黄昏たそがれて

山時鳥遠近やまほととぎすをちこちに 本巢ほんざうかけたか、かけたかと

八千八聲はっせんやこゑの血ちを吐はいて 聲こゑも濕しめりし五月空さつきぞら

憂うきに惱なやめる人々ひとびとを 教をしへて神かみの大道おほみちに

救はむものと常彦が
鬼ヶ城山後にして

足もゆらゆら由良の川
蛇が鼻、長谷の郷を越え

生野を過ぎての檜山
須知、蒲生野を乗り越えて

駒に鞭打つ一人旅
観音峠の頂上に

シトシト来る雨の空
遠く彼方を見渡せば

天神山や小向山
花の園部も目の下に

横田、木崎と開展し
高城山は雲表に

姿現はす夜明け頃
眼下の野邊を眺むれば

生命の苗を植つける
早乙女達の田の面に

三々伍々と隊をなし
御代の富貴を唄ふ聲

さながら神代の姿なり。

常彦は峠の上の岩石に凭れ、夜の旅路の疲れを催し、昇る旭を遙拜しつつ、知らず識らずに睡魔に襲はれ居る。

くわんおんたつげ ちやうじやう
観音峠の頂上さして、東より登り来る二人の乞食姿、

甲 人間も、斯う落魄れては、どうも仕方がないぢやないか。何程男は裸百貫だ

と云つても、破れ襦袢を一枚身に着けて、斯うシヨボシヨボと、雨の降る五月雨

の空、どこの家を尋ねても、戸をピツシヤリ閉めて、野良へ出て居る者ばかり、

茶一杯餐ばれる所も無し、谷川の水を掬つて飲めば、鹽分はあるが、忽ち腹の加

減を悪うして了ふ。裸で物は遺失さぬ代りに、何か有りつかうと思つても、せめ

て着物丈なつとなければ、相手になつて呉れる者もなし。純然たるお乞食さまと、

誤解されて了ふ。實に残念だなア

乙 天下を救済するの、誠の道ぢやのと、偉相に言つて居るウラナイ教の高城山

の松姫も、今迄とは態度一變し、飯の上の蠅を拂ふ様に虐待をしよつたぢやない

か。これと云ふのも、ヤツパリ此方の智慧が足らぬからぢや。雨には颯られ、風

にはなぶられ、おまけに蚊にまで襲撃され、七尺の男子が、此廣い天地に身を容

る所もなき様になつたのも要するに、智慧が廻らぬからだよ。あの梅公の奴を

始め、松姫の如きは、随分陰險な代物だが、巧妙く黒姫に取入つて、今では豪勢

なものだ。何とかして、モウ一度黒姫の部下になる譯にはいかうまいかなア」
甲「一旦男子が廣言を吐いて、此方から暇を呉れた以上、ノメノメと尾を掉つて
歸ぬ事が出来ようか。鷹は飢ゑても穂を喙まぬ……と云ふ事がある。ソナ弱音を
吹くな、暗の後には月が出るぢやないか」
乙「人間の運命と云ふものは定まつて居ると見える。黒姫や高姫、松姫はどこと
もなしに、丸い豊かな顔をして居るが、丸顔に憂ひなし、長顔に憂ひありと云つて、
俺達は金さへ有れば、社會にウリザネ顔だと言つて、歡待る代物だけれど、今日
の様な態になつては、ますます貧相に……自分乍ら見えて來る。自分から愛想を
つかす様な物騒な肉體、何程馬鹿の多い世の中だと言つて、誰が目をかけて呉れ
る者が有らうか。アア仕方がない。何とか一身上の處置を附ける事にしようか
い。又ースー式をやつては、神界へ對して罪を重ね、萬劫末代苦しみの種を蒔か
ねばならず、實、さうだと言つて、自殺は罪惡であり、死ぬにも死なれず、困つ
た者だ。どうしたら此煩悶苦惱が解けるであらう。否スツパリと忘れられるだら
う」

甲 心一つの持ちやうだ。刹那心を樂むんだよ

乙 貴様はまだ、ソナ氣樂な事を言つて居るが、衣食足りて禮節を知るだ。今日で三日も何も食はずに、胃の腑は身代限りを請求する。一步も歩む事も出来なくなつて、どうして刹那心が樂めよう。刹那々に苦痛を増ばつかりぢやないか。アアこれを思へば、黒姫の御恩が今更の如く分つて來たワイ

甲 ヤア情ない事を言ふな。そら其處に三五教の宣傳使が立つて居るぞ

乙 モウ斯うなつちやア、三五教もウラナイ教も有るものぢやない。食はぬが悲しさぢや。飢渴に迫つてから、恥しいも何も有つたものかい

と常彦の佇む前に進み寄り、

乙 『モシモシ、あなたは三五教の宣傳使ぢやありませんか』
と力無き聲に、常彦はフツと目を醒し、

『アア夜の旅で草臥れたと見えて、知らぬ間に寝込んで了うたワイ。……ヤアお前は乞食と見えるな。何ぞ御用で御座るか』

乙は何にも言はず、口と腹を指し、飢に迫れる事を示した。

常彦「ヤア一人かと思へば、二人連ぢやな。幸ひ、ここに握り飯が残つて居る。

失禮だが之をお食いなさらぬか」

乙「ハイそれは有難う御座います。早速頂戴致しませう。……オイ瀧公、助け船

だ兵站部が出来たぞ。サア御禮を申せ」

瀧公「アーそんなら頂戴しようかなア、恥しい事だ。旅人の辨當を貰つて食ふの

は、生れてから始めてだ」

と四個の握り飯を分配し、二ツづつ、飛び付く様に平げて了ひ、

乙「アアこれで少し人間らしい氣がして來た。……イヤ宣傳使様、有難う御座

います。……併し乍ら此先は又どうしたら宜からうかなア」

瀧公「刹那心だよ。又神様がお助け下さる。心配するな。……何れの方か知りま

せぬが有難う御座いました。これでヤツと、こつちのものになりました」

と見上げる途端にハツと驚き顔を隠す。

常彦「ヤア失禮乍らあなたは、ウライナイ教の瀧公さまぢやありませんか。ヤアあ

なたは板公さま、どうしてそんな姿におなりなされた。何か様子が御座いませう。

差支なくばお聞かせ下さいませいなア」

板公「恥しい所、お目にかかりました。實は斯うなるも身から出た錆、何とも言

ひ様がありませぬが、實の所は、あまり宣傳の効果が擧がらないので、一寸した

事をやりました。それが此通り大零落の淵に沈む端緒となつたのです」

瀧公「誠に赤面の至り、智慧も廻らぬ癖に、人真似をして、大變な失敗を演じ、

闇の谷底へ轉落し、生命カラガラな目に遭ひ、終には黒姫の御機嫌を損ねたのみ

ならず、青彦、お節に踏み込まれ、一生懸命逃げて來ました。それから私等二人

は高城山へ参り、松姫の前に尻を捲つて、ウライナイ教の内幕を暴露してやらうと、

強壓的に出た所、中々の強者、吾々の智囊を搾り出した狂言も、松姫に對しては

兔の毛の露程も脅威を與へず、シツペイ返しを喰つて、生命から此處までや

つて來ました。併し乍ら窮すれば亂すと云ふ諺もありますが、吾々は一且誠の道

を聞いた者、假令餓死しても人の物を失敬する事は絶対に厭で堪らず、最早生命

の瀬戸際、一生の大峠となつた所、あなたに巡り會ひ、一塊のパンを與へられて、

漸く人間心地が致しました。これもアカの他人に恵まれるのであつたならば残念

ですが、有難い事には、一旦御心易うして居たあなたに救はれたと云ふのも、まだ天道は吾々を棄て給はざる證と、何となく勇氣が出て來ました」

常彦「今のお言葉に、青彦お節が黒姫の所へ往つたと仰有つたが、ソレヤ本當ですか」

瀧公「へエへエ本當も本當、一文生中の、掛値も御座いませぬ。今頃は黒姫も、青彦お節其他の二三人の男女に欺かれて、道場を破られ、フサの國へでも逃げて行つたかも知れませんが、高城山の松姫の様子が何だか變で御座いましたから……」

板公「ナ―黒姫はそんな奴ぢやない。キツと青彦、お節は袋の鼠、舌の先で巧くチヨロまかされて居るに違ひない。それよりも惜しいと思うのは、紫姫さまに、馬公鹿公と云ふ若い男だ。キツと、ウラナイ教に沈没して居るに相違ない」

常彦「ハテナ、吾々も御兩人の知らるる通り、ウラナイ教のカンカンであつたが、餘り内容が充實せないのと、黒姫の言心行一致を缺いだ其點が腑に落ちず、又數多の信者に對して、吾々部下の宣傳使として辨解の辭がないので、ア、最早ウラ

ナイ教は前途が見えた。根底から崩れて了つた。斯う云ふ事で、どうして天下の修齋が出来ようぞ、信仰に酔拂つた連中は今の所、稍命脈を保つて居るが、酔拂つた酒は何時しか醒める如く、信仰も追々冷却するは當然の歸結と、前途を見越して、ヤツパリ天下を救ふは三五教だと、直に三五教に入信し、鬼ヶ城の邪神退治と出掛け、それより諸方を宣傳し廻つて居るのだ。それにしても合點のゆかぬは、あれ程決心の堅かつた青彦、お節に紫姫さまぢや。これには何か深い様子が有る事であらう。コラスうしても居られない。一時も早く魔窟ヶ原へ行つて、事の眞偽を確かめ、其上で又作戦計畫を定めねばなるまい。アア困つた事が出来たワイ」

と手を組んで太い息をつく。

瀧公「これに就て常彦さま、あなたは何かお考へがありますか。ならう事なら、私達も共々に三五教の爲に盡さして頂きたいのですが、何を言うても零落れた此體、あなたの顔にかかはりませんから……」

常彦「ソラ何を仰有る。衣服は何時でも替へられる。あなたの今迄の失敗の経験

に會つて鍛へ上げられたる其身魂は、容易に得られるものでない。何は兔も角一緒に参りませう。また都合の好い所が有れば、衣服でも買つて上げませう。兔も角青彦以下の救援に向はねばならぬ。サア瀧公、板公、参りませう。二人は何にも言はず、嬉し涙に暮れ乍ら、常彦の後に従ひ、西北指して、今迄の衰耗敗殘の氣に充された態度は忽ち枯木に花の咲きし如く、イソイソとして従いて行く。

山頭寒巖に倚りて立てる古木も春の陽氣に會ひて深緑の芽を吹き出したる如く、青ざめた顔は忽ち櫻色と變り、常彦に絶對服従の至誠を捧げつつ、花咲き匂ふ枯木峠を打渡り、神の救ひをエノキ峠の急坂後に見て、握り拳をホドいて夏風に、そよぐ蕨の野邊を打渡り、とある茶店に立入りて、再び腹を拵へ忽ち太る大原の郷、テクテク来る須知山峠の絶頂に、青葉を渡る涼しき夏の風を受け乍ら、かたへの巖に腰打掛け、

常彦「ア、早いものだ、モウ一息で聖地に到着する。世繼王山の山麓には、悦子姫さまの經綸場が出来たと云ふ事だ。一つ立寄つて見ようかな。大抵青彦の様子

も分らうから………イヤイヤ今度は素通をして、青彦に對面し、救はるるものならば、どこまでも誠を盡して忠告を與へ、其上にて悦子姫様の庵を御訪ねする事にしよう。幸に青彦以下が改心をして、三五教に復歸したとすれば、先へ妙な事をお耳に入れ置くのは却て青彦の爲に面白くない。友人の道として絶対祕密にしてやるが本當だらう」

瀧公「青彦さまはよもや、ウラナイ教になつて居る氣遣ひは有りますまい」

板公「何とも、保證がでけぬ、突然の事で吾々も岩窟退治に來たのだと思つて驚いたが、後になつてよくよく考へて見れば、どうも黒姫と云ひ、青彦、紫姫さま其他の顔色に少しも變な色が浮かんで居らなかつた。黒姫の魔術に依りて劍尖山の瀧の麓でうまくシテやられたのかも知れない、兔も角も常彦さまをお頼み申して、吾々も弟子となつた以上は、青彦さま一行を元の道へ救はねばなりません。これから首尾能く凱旋する迄、悦子姫様の庵を訪ねなさらぬ方が、萬事の都合が

良い様に思ひます。ナア常彦さま」

常彦「ア、私はさう考へるのだ。何に付けても大事件が突發した様なものだ」

と話す折しも、坂を登り来る二人の男、

男「ヤアあなたは常彦さまぢやありませんか。何處へお出でになつて居ました？

吾々二人は丹州と共に彌仙山の麓に當つて、紫の雲、日々立昇るのを見て、コ

レヤ何か神界の經綸が有るのだらうと其雲を目當に参りました。所が近くへ寄つ

て見れば、恰度虹のようで、其雲は一寸向ふの方に靉靆いて居る。コレヤ大變だ、

どこまで行つても雲を掴むとは此事だと、丹州さまにお別れをして、ここまでや

つて來ました」

常彦「ヤアお前は鬼ヶ城言靈戦の勇士、荒鷹、鬼鷹のお二人さま、どこへ行く積

りだ」

荒鷹「丹州さまは吾々に向ひ仰有るには、一寸神界の御用があるから彌仙山を中

心として暫く此邊を探険しようと思ふから、お前達はこれから聖地を指して進ん

で行け。併し乍ら聖地に立寄る事はならぬ。須知山峠を指して行けとの御言葉、

どこを目的ともなくやつて來ました。其時々には神が懸つて知らしてやるから、安

心して行けとの事、大方伊吹山の邪神退治に行くのではなからうかと思つて参り

ました。併しあなたのお顔を見るなり、何だか向ふへ行くのが張合が抜けた様な気がしてなりませぬワイ」

常彦「それは不思議な事を聞くものだ。何か外に聞いた事は有りませぬか」

鬼鷹「ヤア有ります有ります、大變な變つた事があるのですよ」

常彦「變つた事とは何ですか」

鬼鷹「彌仙山の麓の村に、お玉と云ふ娘があつて、夫も無いのに腹が膨れ、十八ヶ月目に生み落したのが女の子、玉照姫とか云つて、生れてから百日にもならないのに、種々の事を説いて聞かせる、さうして室内を自由に立つて歩くと云ふ噂で……あの近在は持切りで御座います。それに就て、ウラナイ教の黒姫の奴、抜目のない……其子供を何とか彼とか云つて、手に入れようとし、幾度も使を遣はし、骨を折つて居るさうですが、爺と婆アとが、中々頑固者で容易に渡さない。家の血統が斷れると云つて居るさうです。なかなかウラナイ教も抜目がありません。

ぬなア」

常彦「不思議な事が有るものだなア。兔も角吾々も一度其子が見たいものだが、

それよりも先に定めた問題から解決せなくてはならぬ。其問題さへ解決がつかば、黒姫の様子も分り、子供の因縁も分るだらう。併し鬼鷹さま、荒鷹さま、あなたは何處へ行く積りか」

荒、鬼「まだ行先不明……私の行く所は何處で御座います……と實はあなたにお尋ねしたいと思つて居るのです」

常彦「兔も角丹州さまのお言葉通り、行く所までお出でなさいませ。神の綱に操られて居るのだから、今何を考へた所で仕方が有りますまい。併し丹州さまは……あなた方、何と思つて居ますか」

荒鷹「どうもあの方は、吾々としては、正とも邪とも、賢とも愚とも、見當が取れませぬ。つまり一種の……悪く言へば怪物ですなア。併し何とも言はれぬ崇高な所があつて、自然に吾々は頭が下がり、何程下目に見ようと居ても、知らぬ間に吾々の守護神は服従致します」

鬼鷹「私も同感です。何でも特別の神界の使命を受けた方に違ひありません、元吾々が使つて居つた其時分から、少し變だナアと思つて居た。今日の所では、

と 兔も角不可解な人物だ。時々頭上より閃光を發射したり、眉間からダイヤモンドの様な光が放出して忽ち人を射る。到底凡人の品等すべき限りではありませぬワ
常彦、手を組み、首をうな垂れ、思案に暮れて居る。荒鷹、鬼鷹は、
「左様なら常彦さま、又惟神に再會の時に楽しみませう」
と一禮して、スタスタ坂を南へ下り行く。常彦は少しも氣付かず、瞑目して俯む
いて居る。

瀧公「モシ常彦さま二人の方はモウ行かれました」

と背中を揺る。常彦は夢からさめた様な心地、

常彦「ナニ、二人はモウ行かれたと……エー何事も神様のお仕組だらう。とも角、
彌仙山麓へ往つて見たいやうな氣がするが、始めに思ひ立つた青彦の事件から解
決するのが順序だ。サア皆さま、参りませう……」

（大正一一・四・二八 舊四・二 松村眞澄録）

第一二章

大當違「六四〇」

月傾つきかたむいて山やまを慕したひ

人老ひとおいて妄みだりに道みちを説とくとかや

彌仙みせんの山やまの麓ふもとなる

賤しづが伏家ふせやの豊彦とよひこは

三五教あななひけつの宣傳使せんでんし

悦子よしこの姫ひめの一行いっかうに

娘むすめのお玉たまを助たすけられ

世よにも優すぐれし初孫うひまごの

顔かほを眺ながめて老夫婦らうふうふ

蝶てふよ花はなよと勞いたはりつ

神かみの教をしへを説とき諭さとす

此事このこと四方よもに何時いつとなく

風かぜのまにまに傳つたはりて

於お與よ岐ぎの郷さとの爺ぢいさまは

彌仙みせんの山やまと諸共もろともに

其名そのなも高たかくなりにける

老若男女らうじやくなんによは絡繹らくえきと

蟻ありの甘うまきに集つどふが如ごとく

豊彦とよひこ老爺らうやの教示けうじをば

神かみの如ごとくに敬うやまひて

晝ひるは終日ひねもす夜よは終夜よもすがら

救すくひを求もとめて詣まゐり來くる。

中に目立つて三人の大男、宣傳使の服を着けながら、

男「御免なさいませ。私は富彦、寅若、菊若と申す者、此度彌仙山のお宮に参拜

を致し、神勅に依りて承はれば、此山麓の一つ家に豊彦と云ふ方現はれ、誠の教

を傳ふる故、汝等三人は歸路に立寄り、彼れ豊彦をウライナイ教に誘ひ歸れ、娘の

お玉及び今度生れた玉照姫を本山に迎ひ歸れ……との、有り有りとの御神示、神

様のお言葉は疑はれずと、彌仙の山麓を彼方此方と探す内、道行く人に承はれば

於與岐の森の彼方の一つ家こそ、豊彦さまの住宅と聞いた故、御神勅により出張

仕りました」

と門口に立つた儘呶鳴つて居る。幸ひ今日は参詣者もなく、老夫婦と娘、孫の四

人、彌仙の神靈を祀りたる靈前に、拜跪黙禱する最中であつた。豊彦は拜禮を終

へ、門口近く進み來り、

豊彦「どなたか知らぬが、門口に何か尋ぬる人が有るらしい、何れの方が、先づ

戸を開けてお這入りなされませ」

寅若「ハイ有難う」

と斜交はすかひになつた雨戸あまどをガラリと開あけ、

寅若とらわか『ヤア随分立派な家うちだなア……オイ富彦とみひこ、菊若きくわか、這入はいれ、……汚きたない家うちに不似ふにあ

合ひな綺麗きれいな娘むすめさまが御座ござるなア、下水せせなぎに咲さいた杜若かきつばたと云いはうか、谷底たにそこの山櫻やまざくら、こ

れはどつか良いい所ところへ植替うゑかへたならば、随分立派な者ものになるだろう』

豊彦とよひこ『コレコレお前まへさまの仰有おつしやる通りムサ苦くるしい茅屋あばらやなれど、これでも私わたしの唯ゆめい一

の休養場きうやうばぢや、……あまり失禮しつれいぢやありませんか』

と足音あしおと荒あらく、破やぶれ疊たたみを威喝あかつし乍ながら、上あがり口ぐちに下おりて來きて、ジロジロと三人さんにんの顔かほを

睨にらみつけて居ゐる。

寅若とらわか『ヤアこれはお爺ぢいさま、誠まことに失言しつげんを致いたしました。決けつして悪わるく申まをしたのぢや御ご

座ざいませぬ。少すこしも飾かざりのない、正しやうぢきしやうめい直ち銘めいな、心こころに映えいじた儘ままを申まを上げたのだから、

お悪わるく思おもつて下くださいますな、歪ゆがみかかつた家いへを、立派りっぱな家いへだと云いつた方ほうが却かへつて

嘲弄てうろうした事ことになりませう。お多福かめを掴つかまへて、お前まへは別嬪べつびんだと言いへば、お多福かめは

馬鹿ばかにしたと言いつて怒おこる様やうなもので、兔と角かくも神かみの道みちに仕つかへて居ゐる者ものは、チツと

も斟酌しんしやくとか巧言じやうげんとかが有ありませぬ、お氣きに障さはりましたら、どうぞ宿ゆるして下くださいま

せ
」

豊彦 『ソレやお前の言ふ通りぢやが、併し碌に挨拶もせないで、イキナリ吾々の住宅を非難すると云ふのは、あまり此方も氣の良いものぢやない。お前も宣傳使だと仰有つたが、斯う云うたら人が感情を害するか、害せないか位は分りさうなものだなア』

寅若 『只今申したのは決して寅若では有りませぬ。彌仙山に鎮まります大神の眷屬、寅若天狗が言つたのです。天狗と云ふ奴は世に落ちぶれて、神様の下働きばかりやつて居ますから、行儀も無ければ、作法も知らず、酒呑みの極道天狗もあり、どうぞお赦し下さいませ。何分身魂が研け過ぎて居るものだから、感じ易うて直に憑られて困ります、アハ、ハ、ハ』

豊彦 『さうして御神勅の趣はどう云ふ事だ、早く聞かして貰ひませう』

寅若 『御存じの通り、私はあまり素直な身魂で、種々の神が憑依致しますから、餘程審神をせねばなりません。此富彦と云ふ宣傳使は、それはそれは立派な者で御座います。實は富彦に御神勅が有つたのです。サア富彦さま、御神勅の次第

をお爺さまにお知らせなされ」

富彦、両手を組み、威丈高になり、

富彦「コ、此方は、彌仙山に守護致す木花咲耶姫であるぞよ。此度汝が家に、

木花姫の御霊、玉照姫を遣はしたのは、深き仕組の有る事ぢや、何事も皆神から

させられて居るのだから、吾子であつて、吾子ではないぞよ。体内に宿つて十ヶ

月目に生れ出でたる此玉照姫は、神のお役に立てる爲に、昔から因縁の身魂を探

して、其方が娘に御用をさせたのであるぞよ。サア是れからは其玉照姫を神の御

用に立てるが良いぞよ。神の申す事を諾かねば諾く様に致して諾かしてやるぞよ。

返答はどうぢや、豊彦、承はらう」

豊彦、平氣な顔でニタリと笑ひ、三人の顔をギョロギョロ眺め、

「ハ、ハ、ハ、お前達、巧妙い事を行いますなア。田舎の老爺ぢやと思つて、一

杯欺けようと企んで來ても、斯う見えても此爺はナカナカ、酢でも蒟蒻でも行く

奴ぢやない。お前達とは役者が七八枚も上だから、其手は喰ひませぬワイ、アツ

ハ、ハ、ハ、なる程人間の子は十月で生れるだらうが、此方の子はそんな仕入とは

チツと種が違ふのだ。神さまもタヨリ無いものだなア。實際お前様に大神が懸つて仕組まれたのならば、此玉照姫は何時宿つて、何ヶ月目に分娩したか、又何と云ふ方が取上げて下さつたか分つて居る筈だ。サアそれを聞かして下さい」

富彦、汗をタラタラ出し、眞青な顔をして、

「ヤア大神と云つたのは實は眷屬だ。……ケ、ケ、眷屬はモウ引取る。今度は本當の大神様がお憑りなさるから、御無禮を致してはならぬぞ。ウーム」

と言つた限り、パタリと倒れ、又もや手を振つて、姿勢を直し、
「今度こそは眞正の神だ。頭が高い、下れ下れ下り居らう……」

豊彦「ヘン、又かいな、どうで碌な神ぢやあるまい。大方羽の無い天狗か、尾の無い狐なんかだらう。随分此暑いのに、そんな藝當を無報酬でやつて見せて下さるのも大抵ぢやない。あんたは慈悲心の深い人ぢや、其點丈は此爺も大いに感謝する。今朝も二三人參つて來よつたが、お前の様な野天狗憑がやつて來て、法螺を吹くの吹かんのつて、随分面白かつた。お前もウライ教の宣傳使なら、モ一つ修業をなされ。其様な事で衆生濟度なぞとは、思ひも寄りませぬぞい」

富彦 『大神に向つて無禮千萬な、其方は此神を嘲弄致すか。量見ならぬぞ』

豊彦 『ハ、ハ、ハ、ハ、此方から量見ならぬ。サア一つ審神してやらう。……娘のお

玉の妊娠の日は何時ぢや。何ヶ月孕んで居つた、ハツキリ云うて見よ。十月位で

出来た様な普通の粗製濫造品とはチツと違ふのだ。特別神界から念に念を入れて、

鍛錬に鍛錬を加へ調製された玉照姫だよ。サアサア當てて御覽なさい』

富彦 『十二ヶ月だ。間違ひなからう。此お玉は牛の綱を跨げたに依つて、十二ヶ

月掛つたのぢや。どうぢや恐れ入つたか』

豊彦 『アハ、ハ、ハ、これ富彦さんとやら、良い加減に、そんな藝當はお止めなさ

い。随分エライ汗だ』

富彦 『大神は折角結構な事を言うて聞かしてやらうと思ひ、因縁の身魂に憑つて

知らしてやれ共、此爺は我が強うて、少しも改心致さぬから、神は已むを得ず、

帳を切つて引取るより仕方はないぞよ。後で後悔致さぬ様に氣を付けて置くぞよ』

豊彦 『へエへエ有難う御座んす。お狸さまか、お狐さまか知らぬが、斯う見えて

も、此家は神様の立派なお宮だ。エー四足の這入る所ぢやない。穢らはしい、出

て下さい、玉照姫様が、大變御機嫌が悪い。サアサア歸なつしやい歸なつしやい」

と箒を把つて掃き立てる。富彦は手持無沙汰に、手拭で顔を拭いて居る。

寅若「オイ爺さま、あまりぢやないか。人を埃か何ぞの様に、箒で掃き出すと云

ふ法があるか。よい年して居つて、チツと位行儀作法を心得たらどうだい」

豊彦「エーエー神様のお宮の中へ、ノコノコ這入つて来る四足に、行儀も何も要

るものかい、行儀と云ふものは人間同士、又は人間か、より以上の神様に對して

こそ必要だ。グツグツ吐すと、此箒が頭の上まで參るぞ」

菊若は爺の振り上げた箒をクワツと掴み、

菊若「モシモシお爺さま、お静まり下さい。短氣は損氣だ。さうお前の様に神懸

を「けなし」ては話が出来ぬ。マア静まつた静まつた」

豊彦「お前達に説教を聴く耳持たぬ。斯う見えても、此豊彦は神様の御神徳を頂

いて、何處の教にもつかず、獨立獨歩で、神様直接の御用を致して居るのだ。人

を助けるのは神の道だから、お前さへ改心して、低うなつて來れば、どんな結構

な事でも教へてやるが、そんな態度では一息の間も置く事は出来ぬ。サアサア歸

つた歸つた」

お玉「お爺さま、あまり酷い事を言はぬが宜しい」

豊彦「コレコレお玉、お前は黙つて居なさい。又こんな奴に因縁を附けられては

煩雜いから……」

寅若「ヤアお玉さま、話せる、さうなくては女ではない。ヤツパリ社交界の花は

女だ。挨拶は時の氏神、そこを巧く幹旋の勞を取つて下さい。お前さま所の床の

置物を御覽なされ。私等が此處の門を潛るや否や、能うお出やす……と云つて、

あの長い頭をうちつけて、福祿壽の像が叮嚀に挨拶をして居るぢやないか。あんな

無心の福祿壽さまでも、吾々の御威勢には……いや神格には感應して、畏まつ

て御座る。それに此お爺さまはあまり剛情が過ぎる。私達が言つても、中々年寄

りの片意地で諾かつしやるまいから……娘にかけたら目も鼻も無い爺さまに、お

玉さまからトツクリと氣の軟らく様に言つて下さい」

お玉「ホ、ホ、ホ、」

豊彦「エー歸ねと言つたら歸なぬか」

と床ゆかが落おちる程ほど四し股こを踏ふむ。三人さんにんは、

「エーお爺ぢいさま、又またお目めにかかります。今日けふは大たい變へん天てん候こうが悪わるいから……又また日ひ和よりを考かんがへてお邪じやま魔まに參まゐります」

豊彦とよひこ「エーグヅグヅ言いはずに、早はやく歸いんで呉くれ、玉照たまてる姫ひめ様さまの御ご機き嫌げんが悪わるくなると困こまるから……オイ婆ばア、鹽しほ持もつて來こい。そこらを一ひとつ淨きよめないと、何なんだか四よつ足あしの香にほひがして仕しか方たがないワ、アハ、ハ、ハ、」

三人さんにんは突つ出きだされる様やうに怪け訝げんな顔かほして此この家やを立た出いで、スタスタと彌み仙せん山ざんの急きふ坂はんにさしかかる。

菊若きくわか「オイ此こ處こらで一ひとつ、一いつ服ぶくしやうぢやないか」

寅若とらわか「あまり怪け體たいが悪わるくつて、黒くろ姫ひめさまに會あはす顔かほがない。休やすむ氣きにもならぬぢやないか。そこらの蝶て々ふてふや糞くそ蛙がへるまで、俺おれたち達の顔かほを見みて、馬ば鹿かにして居ゐやがる様やうな心こゝろ持もちがする。どつか、蛙かへるや蝶ての居をらぬ所ところへ行いつて一いつ服ぶくしやうかい」

と胸むな突つき坂ざかを後あとから追お手てにでも追おひかけられる様やうな、慌あはてた姿すがたで、三さん本ほん檜ひのの麓ふもとまでやつて來きた。

「ア、此處に良い休息所がある。清水も湧いて居る。水でも飲んで、ゆつくりと第二の作戰計畫に着手する事としやうかい」

三人は樹下に涼風を入れ乍ら、雑談に時を移した。

菊若「これ程名高くなつた豊彦と云ふ爺も、あの玉照姫と云ふ赤ん坊が出来て、それがイロイロの事を知らすと云ふのが呼びものになつて、毎日毎日、桃李物言はずして小徑をなす様に、あちらこちらから、信者が集まるのだ。黒姫さまが毎朝起きて、行水をなさると東の天に當つて紫の雲が靨黷くから、何でも彌仙山の方面に違ひないから一遍偵察に行て来いと言はれ、此間、俺ひとり此山麓まで来て見ると、大變な人氣だ。紫の雲の出所は、どうしても、あの茅屋に間違ひない。そして毎晩東の天に當つて大變な綺麗な星が輝き始めた。偉人の出現には、キツと天に明星が現はれると云ふ事だが、テツキリそれに間違ないと、直に立歸つて報告をした所、黒姫さまは……「マア待て、一週間水行をして、ハツキリと神勅を受ける」と仰有つて、夜、丑の刻から起き出でて、皆の知らぬ間に、何百杯とも知れぬ水行を遊ばした結果、イヨイヨそれに間違ない。グツグツして居ると、

あなひけう 三五教の奴に取られて了ふから、お前達早く外の者に秘密で、其子供を貰つて来い……との御仰せ、あんな茅屋の娘、二つ返事でウラナイ教に、熨斗を付けて献上するかと思ひきや、今日の鼻息、到底一通りや二通りでは、梃子に合はぬ。それに寅若の先生、最初からへまな神憑りを行つて爺に睨まれ、第二線として現はれた富彦は、老爺の審神に睨まれ、ヨロヨロと受太刀になり……これはヤツパリ野天狗で御座いました……と出直した所は巧いものだが、今度又大神と、太う出やがつて、零敗を喰はされ、最早回復の見込みなく、終局の果てにや、箒で掃出された無態さ……斯んな事を、怪我の端にでも、黒姫さまや外の連中に聞かれようものなら、馬鹿らしくつて、外も歩けやしない。何とか一つ智慧を絞り出して、會稽の恥を雪がねばなるまい。何ぞよい考へはなからうか」

寅若 「別に方法手段もないが、先づ梅公式だなア。それが最後の手段だ」

富彦 「梅公式を行ひ損なうと、瀧板式になり、終局におつ放り出されにやならぬ様な事になると大變だ。此奴ア一つ、熟思熟考の餘地は充分に存するぞ」

寅若 「ナー二、目的は手段を選ばずだ。善の爲にするのだから、別に罪になると

云ふ事もあるまい。一つ決行しやうぢやないか」

菊若「ア、結構々々、結構毛だらけ、猫灰だらけだ。彌仙山の大神さまは、猫が

使者だと云ふ事だ、何でも今度は猫を被つて、梅瀧流を行らうぢやないか」

富彦「梅瀧流とはソラ何だ」

菊若「其正中に行くのだ。普甲峠の梅公の行り口は、味方八人も居つたものだから、大變に都合が好かつた。船岡山の近所で行つた瀧板の芝居は、何分役者が少

いものだから、バれて了つたのだよ。併し吾々三人では、どうする事も出来ぬぢ

やないか、三人寄れば文珠の智慧と云つても、程よい考案が浮んで來ない。ハテ

困つた事だなア」

寅若「噂に聞けば、明日はお玉が七十五日の忌明で、彌仙山へお参りするさうだ。

どうぢや。吾々三人は一つ、體一面に日蔭葛でも被つて、お玉の参詣路を脅かし、

グツと括つて猿轡を箝め、山傳ひに連れ歸り、さうして外の連中を爺の家へ差し

向け、「お前さまの家は、大事のお玉さまを悪者の爲に拐かされたさうぢや。氣

の毒なが、何と吾々が力一杯骨を折つて探して來るから、其褒美に玉照姫さまを、

三日でも、四日でもよいから、貸して下さらぬか……と云つて、チヨロまかすより外に途は有るまい、どうだ賛成かなア」

「ヤアあまり名案でもないが、斯うなれば仕方が無い。マアそれ位な事で辛抱しやうかい。併し巧くいかうかな」

「何は免も角一遍都合よくいく様に、お空の大神様へ参拜をして來う。今晚中三人が一生懸命に、木花姫様の御分靈の前で、祈つて祈つて祈り倒すのだ、さうすれば神さまだつて……結局にや五月蠅いから……エー仕方がない、一遍は諾いてやらう……と仰有るに違ひない。さうでなくちや、どうしてウラナイ教へ歸る事が出來ようか。青彦さまや、紫姫さまに恥かしいぞ」

と云ひ乍ら、山上目蒐けて進み行く。一夜は頂上の社前に夜を明かし、一生懸命に願望成就の祈願を凝らし居る。果して大神様は御聽許遊ばすであらうか。

(大正一一・四・二八 舊四・二 松村眞澄録)

第一三章 救の神〔六四一〕

寅若、富彦、菊若の三人は金峰山の頂上、彌仙神社の前に一心不亂に願望成就の祈願を凝らし、遂に夜を明かした。

寅若「ア、大分澤山に神言を奏上し、最早聲の倉庫は窮乏を告げたと見え、そろそろかすつて來だした」

と瘡かきの様な聲で云ふ。二人も同じくかすり聲、

寅若「もう仕方がない、ありだけの言靈を獻納したのだから、聲としては殆んど無一物だ、聲の裸になつた様なものだ、これだけ生れ赤子になれば、如何な願も聞いて下さるだらう」

と枯れ草の上を竹箒で撫でる様な貧弱な言靈をやつと發射してゐる。寅若、懐中の短刀をヒラリと抜いて傍の木を削り、それへ向けて矢立から、竹片を叩いた、笹葉の様な、長三角の筆を取り出し、何かクシヤクシヤ書き初めた。書き終つて唾の様にウンウンと木の文字を見よと指さし得意顔、二人は立ち寄つて読み下ろ

すと、

「木花姫の命の筆先、今日は七十五日の忌明で必ず参拜致す筈のお玉に神が氣をつける、汝に授けた玉照姫は普通の人間の子で無いぞよ、神が御用に立てる爲めに汝の肉體に、そつと這入つて生れ變つたのであるから、今此處で改心を致してウラナイ教に獻り、神のお役に立てて下されよ、これが神の仕組であるぞよ、若し承知を致したなれば其【しるし】に日蔭葛を頭にのせて、其方の家まで歸つて下されよ、若し不承知なれば其儘で歸るがよい、又後から神が【みせしめ】を致すぞよ」

と書いてある。菊若、かすり聲で、

菊若「アハ、うまい、うまい、ナア富彦、やつぱり哥兄貴だなア」

寅若「哥兄貴だらう」

と、かすり聲で云つて居る。三人は臆てお玉が朝参詣して登つて來る時刻と裏山より、【ずり】下り、そつと廻つて中腹の灌木の繁茂に姿を隠し、お玉の下向を待つて居た。お玉は只一人櫻の杖をつき乍ら漸く頂上に達し、神前に向つて感謝

の辭を奉り、フツと社側の太木を見れば何か文字が現はれて居る。『ハテ不思議』と近寄つて見れば以前の文面、暫く其木と睨め【くら】し、腕を組んで思案に暮れて居た。暫時あつて、

お玉『エー、馬鹿らしい、神様が斯んな事をお書き遊ばすものか、何者かの悪戯であらう。日蔭葛を被つて歸る所を眺めて、近在村の若い衆が手を拍いて笑つてやらうとの悪戯だらう、ホ、ホ、ホ、阿呆らしい』

と獨語ちつつ又もや神前に軽く會釋をし、もと來し急坂を下り行く。半分あまり下つたと思ふ時、

寅若『ヤア、駄目だ、日蔭葛を被つて居やがらぬぞ、不承諾だと見える、もう斯うなる上は直接行動だ、サア、一、二、三つで一度にかからうかい』

菊若『オイオイ、あまり慌るな、彼奴の身體を見よ、一歩々々些とも隙がない、うつかりかからうものなら、谷底へ取つて放られるかも知れないから、餘程ここは慎重の態度をとらねばなるまいぞ』

富彦『愚圖々々云つてる間に、さつさと歸つて仕舞うちや仕方がないぢやないか、

もう斯うなつては何の猶豫もない、サア一、二、三つだ」

とお玉の前に身體一面、日蔭葛で取り巻いた化物の様な姿で三人は現はれた。

お玉「シイツ、オイ畜生、何と心得て居る、此處は神様のお宮だ、晝中に四つ足

が出る」と云ふ事があるものか、晝は人間の世界、夜はお前達の世界だ、早く姿を

隠せ、一二三四五六七八九十百千萬……」

寅若、作り聲をして、

寅若「オイ、お玉、其方は生神様に向つて獸と云つたな、もう量見がならぬ、覺

悟致せ」

お玉「オホ、お前は昨日妾の家へやつて来て、お爺さまに審神をせられ

た狐や狸の生宮だらう、やつぱり争はれぬもの、宅のお爺さまは目が高い、今日

は正眞になつて姿を現はし遊ばしたな、ホ、ホ、ホ、」

寅若「何を吐すのだ、もう斯う成つた上は此方も死物狂ひだ、幸ひ外に人は無し、

何程貴様に神力があるか、手が利いて居るか、荒くれ男の三人と女一人、愚圖々々

吐さず後へ手を廻せ」

お玉「オホ、お前こそ、ちつと尻へ手を廻さぬと大變な失敗が出来ますよ、後へ手を廻す様な人間はお前の様な悪人ばかりだ、やがて捕手が出て来て……括つて去なれぬ様に御注意なさいませや」

菊若「エー自暴糞だ、やつて仕舞へ、サア一、二、三」

お玉「オホ、随分偉い馬力ですこと、お宮の前に綺麗な樂書がして御座いましたな、妾拜見致しまして、見事なる御手跡だと感心しましたのよ」

寅若「エー、ベラベラと怖くなつたものだから追従ならべやがつて、此場を「ちよろまか」して逃げ様と思つたつて、佛の碗ぢや、もう「かなわん」ぞ、神妙に手を廻さぬかい」

お玉「大きに憚りさま、廻さうと、廻すまいと妾の手、自由の權利だ、お構ひ下さいますな、それよりも貴方の身の上を御注意なさいませ、玩具のピストルを突きつける様な脅喝手段にのる様なお玉ぢや御座いませぬワ」

富彦「何程口は達者でも力には叶うまい、オイ寅若菊若、もう斯うなれば容赦はならぬ、愚圖々々して居ると、人に見付かつちや大變だ、早う事業に着手しよう」

ぢやないか」

「オツト合點だ」

と三人は武者振り付く。お玉は右に隙かし左に隙かし、飛鳥の如く揉み合ひ「へし」合ひ戦つて居る。寅若はお玉の足に喰ひついた途端にお玉は仰向態に、ひつくりかへり二三間谷を目蒐けて、寅若と上になり下になりクレリクレリと三四回輕業を演じた。菊若、富彦は豫て用意の藤綱を以て後手に縛り、猿轡を箝め様とする。此時下の方から白い笠が揺らついて登つて來る。

寅若「ヤア、何だか怪しげな奴が一匹やつて來やがったぞ、大方豊彦爺だらう」
菊若「親爺にしては随分足竝が早い様だ、早く縛りあげて其處邊へ隠し、彼奴の通るのをば待とうぢやないか」

と慌て括つたお玉の肉體を灌木の繁茂に隠して仕舞つた。そこへ上つて來た一人の男、

「ヤアお前はウライナイ教の方ぢやなア、一寸物をお尋ね致します、此處へ於與岐の豊彦の娘お玉と云ふ綺麗な女は通らなかつたかな、見れば貴方等は身體一面、

狐きつねの襷たすきを身みに纏まとうて居ゐるが、何なんぞ面白おもい事ことでもありましたかか」

寅とらわか若わか「イヤ、別べつに何なにもありませぬ、お玉たまさまはねつかからお目めにかかりませぬがな」と故意わざとお玉たまを隠かくした反はん對たいの方ほうへ目めを注そそぐ。

男をとこ「もう此こ處こへ來きて居をらねばならぬ時刻じこくですが……彼あ方ちから一寸ちよつと窺うかがつて居ゐましたが人ひとの影かげが四よつばかり動うごいて居をつた様やうだだ」

寅とらわか若わか「ハイ、そう見みえましたかな。それは大方おほかた晝ひるの事ことでもあり影かげ法師ほうしがさしたのでせうでせう」

男をとこ「天てんを封ふうじた此この密みつ林りん、影かげが映さすとは妙めうですな、私わたくしも此こ處こで一ひとつ煙たば草こでも……さして貰もらひませう、何なんだか女をんなの息いきが聞きえる様やうだ、ハツハツハ、ハ、ハ、お前まへ、隠かくして

居ゐるのぢやあるまいなな」
寅とらわか若わか「滅めつ相さうな、此この晝ひる中なかに隠かくすと云いつたつて……何なにを隠かくす必要ひつえうがありますものか、

「かくす」れば斯かくなるものと知しり乍ながら止やむにやまれぬ日本やまと魂たましひと云いひまして、ホ

男をとこ「一寸ちよつと……だ、其その一寸ちよつとが聞きかして欲ほしいい」

寅若「そう四角張つて仰有るに及びませぬワ、サアサアお伴致しませう、貴方お空へお詣りでせう、私お伴致します。オイ菊若、富彦、宜いか、合點か、お前は足弱だから、先へ何を何々せい、私は此お方のお伴をしてお空へ詣つて来るから

……」

菊若「昨晚詣つただないか」

寅若「グツと目を剥き、

寅若「シイツ、何を云ふのだい、夢を見やがつて……此處までやつて来て「ア、お山はきついから……神様は何處からも同じことだ、ここで勘へて貰はう」と平太つて仕舞つたぢやないか、アハ、ハ、ハ。昨晚のうちに詣りよつた夢を見たのぢやな、旅人、こんな弱蟲を連れて居ますと閉口致しますワイ、サアお伴致しませ

う」

男「御親切は有難いが、私はお空には一寸も用はない、私の許嫁のお玉と云ふものに會ひさへすればよいのだ、何だか此處へ來ると足がピツタリ止まつて、お玉臭い匂ひがして來た」

三人は徐々目と目とを見合して逃げかけ様とする。

男「オイオイ、三人の奴共、貴様に談判がある、一寸待て」

寅若「ヘイ、なゝゝゝ何と仰しやいます」

男「一寸待てと云うのだ」

寅若「〔ぢや〕と申して……鬼と申して……寅と申して……」

男「アハ、ゝゝ、随分よく動くぢやないか、その態は何ぢやい」

寅若「ハイ……地震の靈が憑依しまして……いやもう慄つて居ますワイ」

男「眞に三人共慄つてるな、まてまて今一つ退屈覺しに惡靈注射でもやつて靈縛

してやらう」

菊若「めゝゝゝ滅相な、もう之で澤山で御座います」

男「ウン」

と一聲、靈縛を施した。三人は腰から下は鞍掛の足の様に踏ん張つたまま地から

生えた木の様にビクツとも動かず、腰から上は貧乏ぶるひをやり乍ら目許りぎろ

つかせて居る可笑しさ。

男「アア、お玉さまを之から助けて上げねばなるまい」

と傍の灌木の中に倒れて居るお玉の綱を解き猿轡を取り外し、

男「旅のお女中、否お玉さま、えらい目に會ひましたね、サ、しつかりなさいませ、もう大丈夫ですよ、あの通り靈縛を施して置きました」

お玉はキヨロキヨロ男の顔を見廻し、

お玉「ヤア、其方は同類であらう、そんな八百長をしたつて欺される様なお玉ではありませぬよ」

男「これは迷惑千萬、私は丹州と云ふ男、豊彦さまの知己ですよ」

お玉は男の顔を熟視し、

お玉「ヤア貴方は先日お越し下さいました丹州さまで御座いますか、これはこれはいい處へ来て下さいました、サア歸りませう」

丹州「マア、ゆつくり成さいます、足は歩かねども天の下の事悉く知る神なりと云ふ案山子彦又の御名は曾富斗の神が御三體現はれました、アハ、ハ、ハ、」

お玉「ほんに、マア見事な案山子彦の神さまですこと」

丹州たんしゅう 「何でも世界せかいの事ことは御存ごぞんじのお方かただから、一つ伺うかがつて見みませうか」

お玉たま 「それは面白おもしろからう、いやいや面白おもしろいでせう」

丹州たんしゅう 「神様かみさまに伺うかがふのに面白おもしろいなんて、……そんな失敬しつげいな事ことがありますか、ちつと
言こと霊たまをお慎つつしみなさい」

お玉たま 「ホ、ホ、ホ、屹度きつと慎つつしみませう」

と寅若とらわかの前まへに徐々しづしづと現あらはれ、

お玉たま 「ハ、ア、此この神様かみさまは目めばかり剥むいて居ゐらつしやる、何かなにお供そなへしたいが何なにも
ありませぬ、丹州たんしゅうさま、如何どうでせう、大きな口くちを開あけて居ゐらつしやいますが……

……」

丹州たんしゅう 「お土つちかお石いしの團子だんごでも腹はら一杯いっぱい捻ね込んであげたら如何どうでせう、アハ、ホ、ホ、」

お玉たま 「それは經濟けいざいで宜よろしいね、お三方さんかたとも勝負かちまけのない様やうにお供そなへしませうか」

丹州たんしゅう 「ヤア手てが汚よごれますから措をきませうかい、こらこら六本足ろっぽんあし、靈縛れいばくを解といてや
る、一時いっときも早はやく立歸たちかへり此由このよしを高姫たかひめ、黒姫くろひめ、高山彦たかやまひこの御前おんまへに包つつまず隠かくさず注進ちうしん致いた
て、御褒美ごほうびに預あづかつたが宜よからう」

『ウン』と一聲靈縛を解くや否や三人は一生懸命ガラガラガラと坂道に石礫を打ちあげた様に轉んで逃げて行く。

丹州はお玉と共に於與岐の豊彦の家に黄昏ごろ歸つて来た。豊彦夫婦はお玉の遭難の顛末より丹州が助けて呉れた一條を涙と共に聞き非常に感謝し、丹州は生命の親として鄭重に待遇され、それよりお玉の宅に暫時同棲する事となつた。されど丹州とお玉との兩人の仲は一點の怪しき關係も無く極めて純潔であつた。

(大正一一・四・二八 舊四・二 北村隆光録)

第五篇 五月五日祝

第一四章 蛸の揚壺 (六四二)

魔窟ヶ原の地下室に、ウライナイ教の雙壁と己も許し人も許した、素人離れのした黒姫が、高山彦と睦じさうに晩酌をグビリグビリとやつて居る。

「コレ高山さま、時節は待たねばならぬものだなア。お前と偕老同穴の契を結び乍ら、枯木寒巖に依つて、三冬暖氣無しと云ふやうな、没分曉漢の部下の宣傳使や信者の動搖を恐れて氣兼ねをして、貴方をフサの國の本山に、私はこの自轉倒島へ渡つて、神様の爲にお道の爲に、所在最善の努力を盡し、一生懸命に宣傳して来たが、何を云つても追ひ追ひと年は寄る、無常迅速の感に打たれて、何處とも無く心淋しく、どうぞ晴れて夫婦と名乗つて暮りたいと思つて居たが、これ迄獨身主義を高張して来た手前、今更掌を覆したやうな所作もならず、本當に空行く雲を眺めて雁がねの便りもがなと、明け暮れ涙に暮れた事は幾度あつたでせう、然し乍ら何程お國の爲お道の爲だといつても、自分に取つて一生の快樂を犠牲にしてまで、瘦せ我慢をはつて居つても、こいつは駄目だ。初めの内は、黒姫は偉いものだ、言行一致だといつて褒めて呉れよつたが、終ひには神様の御取次ぎする者は、女だつて獨身生活するのは當然だ。何感心する事があるものか。あれや

大方、どつか身體の一部に缺陷があるので、負惜みを出して獨身生活をやつて居るのだ……何ぞと云ふ者が出来て来た。エ、アタ阿呆らしい。これだけ辛抱して居つても悪く言はれるのなら、持ちたい夫を持つて、公然とやつた方が、何程ましか知れないと、いよいよ決行して見たが、初めの内は夏彦、常彦をはじめ、頑固連が追々脱退し、聊か面喰つたが、案じるより生むが易いといつて、何時の間にかやら、私と貴方の結婚問題も信者の話頭に上らなくなり、この頃はソロソロと、青彦やお節、おまけに紫姫といふ様な、賢明な淑女迄が歸順したり、入信したり、實に結構な機運に向つて来たものだ。これからは高山さま、もう一寸も遠慮はいらないから、私ばかりに命令をささずに、あなたは天晴れ黒姫の夫として、權利を振うて下さいねエ」

高山彦「ア、さうだなア、待てば海路の風が吹くとやら、時の力位、結構なもの恐ろしいものは無いなア」

黒姫「時に寅若、富彦、菊若の三人は、ここを出てから四五日にもなるに、まだ歸つて来ない。何か道で變つた事でも出来たのではあるまいか。何だか氣にかか

つて仕方が無いワ」

高山彦「そう心配するものでも無い。何事も時節の力だ」

かく言ふ折しも、ソツと岩の戸を開けて迂り込んだ三人の男、

黒姫「ア、、噂をすれば影とやら、寅若エロウ遅かつたぢやないか。首尾はどう

だつたなナ」

寅若「ハイ、委細の様子は悠くりと、明日の朝でも申上げませう。ナア菊若、富

彦、エライ目に遇うたぢやないか」

黒姫「お前達は、あまり遠い道でも無いのに、どうして御座つた。今日で七日目

ぢやないか。何時も都合が良い時は、大きな聲で門口から吠鳴つて歸つて来るが、

今日はコソコソと細うなつて這入つて来たのは、餘り結構な話しぢや有るまい、

明日の朝申し上げるとは、そら何の事だ。此間から、日日毎日指折り數へて待つ

て居たのだ。サア早く實地の事を、包まず隠さず云ひなさいや」

寅若、頭をガシガシ掻き乍ら、言ひ難さうに、

寅若「あの、何で御座います。それはそれは、大變な事で、何とも彼とも、注進

の仕方が有りませぬワイ。併し乍ら、物質的獲物は一寸時期尚早で、暫時機の熟するまで保留して置きましたが、靈的には大變な收獲がありました」

黒姫「又しても又しても、靈的の收獲と仰有るが、それはお前の慣用的辭令だ。

もう靈的の收獲には、この黒姫もウンザリしました。ハツキリと成功だつたとか、不成功だつたとか、女王の前に陳述するのだよ」
と聲を尖らせ、目を丸うして睨みつける。

三人は縮み上り、

「イヤもう、斯うなれば委細残らず言上いたします。紫雲棚引く東北の天、如何なる神の出現したまふやと、心を清め身を清め、途々宣傳歌を唱へながら、彌仙の山麓までやつて行つた。時しもあれ、噂に高き玉照姫の生母お玉の方は、吾々三人の威風に恐れてか、一生懸命に嬰兒を背に、彌仙山に向つて雲を起し、雨を呼び、爲に地は震ひ雷鳴轟き、山嶽は一度に崩る許りの大音響を發し、面を向く可からざる景色となつて來た。流石の寅若、富彦、菊若の三勇將も、暫し躊躇ふ折柄に、忽ちあなたの御靈や、高山彦の御靈が、吾々三人に憑依遊ばされ、勇

氣百倍して彌山目蒐けて驀地にかけ登り行く。時しもあれや、山の中腹より、
現はれ出たる三五教の奴輩、各自に柄物を携へ、僅か三人の吾々の一隊に向つて
攻めよせ來るその勢の凄じさ、されども黒姫さま、高山彦様の御靈の憑つた吾々
三人、何條怯むべき。群がる敵に向つて電光石火、突撃攻撃、言靈の火花を散ら
して戦うたり。さはさり乍ら、此方は形許りの九寸五分、只一本あるのみ。群が
る敵は數百千萬の同勢、全山人を以て埋まり、如何に防ぎ戦うとも、遠黒姫様の
御神力も是れには敵し兼ねたりと見え、吾々三人の肉體を自由自在にお使ひ遊ば
され、血路を開いてターターと、瀧水の落ちるが如く、一瀉千里の勢にて、
こなたに向つて豫定の退却、鬼神も欺くその早業、勇ましかりける次第なり』
黒姫『コレ、富彦、寅若の今言つた通り、間違は無からうなア』
富彦『へーへー、間違つて堪りますものか。あなたは常に吾々の身の上に、仁慈
のお心をお注ぎ下さいます、其一念が幸はひ給ひて、御分靈忽ち降下し給ひ、
さしもの強敵に向つて、獅々奮迅の應戦をやつたのも、全くあなた様御兩人の神
徳の然らしむる處、萬々一お兩方の御靈の御守護無き時は、如何に吾々勇なりと

雖も、いへど 忽ち木端微塵に粉碎されしは勿論のこと、然るに僅三人を以て、かく迄よ
く奮闘し、敵の膽を寒からしめたるは、形體上に於ては兔も角も、精神上に於て、
敵を威嚇せしこと、幾何なるか計り知られませぬ。マアマア御喜び下さいませ」
黒姫 「それは先づ結構であつた。併し、お玉に玉照姫は何うなつたのか」
富彦 「オイ菊若、これからは貴様の番だ。確りと申し上げるのだぞ」
菊若 「ハイハイ、申上げます。いやもう何のかのと云うた處で、向うはたつた女
の一人」

黒姫 「ナニ、女一人」

菊若 「女一人と思ひきや、四邊の物蔭より来るワ来るワ、恰も蟻の宿替への如く、
ゾロゾロゾロと此方へ向つて馳せ来る。三人は丹州の靈縛にかけられ、身體忽ち
強直し」

黒姫 「何、お前達三人が」

菊若 「イエイエ、滅相な、丹州と云ふ奴、吾々三人を目蒐けて、靈縛を加へ強直
させようとかがつた處、流石黒姫様、高山彦様の御威靈憑らせ給ふ吾々三人を如

何ともするに由なく、敵は一生懸命死力を盡して押しよせ来る。吾々三人は、ア、面白面白いと、勇氣百倍して、挑み戦はむとする折しも、吾々三人に憑り給うた御魂の命令、汝は一先づ引返し、時機を待つて捲土重來の準備をなすが得策なりと、流石神謀鬼略に富ませ給う黒姫様、高山彦様の御靈の命令もだし難く、みすみす敵を見捨て一目散に立歸つて候」と言ひをはつて冷汗を拭く。

黒姫「コレコレ、私が馬鹿になつて聞いて居ればお前、それや何という法螺を吹くのだい。みな嘘だらう。一人か二人の木端武者に怖れて一目散に逃げ歸つたのだらう。そんなお前さん達の下司身魂に私の靈魂が憑つて堪るものか。馬鹿にしなさるな」

寅若「そんなら、あなたの名を騙つて、四足か何かが憑いたのでせうか」
富彦「そうかも知れぬよ。豊彦の爺が言つて居ただ無いか」

黒姫「それ見なさい。お前らは豊彦の家へ行つて尻を喰はされて、謝罪つて逃げて歸つたのだらう。エ、仕方のない男だ。はるばる高山さまがフサの國から、選

りに選つて連れて御座つたお前は、大將株ぢやないか。そらまた何とした腰抜けだ。寅若、何を云つてもフサの國なれば、地理をよく存じて居りますが、この自轉倒島は地理不案内で、思うやうに戦鬪も出來ず、さうして陽氣が眠たいですから、思うやうな活動も、實際の事は出來なかつたのです。併し一遍失敗したつて、さう氣なげをしたものぢやありません。失敗毎に經驗を重ね、遂には成功するものですから、マア今度の失敗は結局成功の門口ですなア」

黒姫「エ、おきなされ。敗軍の將は兵を語らずという事が有るぢやないか。餘り大きな聲で減らず口を叩くものぢや無い。奥へ這入つて麥飯など、ドツサリ食つて休みなさい。折角機嫌よう飲んで居つた酒までさめて了つた。エ、早く寝なさらぬか」

と長煙管が折れる程火鉢を叩く。三人は頭を抱へ、こそこそと奥に影を隠した。黒姫「高山さま、もうお休みなさいませ。私は一寸綾彦に詮議をしたい事がありますからお前が側に居られると、ツイ臆めてよう言はないと困るから、私は女の事であり、やあはりと尋ねて見ますから、早く寝んで下さい」

高山彦「ハイハイ、お邪魔になりましたませう。さやうなればお先き御免を蒙りませう」
黒姫「記憶えて居らつしやい。貴方こそお邪魔になりましたませう。紫姫のお側へでも
往つて、ゆつくりと夜明かしをなさいます」

と、ツンとした顔をする。

高山彦「ハ、ハ、ハ、ハ、形勢頗る不隠と成つて来た。どれどれ雷の落ちぬ間に退却し
よう、ア、桑原桑原」

と捨臺詞を残し、ノソリノソリと奥へ行く。

黒姫「高山さまはあゝ見えても、やつぱり可愛相な程正直な人だ。何處ともなし
に、身魂にいいとこがあるワイ」

と肩を揺り、又もや長煙管に煙草をつぎ乍ら、

綾彦綾彦

と呼ぶ聲に綾彦はこの場に現れ、両手をつき、

「今お呼びになりましたのは私で御座いましたか」

黒姫「ア、左様ぢや左様ぢや、お前に折入つて尋ねたいと此間から思うて居たの

ぢやが、ここへ来てから大分になりますが一體お前のお國許は何處ぢやな、色々
と誰に尋ねさしても言ひなさらぬが、大方何處かで悪い事をして逃げて來たのだ
らう。それを體よう眞名井さまへ詣つたなぞと、誤魔化しとるのだらう」
綾彦「イエイ工滅相もない、生れてから悪い事は、塵程もやつた覚えは有りませ

ぬ」

黒姫「そんならお前の處は何處ぢや。蟲でさへも生れ所は有るのに、滅多に天か
ら降つたのでもあるまい。地の底から湧いて出たのでも有るまい。お父さまや、

お母さまが有るだらう。處と親の名と聞かして下さい」

綾彦「これ許りはどうぞ赦して下さいませ」

黒姫「それ見たかな。矢張怪しい人ぢや。私は何處までも、言うて悪い事は秘密
を守る、私丈に言ひなさらぬかいな」

綾彦「貴方様はいつも仰有る通り、世界中隅から隅まで見え透く、龍宮の乙姫の
生宮ぢやありませんか。そんな事お尋ねなさらなくても、遠の昔に何も彼も御存

じの筈、煽動して下さいませ」

黒姫「ソラさうぢや。靈の方ではお前の身魂は何の身魂ぢや、昔の根本は何んな事をして居つた。また行く先は何う成ると云ふ事は、能く分つて居るが、肉體上の事は畑が違ふから、聞いた方が便利がよい。こんな事を神さまに勿體なうて、御苦勞かけずともお前に聞いた方が早いぢやないか。又お前も、これ丈長らく世話に成つて居ながら、何故生れた處を言はれぬのか」

と言葉に角を立て、長煙管で疊を二つ三つ叩いた。

綾彦「何と仰有つても、これ丈は申上げられませぬ。どうぞあなた、天眼通でお調べ下さいませ、私の口が一旦いかなる事があつても國處、親の名は言うで無いと、両親にいましめられ、決して生命にかかる様な事が有つても申しませぬと約束をして出た以上は、何處迄も申上げる事は出来ませぬ」

黒姫「ハ、ハ、ハ、お前は親に孝行な人ぢや。親の言葉をよく守つて、どうしてもいけぬと仰有るのは、實に感心ぢや。人間はさう無くては成らぬ。併し乍ら、お前はモ一つ大事の親を知つて居ますか。大方忘れたのだらう」

綾彦「私は親と云つたら、お父さまと、お母さまと二人より御座いませぬ。其上

にま一つ大事の親とは、それや何の事で御座いますか」

黒姫 「アーアー、お前も見た割とは愚鈍な人ぢやな。あれ程毎日日、龍宮の乙

姫さまのお筆先を讀んで居つて、まだ判らぬのかいなア。自分の肉體を生んで呉

れた親は假の親ぢやぞい。吾々の靈魂、肉體の根本をお授け下さつた、天地の誠

の親が有る事を、お前聞いて居るぢや無いか」

綾彦 「ハイ、それはお筆先でお蔭をいただいて居ります」

黒姫 「お前は、誠の親が大切か、肉體の親が大切か、どちらが大切か考へてみな

され」

綾彦 「それは何方も大切に御座います」

黒姫 「何方も大切な事は決つてゐるが、併し其中でも、重い軽いが有るだらう。

僅か百年や二百年の肉體を生んで呉れた親が大切か、幾億萬年と知れぬ身魂の生

命を與へて萬劫末代守つて下さる、慈悲深い神様が大切か、それが聞きたい」

綾彦 「ハイ………」

黒姫 「天地の根本の神様の生宮の私は、つまり大神様の代りぢや。何故親の云ふ

事を聞いて私の云ふ事が聞けぬのかい。一寸信心の仕方が間違うて居やせぬか

かかる處へ紫姫現はれ來り、

紫姫「今承はりますれば、大變に綾彦さまに、何かお尋ねのやうですが、何うぞ私に任して下さいませ。私が機を見て、綾彦さまに篤りと尋ねまして、お返事を致します」

黒姫「さよかさよか、どうぞ貴女、やあはりと問うて見て下さい。何分婆の言ふことは、氣に入らぬと見えますワイ、綺麗な貴女のお尋ねなら、綾彦も惜氣なく言ひませう」

紫姫「ホ、ホ、ホ、サア、綾彦さま、もうお寝みなさいませ。黒姫さま、夜も更けました、何卒御休息を」

黒姫「ハイハイ、早く寝て下さい」

紫姫「さやうなら」

紫姫は綾彦の手を引き、廊下傳ひに奥に入る。

黒姫は又もや疝聲を出して、

「青彦青彦」

と呼び立ててゐる。

青彦は周章で此の場に走り來り、

「ハイ、何の御用で御座いましたか」

黒姫「青彦、お前もお節を高城山へやつて、さぞ淋しからう。心の裡は私もよく

察して居る。本當にお氣の毒ぢや。同情の涙は、いつも外へ零さずに、内へ流し

て居る」

と追従らしく言ふ。

青彦「何御用かと思へば、そんな事で御座いますか。イヤそんな事なら、御心配

下さいますな、却て私は氣樂で宜しう御座います」

黒姫「お前に折入つて尋ねたい事がある。外でも無いが、あの綾彦と云ふ男は、

彌仙山の麓の、於與岐の村の豊彦と云ふ男の息子ぢやないか」

青彦「あなた、それが何うして分りましたか」

黒姫はしたり顔にて、

黒姫「そんな事が判らないで、龍宮の乙姫さまの生宮ぢやと言はれますかいな。

蛇の道は矢張蛇だ。間違ひは有らうまいがな」

青彦「ヤア、あなたの御明察には恐縮致しました。それに間違ひは有りますまい」

黒姫「さうだらう さうだらう、流石はお前はよう改心が出来て居る。正直な男

だ。時にお前に折入つて相談があるが、乗つて下さるまいかな」

青彦「これは又、改まつての御言葉、何なりと御遠慮なく仰有つて下さいませ」

黒姫「ヤア、有難い有難い。お前も噂に聞いて居る通り於與岐の里に、お玉とい

ふ綺麗な娘が有つて玉照姫とかいふ、不思議な子が出来たといふ事ぢや。それは

何うしても斯うしても、ウライナイ教へ引き入れねば、神界のお仕組が成就しない

から、此の間も、寅若や、富彦、菊若の三人を遣はして交渉に遣つたが、何うや

ら失敗して歸つたらしい、併し乍ら、よう考へて見れば、向うの老爺が孫を呉れ

んのも、一つの理由がある。何故といったら、あの綾彦夫婦は行衛不明となり、

只一人の娘お玉とやらが、年寄の世話をして居るさうだ。そのお玉に、男も無い

のに子が胎り、其子が又妙な神力を持つて居るので、エライ評判ぢやげな。そこ

で其子を貰うには、綾彦夫婦を元へ還してやらねば成るまい。若しも三五教の連中が、綾彦とお民が、爺さまの子ぢやと云ふ事を探知うものなら、何んな手段を運らしてでも、引張り込んで交換に玉照姫を貰つて了ふに違ひ無い。さうなれば、此方は薩張、蛸の揚壺を喰つた様な羽目に成らねばならぬ。どうぞや、青彦、何とかお前の智慧で、玉照姫を此方の者にする工夫は有るまいかな」

青彦「それは重大事件ですなア。よくよく考へませう。どうぞ此處限り他に漏れないやうに、絶対秘密を守つて下さいませ」

黒姫「よしよし、お前と私と二人限りだ。高山彦さまにだつて、此の事成就する迄は、言はぬと言つたら言はないから、安心して下さい」

青彦「左様ならば充分熟考した上、又コツソリと御相談致しませう。今晚はこれでお寝みなされませ」

青彦は一間に姿を隠した。後に黒姫はニタリと笑ひ、

「アーアー、何と言つても青彦だ。今ウラナイ教で誰がエライと言つても、彼に越した奴は有りはしない、三五教が欲しがつた筈だ。持つ可きものは家來なりけ

りだ、ア、どれどれ、高山さまが淋しがつて御座るであらう、一寸話相手になつて上げませう』
と、獨言ちつつ一間に入る。

(大正一一・四・二八 舊四・二 東尾吉雄録)

(昭和一〇・六・二 王仁校正)

第一五章 遠來の客(六四三)

米價の騰貴る糠雨が、赤い蛇腹を空に見せて居る。八岐大蛇に憑依されしウラナイ教の頭株、鼻高々と高姫が、天空高く天の磐船轟かしつつフサの國をば後にして、大海原を乗越えて、由良の港に着陸し、二人の伴を引き連れて、大江の山の程近き、魔窟ヶ原に黒姫が、教の射場を立てて居る、要心堅固の岩窟に勢込んでかけ来る。

梅公は目敏く高姫の姿を見て、叮嚀に會釋しながら、

「ヤア、これはこれは高姫様、お達者でしたか、遠方の所ようこそ御飛來下さいました。黒姫様がお喜びで御座いませう、サアずつと奥へお通り下さいませ」

高姫は四邊きよるきよる見廻しながら、

高姫「嗚呼大變に其邊あたりが變りましたね、これと云うのもお前さま達の日頃の丹精が現はれて、何處も彼もよく掃除が行届き、清潔な事」

梅公「エ、滅相な、さう褒めて頂いては實に汗顔の至りで御座います、サア奥へ御案内致しませう」

高姫「黒姫さまは在宅ですか」

梅公「ハイ高山さまも、御兩人とも朝から晩迄それはそれは羨ましい程お睦まじうお暮しで御座います」

斯る處へ黒姫は又ツと現はれ、

「マア高姫様、ようこそお出下さいました。何卒悠くりお休み下さいませ」

高姫「黒姫さま、久し振りでしたねえ、高山彦さまも御機嫌宜敷いさうでお目出

度う御座います」

黒姫「ハイ、有難う御座います、頑固なお方で困つて居ります」

高姫「ヤア、人間は頑固でなければいけません、兔角正直者は頑固なものですよ、

變性男子式の身靈でなくては到底神業は成就致しませんからな。時に黒姫さま、

貴女は日々この自轉倒島の大江山の近くに、紫の雲が立ち昇り、神聖なる偉人の

出現して居る事は御存じでせうね」

黒姫「ハイハイ委細承知して居ります」

高姫「承知はして居ても又拔かりなく、其玉照姫とやらをウラナイ教に引き入れ

る手筈は調うて居ますか」

黒姫「仰しやる迄もなく、一切萬事羽織の紐で、黒姫の胸にチヤンと置いて御座

います。オホ、、、」

高姫「ヤアそれで安心しました、愚圖々々して居ると、また素盞鳴尊の方へ取ら

れ仕舞つては耐りませぬからなア、私は夫れ許りが氣にかかつて、忙しい中を飛

行機を飛ばして態々やつて來ました。そうして肝腎の目的物はもう手に入りまし

たか

黒姫「イヤ、今着々と歩を進めて居る最中なんです。それについては斯様斯様こ
うここの手段で」

と耳に口寄せて、綾彦夫婦の人質に使用する事も打ち明けて、得意の顔を輝かす。
黒姫「善は急げだ。如才はあるまいが一日も早くやらねばなりません、私も
それが成功する迄は気が気ぢやありません、私も此處で待つて居ませう、玉照姫
が手に入るや否や、飛行機に乗せてフサの國に歸りませう」

黒姫「黒姫さま、お喜び下さいませ、一旦三五教に墮落して居た青彦が、神様の
御神力に往生して歸つて來ました」

高姫「何と仰有る、あの青彦が歸りましたか、それはマアマアよい事をなさいま
した。遠は千軍萬馬の功を経た貴女、いやもうお骨が折れたでせう、貴女の敏腕
家には日の出神も感服致しました。時に夏彦、常彦は何うなりましたか、なんだ
か居ないやうですな」

黒姫「ヘイ、彼奴はたうとう三五教に耽溺して仕舞ひました。併し乍ら之も時間

の問題です、きつと呼び歸して見せます。何か神界のお仕組でせう、ああして三五教に這入り、歸りには青彦のやうに澤山の從者を連れて歸るかも知れませぬ」

高姫「さう樂觀も出来ませんが、良の金神様は何から何迄抜け目のない神様だから屹度深い深いお仕組があるのでせう」

黒姫「貴女にお目にかけて度い方が一人あります、それはそれは行儀と云ひ、器量と云ひ、知識と云ひ、言葉遣ひと云ひ、何から何まで穴のない三十三相揃うた觀自在天のやうな淑女が信者になられまして、今は宣傳使の仕込み中で御座います、何うか立派な宣傳使に仕立てあげて、貴女様に喜んで頂かうと思つて日々骨を折つて居ります、まア一遍會うて見て下さい、幸ひ其方も青彦も、青彦の連れて來た鹿公も、馬公と云ふそれは實に男らしい人物も來て居ります、眞實に掘出しものです、きつとウライ教の柱石になる人物ですなア」

高姫「それは何より結構です」

と話す折しも高山彦は、羽織袴の扮装、此場に現はれて、

「ヤア高姫さま、久し振りで御座いました、ようマア遙々と御入來、御疲勞で御

座ざいませう、サアどうぞ悠ゆうくりして下くださいませ」

高たか姫ひめ「ヤア高たか山やま彦ひこさま、貴あなた方は幾いくつ歳さいでしたいなア、大たい變へんにお若わかく見みえますよ、奥おく

さまの待もて遇なしが好よいので自しぜん然ぜんにお若わかくなられますなア、私わたしは此この通とほり年としが寄より、齒はが

抜ぬけてもう「しやつち」もない婆ばばアですが、貴あなた方なたとした事ことわいなア、フサの國くにに

居ゐらした時ときよりも餘よほど程ほどお元げん氣きな、お顔かほの色いろが若わか々わかとして、私わたしでも知しらず識しらずに

電でん波ぱを送おくるやうになりましたワ。オホ、、、」

高たか山やま彦ひこ「高たか姫ひめさま、何どうぞ冷ひやかさずに置おいて下ください、若わかい者ものぢやあるまいし、

いやもう斯こう見みえても年としと云いふものは嘘うそを吐つかぬ者もので、氣き許ばかり達たつしや者しやで體からだが何なんとな

しに無ぶ精しやうになります」

高たか姫ひめ「餘あまり奥おくさまの御おもて待なし遇なしが好よいので、いつも家うちに許ばかり居ゐらつしやるものだから、

自しぜん然ぜんに體からだが重おもくなるのでせう、私わたしも貴あなた方のやうな氣き樂らくな身みになつて見み度たう御ご座ざい

ますワ、オホ、、、」

黒くろ姫ひめ「今け日ふは遠えん方ぱうからの高たか姫ひめさまのお越こし、それについては青あを彦ひこ、紫むら姫きひめ、其そ他た一いち

同どうの者ものを集あつめて貴あなた女の歡くわん迎げい會かいやら祝いはひを兼かねて、お神み酒き一いつ杯ぱい頂いたく事ことにしませうか」

高姫「何うぞお構ひ下さいますな、併し私の参つた印に皆さまにお神酒を上げて貰へば尚更結構です」

黒姫はツト立つて「梅梅」と呼んだ。

此聲に梅公は慌ただしく走り來り、

「何御用で御座いますか」

黒姫「今日は高姫様の久し振のお越しですから、皆々お神酒を頂くのだから、其

用意をして下さい」

梅公「ハイ畏まりました、嘸皆の者が喜ぶことでせう」

といそいそとして納戸の方に姿を隠した。紫姫は青彦と共に此場に現はれ、叮嚀

に手をつかへ、

紫姫「これはこれは高姫様で御座いますか、貴い御身をもつて能くも遠方の所入

來られました。私は都の者、元伊勢様へ二人の下僕を連れて参拜致します折、黒

姫さまの熱心なる御信仰の状態を目撃しまして、それから俄に有難うなり、三五

教の信仰を止め、お世話になつて居ます。何うぞ今後は御見捨てなく宜敷く御指

導をお願ひ致します」

青彦「私は御存じの青彦で御座います、誠に不調法許り致しまして、大恩ある貴女のお言葉を忘れ、三五教に耽溺致し、大神様へ重々の罪を重ね、何となく神界が恐ろしくなりましたので、再び黒姫様にお詫を申し、歸參を叶へさして頂きました、何うぞ宜敷くお願ひ致します」

高姫「ヤア紫姫さまに青彦さま、皆因縁づくぢやから、もう此上は精神をかへては不可ませぬぞえ、貴女は黒姫さまに聞けば、立派な淑女ぢやと仰有いましたが、如何にも聞きしに勝る立派な人格、日の出神の生宮も、全く感服致しました」

紫姫「さうお褒め下さいましては不束かな妾、お恥かしうて穴でもあれば這入り度くなりませすワ」

高姫「滅相な、何を仰有います、貴女は身魂がよいから、もう此上御修業なさるには及びますまい、貴女は此支社に置いておくのは勿體ない、私と一緒に北山村の本山へ来て貰つて、本山の牛耳を執つて貰はねばなりません。これこれ青彦、お前も確りして今度は私について來なさい、此處に長らく置いておくと劍呑だ、

大江山の悪靈が何時憑依して又もや身魂を濁らすかも知れないから、今度は或一つの目的が成就したら、高姫と一緒にフサの國の本山に行くのだよ」

青彦「ア、それは何より有難う御座います、私の變心したのをお咎めもなく、本山迄連れて歸つてやらうとは、何とした御仁慈のお言葉、もう此上は貴女の御高恩に報ゆるため、粉骨碎身犬馬の勞を厭ひませぬ」

高姫「ア、人間はさうなくては叶はぬ、空に輝く日月でさへも、時あつて黒雲に包まれる事がある。つまり貴方の心の月に三五教の變性女子の黒雲が懸つて居たのだ。迷ひの雲が晴るれば眞如の日月が出るのぢや、ア、目出度い目出度い、これと云ふのも黒姫さまのお骨折り」

と高姫は一生懸命に褒めそやして居る。かかる處へ、

梅公「モシモシ、準備が出来ました。皆の者が待つて居ます、何うぞ皆さま奥の廣間へお越し下さいませ」

黒姫「ヤア、それは御苦勞であつた。サア高姫さま、紫姫さま、高山さま、青彦さま参りませう」

と先に立つ。高姫は鷹の羽ばたきしたやうな恰好しながら、いそいそと奥に入る。
一同は高姫導師の下に神殿に向ひ天津祝詞を奏上し、續いて日の出神の筆先の朗
讀を終り彌々直會の宴に移つた、高姫は歌を謠つた。

フサの御國の空高く 鳥の磐樟船に乗り

雲井の空を轟かせ 一瀉千里の勢ひで

西より東へ電の 閃めく如くかけ來り

世人の胸を冷しつつ 高山、低山乗り越えて

天の眞名井も打ち渡り 安の河原を下に見て

瞬くひまに皇神の 日の出の守護の著く

由良の港に着陸し 鶴龜二人を伴ひて

千秋萬歳ウラナイの 教の基礎を固めむと

東に輝く明星を 求めて此處に來て見れば

神の經綸の奥深く 凡夫の眼には彌仙山

山やまの彼方かなたに現あらはれし 玉照姫たまてるひめの嚴靈いつみたま

彌々いよいよ此處ここに出現しゅつげんし 三千年さんぜんねんの御經綸おんしぐみ

開ひらく常磐ときはの松まつの代よを 待まつ甲斐かひあつて高姫たかひめが

日頃ひごろの思おもひも晴はれ渡わたる 時ときは漸やつやく近ちかづきぬ

ア、惟かむながらかむながら神々々かむながら 御靈みたま幸倍さちはへ坐まし在まして

誠まことの道みちにさやり來くる 頑固ぐわんこ一ひとつの瑞靈みづみたま

變性へんじやう女子によしが改心かいしんを する世よとこそはなりにけり

月つきは盈みつとも虧かくるとも 旭あさひは照てるとも曇くもるとも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも ウラナイ教けうの神かみの道みち

唯ただ一厘いちりんの祕密ひみつをば グツと握にぎつた高姫たかひめが

仕組しぐみの奥おくの蓋ふたあけて 腹はらに吞のんだる如意寶珠にょいほつしゆ

玉たまの光ひかりを鮮あざかに 三千世界さんぜんせかいに輝かがやし

鬼おにや大蛇をろちや曲津神まがつかみ 三五教あななひけうも立直たてなほし

金勝要きんかつかねの大神おほかみや 木花姫このはなひめの生宮いきみやを

徹底、改心さして置き
グツと弱つた、しほどきに

此高姫が乗り込んで
サアサア何うぢや、サアどうぢや

奥をつかんだ太柱
彌改悟をすればよし

未だ分らねば帳切らうか
變性男子の御血統

神の柱となりながら
こんな事では、どうなるか

誠の事が分らねば
早く陣引きするがよい

後は高姫、乗り込んで
唯一厘の御仕組

天晴成就させて見せう
斯うして女子を懲らすまで

一つ無くてはならぬもの
彌仙の山に現はれた

玉照姫を手に入れて
是をば種に攻寄れば

如何に頑固な緯役の
變性女子も往生して

兜を脱ぐに違ひない
一分一厘、毛筋程

間違ひ無いのが神の道
三五教やウラナイ教

神の教と表面は
二つに分れて居るけれど

元を糺せば一株ぢや

雨や霰や雪氷

形變れど徹底の

落ち行く先は同じ水

同じ谷をば流れ往く

變性女子の御靈さへ

グヅと往生させたなら

後は金勝要の神

木花咲耶姫の神

彦火々出見の神靈

歸順なさは易い事

邪魔になるのは緯役の

此世の亂れた守護神

此奴ばかりが氣にかかる

ア、さりながらさりながら

時は來にけり、來りけり

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直し、宣り直す

三五教やウライナイの

神の教の神勅

高天原に高姫が

天晴れ表に現はれて

誠の道を説き明かし

ミロクの神の末長う

經のお役と立直し

緯の守護を亡ぼして

常世の姫の生魂や
世界の秘密を探り出し
日の出神や龍宮の
乙姫さまの神力で
堅磐常磐の松の世を
建つる時こそ来りけり
ア、惟神々々
御靈幸倍坐ませよ

黒姫も稍、微酔機嫌になつて低太い聲を張り上げて謠ひ始めたり。

遠き海山河野越え
遙々此處に歸ります
ウラナイ教の根本の
要、搦んだ高姫さま
よくもお出まし下されて
昔の昔のさる昔
國治立の大神の
仕組み給ひし大謨を
一日も早く成就させ
世に落ちたまふ神々を
残らず此世に、あげまして
三千世界の民草を
上下運否の無いやうに
枘かけひいて相ならし

神政成就の大業を

いよいよ進めたまはむと

出ます今日の尊さよ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令、天地を探しても

こんな結構なお肉體

日の出神の生宮が

又と世界にあるものか

また龍宮の乙姫が

憑りたまひて良の

金神様のお經綸で

骨身、惜まぬお手傳い

こんな誠の神様が

又と世界にあるものか

ア、惟神々々

今迄、種々態々に

神のお道を彼是と

要らぬ心配して見たが

時節参りて煎豆に

花咲き實る嬉しさよ

と謠ふ折しも表の岩戸の方に當つて、消魂しい物音聞え來たる。

嗚呼鼻の高姫さまよ、お色の黒い黒姫さまの長たらしい腰曲り歌や、青彦の舌

鼓づみ、紫姫むらさきひめの淑しとやかな聲こゑ、馬公うまこう、鹿公しかこう、梅うめ、淺あさ、幾いく、丑うし、寅とら、辰たつ、鳶とび、鶴つる、龜かめその他その他澤山たくさんの酒さけに酔ようた場面ばめんを靈眼れいがんに見みせられて、餘あんなり靈肉れいにくりやうがん兩眼りやうがんを虐使ぎやくしした天罰てんばつ、俄にはかに眠ねむくなつて來きた。一寸ちよつとこれで切きつて置おきます。

(大正一一・四・二八 舊四・二 加藤明子録)

第一六章 返り討かへうち〔六四四〕

微醉ほろよひきげん機嫌うめこうの梅公おもては表おもてのけたたましい物音ものおとに、鹿公しかこう、馬公うまこうを伴ともなひ走はしり出いで見みれば、常彦つねひこを始はじめ瀧公たきこう、板公いたこうの三人さんにん、息いきを喘はづませ大聲おほこゑを張はり上あげ乍ながら、

『青彦あをひこ、紫姫むらさきひめをこれへ出だせエ』

と呶鳴どなりつけてゐる。梅うめ、ベランメー口調くつてうで、

『なゝゝゝ何なにを吐ぬかしやがるのでエ、此處ここを何處どこだと心得こころえて居ゐやがるのでエ、畏おそれくも勿體もつたいなくも日ひの出神でのかみの生宮いきみやと龍宮りうぐうの乙姫様おとひめさまの生宮いきみやの鎮坐ちんざします珍うづの寶座ほうざだぞ、

貴様達のやうな反逆者の出て来る處ぢやない、トツトと去にやがれ。コラ常彦、
貴様は何だ、恩知らず奴、ドン畜生奴が、永らく黒姫さまの御厄介になつて居や
がつて、後足で砂をかけて出やがった奴ぢやないか、よう【のめ】のめと【しや
つ】面を下げて來られたものだ。エー、之から一寸たりとも入れる事は罷りなら
ぬ、トツトと歸れ歸れ」

常彦「貴様は梅ぢやないか、兄弟子に向つて何と云ふ事を云ふのだ、【ごて】ご
て云はずに奥に行つて、青彦や紫姫に、常彦さまがお越したから一寸此處まで出
て來いと云つて呉れ」

梅公「何馬鹿を云うのだ、又紫姫や青彦を【かひ】出しに來たのだらう」

常彦「勿論の事だ、こんな邪教に友人が耽溺して居るのに、黙つて見て居れるか。
ごでごで吐さず、貴様は俺の云つた通り取次げばよいのだ」

梅公「ヤア常彦、貴様は今俺に向つて兄弟子と云ひやがったな、何が兄弟子だ、
ウラナイ教に居つてこそ俺の先輩だが……不人情な……勝手に逃げて行きやがつ
て、三五教の土持ちをする様な奴に兄弟子も糞もあつたものかい、これや、此梅

公を何時迄も鼻垂小僧と思つて居やがるか、今日では押しも押されもせぬ黒姫さまの参謀長だ。折角今日は高姫さまが遙々お越しになつて目出度く祝をして居るのに……【けち】をつけに来やがったのだな」

常彦「何、高姫が来て居るとな、其奴は恰度都合が良い、これから俺が直接談判だ、邪魔ひろぐな、そこ除けッ」

と行かむとする。鹿公、馬公は常彦の左右より兩手をグツと握り、

「これや、常彦、此處を何と心得て居る」

常彦「ヤア貴様は紫姫の従僕であつた馬、鹿の兩人、馬鹿な眞似【さらす】と爲めにならぬぞ」

「今日は目出度い日だ、馬と鹿の俺に免じて何卒歸つて呉れ、折角の酒が醒めて仕舞う」

梅公「ヤア貴様は瀧に板、又【のめ】のめと何しに歸つて來たのだ、貴様は高城山へ行つて松姫に叩き出され、乞食となつて迷うて居つたぢやないか。又しても舞ひ戻つて來やがつて、口の先で【ちよろまか】さうと思つても……その手は喰

はないぞ、サアサア不人情者、三匹の奴、サア歸れ……こんな奴は俺一人で大丈夫だ、オイ、馬公、鹿公、奥へ行つて此由を注進せい」

「よし、合點ぢや」

と二人は奥へ飛んで行く。梅公は三人を相手に論戦をやつて居たが、常彦は構はず強硬的に、

「サア板公、瀧公、續けッ」

と一同が酒宴の場に現はれたるを見て高姫は、

「ヤアお前は常彦ぢやないか」

黒姫「お前は瀧公、板公、何處をうるついで居つたのだ、よう氣の變る男だな、然し今迄の事は見直し聞直す、サア酒でも一杯飲んで高姫さまがお越したから、

とつくりと誠の話を聞かして貰ひなさい」

常彦「もうウラナイ教の話は何もかも、みんな聞いて居る、今更改めて聞く必要

はない、又何程頼んでも一旦決心した以上、ウラナイ教に滅多に歸つてやらぬぞ」

青彦「これやこれや、常彦、瀧公、板公、何ぢや、貴様は三五教に現を抜かしよ

つて……良い加減に改心したら如何だ

常彦「青彦、貴様こそ良い腰抜けだ、あれ程鬼ヶ城で奮戦をして置き乍ら、又も

やウラナイ教に尾を掉つて歸つて來るとは……腰抜野郎だ。然し一つ思案をして

見よ、如何しても三五教の方が奥が深いぢやないか、さうして不言實行の教だ、

それは貴様もよく知つて居る筈、何故又こんな處へ歸つてきよつたのだ

青彦「ほつときやがれ、俺は俺の自由の權でウラナイ教に這入つたのだよ、三五

教の奴は吾々の如何しても蟲が好かない哩、誰が何と云つても三五教なぞへ這入

る馬鹿があるか、貴様も良い加減に見切りを付けたら如何だ

常彦「紫姫と云ひ、馬公、鹿公まで惚けやがつて何の醜態だ。サア俺に跟いて來

い。俺は貴様が可憐相だから友人の情を以て迎へに來たのだ。こんな處に愚圖々々

致して居ると、如何な目に會はされるか知れたものぢやない、悪い事は云はぬ、

サア俺に跟いて歸つて呉れ

紫姫「ホ、ホ、あの常彦さまの仰しやる事、妾は何と云つて下さつても三五教

は何だか蟲が好きませぬ、もうすっかりウラナイ教に身も魂も入れて仕舞ひまし

た。何卒おついでどうぞの節せつ、悦子姫さまよしこひめに宜しくよろ云つて居ゐたと仰おつしやつて下くださいませ

常彦つねひこ「流石さすがは魔窟まくつヶ原がはらだ、此處ここまで來きて、何れも之これも皆籠絡みなろうらくせられて仕舞しまひよつ

たか、ア、殘念ざんねんな事ことをした哩わい」

と雙手もろてを組くみ乍ながら涙なみだを零こぼし思案しあんに暮くれて居ゐる。

青彦あをひこ「これほど黒姫くろひめさまが、貴様きさまの反對はんたいを少しもお怒おこりなく、舊もとの古巢ふるすへ歸かへつて

來こいと仰おつしやるのは普通ふつうの人間にんげんには出で來きない事ことだ」

常彦つねひこ「何なんと云いつても金輪こんりん奈落ならく、假令たとへ大地だいちが沈しづまうがウラナイ教けうに歸かへつて來きて堪たまる

ものかい。これや青彦あをひこ、貴様きさまも目めを覺さましたら如何どうだい」

青彦あをひこ「何なに云いつてるのだい」

と棍棒こんぼうを把とるより早はやく常彦つねひこ目蒐めがけて三みつ四よつ喰くらはした。常彦つねひこは身みに數すうヶ所かしょの傷いたを

負おひ悲鳴ひめいをあげて表おもてへ驅かけ出した。瀧たき、板いたの二人ふたりも後あとに跟ついて驅かけ出す。馬公うまこう、鹿しか

公こうは一生懸命いっしやうけんめいに青彦あをひこの棒ぼうを引ひつたくる。一方いっぱう常彦つねひこほかふたりは戸口とぐちを這はひ上あり、魔窟まくつ

ヶ原がはらを何處いづこともなく驅かけて行ゆく。後あとには高姫たかひめ外ほか一同いちどう大口おほくち開あけて高笑たかわらひ、

黒姫くろひめ「オホ、々々、到頭たうとう歸かへつて來きよつたが、やつぱり心こころが責せめると見みえてよう居を

りませぬ哩。然し乍ら青彦、お前もこれからあんな亂暴をしちやいかぬよ」

青彦「つひ酒の機嫌で……餘りむかついたものだから、やつてやりました」

高姫「然し乍ら青彦はあれで……すつかり吾々の疑がとけた、畢竟或意味から云

へば、結構な御神徳を頂きなされた」

青彦「御神徳が何か知りませぬが眞實に亂暴な奴で困つて仕舞う、三五教に這入

ると直あんな「ヤンチャ」になると見える、ア、思へば思へば益々三五教が嫌に

なつて来た哩」

高姫「ヤア皆さま、此處が大切な處ぢや、惡魔奴が色々と手を換へ品を替へ、引

き落しに来るから用心しなされ」

黒姫「ヤア青彦、紫姫さま、御苦勞だが貴方はこれから玉照姫の宅へ行つて下さ

るまいか、貴方でなければ到底他の奴をやつても要領を得まい、其代りに首尾よ

く玉照姫を渡せば、綾彦、お民の兩人を歸してやるから……」

青彦「承知致しました、然し乍ら先方の豊彦と云う爺さまは仲々頑固な奴と見え

ますから到底口先位では聞くものぢやありません。力にして居つた綾彦、お民の

行衛ゆくゑが分わからぬものだから、今いまではお玉たまと玉照たまてる姫ひめが老夫婦らうふうふうの生命いのちの綱つなの様やうなものであります、私わたしが談判だんぱんに行いつても駄目だめでせう、綾彦あやひこ、お民たみの兩人りやうにんを引連ひきつれて爺ぢいさまにお目通めどほりをしたならば、御禮返おれいがへしに渡わたして呉くれるかも知しれませぬ」

黒姫くろひめ「そうかも知しれぬ、一切いっさい青彦あをひこに任まかしますから何卒往どうぞいつて來きて下さい」

青彦あをひこは紫姫むらさきひめと共ともに綾彦あやひこを伴ともなひ、馬うま、鹿しかの一行五人いっかうごにんは、

然しからば高姫様たかひめさま、高山彦様たかやまひこさま、黒姫様くろひめさま、その他の御一同様ごいちどうさま、何なにとぞ待まつて居ゐて下さくだいませ」

斯かく云いう所ところへ俄にはかに歸かへつて來きたお節せつにお民たみ、

「ヤア、これはこれは黒姫様」

黒姫くろひめ「ヤア、お節せつにお民たみ好い處ところへ歸かへつて來きて呉くれた、松姫まつひめには機嫌きげんようして居ゐられるかな」

お節せつ「松姫まつひめさまを初はじめ皆みなさま御無事ごぶじで、御神務ごしんむに鞅掌おつしやうされて居ゐられます」

黒姫くろひめ「ア、それは重疊ちやうていふちやうていふ々々、幸さいはひウライナイ教けうの御大將高姫おんたいしやうたかひめさまがおいでになつて居ゐる、サア御挨拶ごあいさつを申まをしあげなされ」

ふたりは、

「ハイ」

と答へて高姫に向ひ、

「これは豫て承はる高姫様で御座いましたか、ようマアお越し下さいました。妾はお節……お民と申すもの、黒姫様の「いかい」御世話になつて居ります、何卒今後とても可愛がつて下さいませ」

高姫「お前達は若い年にも似合はず感心なお方ぢや、就いてはこれから青彦や綾彦に行つて貰ひ度い處があるので……お二人とも恰度都合の好い所だ、貴方も一緒に跟いて行つて下さいな」

お節「ハイハイ有難う御座います、何處までもお道の爲めなら参りますから……茲に紫姫、青彦、馬、鹿の四人は、綾彦、お民、お節を伴ひ高姫その他に挨拶を述べ、悠悠として此場を立ち去りぬ。ア、紫姫、青彦その他の一行は再びウライ教に歸り来るならむか。」

(大正一一・四・二八 舊四・二 北村隆光録)

第一七章 玉照姫〔六四五〕

自轉倒島の第一の 靈地と世にも鳴りひびく
世界に無二の神策地 瑞の御靈の隠れ場所
青葉も、そよぐ夏彦が 萬世不動の瑞祥を
祝ふ加米彦、諸共に 四つの手足を働かせ
朝な夕なに勉強みて 主の留守を守り居る
世繼王の山の夕嵐 雨戸を敲く折からに
息もせきせき尋ね来る 三五教の宣傳使
常に變りし常彦が 顔に紅葉を散らしつつ

音もサワサワ瀧公や

心痛むる板公が

これの庵を打叩き

頼も頼もと訪なへば

オウと答へて加米彦は

雨戸ガラリと引開けて

此眞夜中に一つ家を

訪なふ神は何者ぞ

鬼が大蛇か曲神か

まさか違へば木常彦

唯一言の言靈の

愛想もコソも夕嵐

吹き拂はむと夕月夜

キツと透して眺むれば

何とは、なしに見覚えの

姿に心和らげつ

林の中の一つ家

訪なふ人は何人ぞ

御名を名乗らせ給へよと

いと慇懃に言靈を

宣り直すれば常彦は

首をかたげ腰を曲げ

両手を膝の上に置き

鬼ヶ城にて別れたる

吾れは常彦宣傳使

汝は加米彦、夏彦か

申上げたき仔細あり

紫姫や青彦が

あななひけつ 三五教にアキの空
あまつみそら 天津御空も黒姫が

しこ まかぜ 醜の魔風に包まれて
まこと みち と 誠の道を取りはづし

あくま とりこ 悪魔の擒となりける
とも みたま 友の身魂を救はむと

よ ひ はるばる 夜を日について遙々と
ここ たづ きた 茲まで訪ね來りしぞ。

かめひこ 加米彦はこれを聞くより、

むらさきひめ あをひこ ナニ、紫姫、青彦がウラナイ教に沈没しましたか。それは大變、先づ先づお這

い くだ 入り下さいませ……ヤア見馴ぬ方が、しかもお二人

たき いたいちど 瀧、板一度に、

わたくし つねひこさま 私わたくしは常彦様のお伴ともを致いたして参まゐりました新参者しんざんもので御座ございます、何卒なにとぞ宜よろしうお願ねがひいた致いたします

かめひこ 加米彦「アーよしよし、御互おたがひにお心安こころやすう願ねがひませう。……夏彦なつひこの御大將おんたいしやう、何をグ

ござ ツグツして御座ござる。天變地妖てんべんちえうの大事變だいじへんが出來致しゆつたいいたしましたぞ

なつひこ 夏彦は奥おくの間まより、ノソノソ出いで來きたり、

「ヤア常彦さま、暫くでしたネ、ようこそお出下さいました。マアマアお上り下さいませ。ユツクリと内開け話でも致しませうか」

加米彦「コレコレ夏彦の大將、そんな陽氣な所ぢやありませんか」

夏彦「そう慌てずとも宜しいワイ。何事も皆神様のなさる事ぢや。ヤア常彦さま、決して決して御心配は要りませぬ。今に紫姫、青彦も、意氣揚々として此家へ歸つて來ますよ」

常彦「そうかは存じませぬが、只今の所では非常な勢で御座います。私も青彦、

紫姫の墮落を救はむ爲に、ワザワザ敵の本城へ侵入し、忠告を加へてやりました。

そうした所、青彦の人格はガラリと悪化し、終結の果てには亂暴狼藉、棍棒を以

て吾々の身體を、所構はず滅多打ち、斯かる亂暴者は最早救ふべき手段なしと、

取る物も取敢ず此二人を伴ひ、悦子姫様初めあなた方に、何とか良い智慧を借り

たいと思つて、一先づ引返して來ました。そう樂觀は出來ませぬ」

加米彦「ヤア其奴ア大變だ。悦子姫さまは竹生島へ、英子姫さまの後を追つてお

出でになつた不在中、こんな突發事件を等閑に附して置くと云ふ事は、不忠實の

極まりだ。サア常彦さま、時を移さず魔窟ヶ原の黒姫の本陣へ乗込み、言靈戦の大攻撃を致しませう」

と早くも尻ひつからげ飛び出さむとする。

夏彦「アハ、よく慌てる奴だなア。これだから若い奴は困るのだ。マアゆるると久し振だ、お神酒でも戴いて、作戦計畫をやらうぢやないか。急いては事を仕損ずる」

加米彦「急かねば事が間に合はぬ。芽出度凱旋した其上で、ゆるゆるお神酒をあがる事にせう。刻一刻と心の底に浸潤し来るウラナイ教が悪靈の誘拐の矢は日に日に烈しくなるであらう、老耄爺の夏彦の腰折れ、モウ俺は愛想が盡きた。悦子姫様の御命令だから、姫様に仕へると思つて、今迄は如何なる愚論拙策も、目を塞いで盲従して来たが、それは平安時の時の事だ。危急存亡の此場合、臨機應變の處置を執らねばならぬ。平和の時の宰相には、カナリ適當かは知らぬが國家興亡危機一髪の際、假令上官の夏彦が命令たりとも、服従すべき限りにあらずだ。サアサア常彦外兩人加米彦に續かせられい……」

夏彦「アツハ、、、、石龜の地團駄、何程騒いだ所で駄目だよ。マアゆつくりと落着いたが宜からう。俺は一寸紫姫様の御意中を以心傳心的に感得して居るから、滅多な事は無い。何か深いお考へが有つての事だ。萬一紫姫を始め、青彦其他の者、一人にてもウライナイ教の黒姫に籠絡さるる様な事が實現したら、此夏彦が一つより無い首を、幾つでも加米彦、常彦さまに献上する」

加米彦「今日に限つて夏彦の大將、糞落ち着に落ち着いて御座るぢやないか。コラちと變だ黒姫の悪靈が憑依して居るのではなからうかなア。一つ嚴重なる審神を施行するの餘地充分あるワイ」

夏彦、二人の耳元に口を寄せ、何事か囁いた。

加米彦「ア、さうか、ア、それなら安心だ。ナア常彦、肝腎の事を俺達に言つて呉れぬものだから、要らぬ氣を揉んだぢやないか」

夏彦「身魂にチツとでも曇りの有る間は、神は今の今迄誠の仕組は申さぬぞよ。誠が聞きたくば、我を折りて生れ赤兒の心になり、水晶の身魂に研いて下されよ。神は誠を聞かしてやりたいなれど、惡の身魂の混りて居る守護神には、實地正眞

の事が云うてやれぬぞよ……とお筆先に現はれて居りますぞ

加米彦「ヤアさうすると常彦さま、吾々二人はまだ數に入つて居らぬのだ。なん

とムツカしいものだなア

夏彦「兔も角、神様にお禮を申上げ、此處で一日二日休養して下さい。其間にキ

ツと紫姫様、青彦の消息が分るでせう

加米彦「流石は御大將、イヤもう今日限り、何事も盲從致しませう。併し乍ら間

違つたら、約束の通り、常彦と加米彦が、夏彦の御首頂戴仕るから……御覺悟は

確でせうな

夏彦「アハ、、、、たしかだ たしかだ

斯く話に耽り乍ら、其夜は主客五人枕を竝べて寢に就いた。

連日連夜曇り果てたる五月の空も、今日はカラリと日本晴の好天氣、煎りつく

様な大空に、朝鮮燕の幾十となく泥を含みて、前後左右に飛び交ふ有様を、夏彦

外四人は窓を開いて愉快氣に眺めて居る。

加米彦「随分よく活動をしたものだなア。我々も燕に倣つて、一層の雄飛活躍を

やらねばなるまい。……ヤア向うの方へ、白い笠が揺らついて来たぞ」

と話す折しも、勢よく此方に向つて、青葉の中を波打たせつつ進み來れる饅頭笠、

三本の金剛杖、黒い脚が二本、白い脚が四本。

加米彦「モシモシ夏彦の大將、青彦がどうやら凱旋と見えますワイ。一つ萬歳を

三唱しませうか。祝砲でも上げませうか」

と言ひも終らず「プツプツプウ」と放射する。

夏彦「アア煙硝臭い、屋内で花火を揚げるのは險呑だ、外へ行つてやつて下さ

い」

加米彦「モウ裏の言靈は材料缺乏、これから表の言靈だ……ウローウロー」

と唯一人呶鳴つて居る。近づいた三人の男女、

「ヤア加米彦さま、エライ元氣だなア」

加米彦「サア エライ元氣だ。紫姫に、青彦に、モ一人は……大方お節だらう。

よう歸つて下さつた。サアサア奮戦の情況、委細に夏彦の御大將に言上遊ばせ」

「アハ、ハ、ハ」

と一人の男は笠を脱ぐ。

加米彦「ヤアお前は音彦様か。……ア、これはしたり、悦子姫様……ア何だ、五

十子姫様……ヤア音彦様、お芽出度う。悦子女王が居らせられなかつたら、大變

御夫婦ご愉快で有りましただらうに……ヤアもう世の中は思う様に行かぬもので

すナア

悦子姫「オホ、、、」

加米彦「中を隔つる悦子川かなア、可哀相に、焦れ焦れたコガの助、お顔見乍ら

儘ならぬ……と云ふ、喜劇、悲劇の活動寫眞……ヤア兔も角お這入り下さいませ

音彦「然らば許しめされよ」

加米彦「姫御前と道中を遊ばしたお蔭で、大變言靈が向上しました。……サア夏

彦さま、今日限り吾々と同僚だ、何時までも女王の代りは出来ませぬぞ。……サ

ア悦子姫女王、ズツと奥へお通り下さいませ」

悦子姫「加米彦さま、夏彦さま、よく神妙にお留守をして下さいました。あなた

方の健實な事、よく氣を付けて下さると見えて、風流な夏草が家の周圍に一杯生

えて居ります。小蛇でも出そうに御座いますな。オホ、

加米彦、頭を掻き乍ら、

「イヤもう……エー外は惟神に任し、内は一生懸命に、内容の充實を主と致しました。これが所謂内主外従と云ふものです」

悦子姫「ホ、成程外には茫茫と美しい草が御天道様のお蔭で繁茂して居ま

す。室内はザツク balan、澤山に紙片が散亂して、まるで花見の庭の様です」

加米彦「イヤ此間から、夏彦の假の大將、寝冷えを致し、風邪を引いたものです

から、鼻紙をそこら中に散らして置いたのです。……一寸待つて下さい。箒で今

掃いて除けます、ウツカリ踏んで貰へば、足の裏にニチャツとひつつきます。……

「オイ夏彦鼻紙の大將、何をグツグツして居るのだ。此加米彦は何事も盲従して

来たのだ。どうだ、此鼻紙を箒で掃き散らしても、お叱りは御座いますなア」

夏彦「これはこれは悦子姫様、今煤掃の最中へお歸り下さいまして、誠に申譯が

御座いませぬ。どうぞ暫く、裏の森林に美しい花も咲いて居ます、恰度菖蒲が真

つ盛り、お三人共暫く御覽なし下さいませ。其間に夏季大清潔法を執行致します。

……オイ加米彦、箒だ、水を汲め、采拂だ……」

加米彦「貴様はジツとして手を出さずに、願ばかりで……そう一度に……千手観音様ぢやあるまいに、水を汲む、采拂を使ふ、箒を使うと云ふ事が出来るものか。貴様も一つ活動せぬか。門外の燕の活動を、チツと倣へ」

夏彦「ハイハイ畏まりました」

と襷をかけ、

「わしはお家を掃除する。お前は庭を掃除して呉れ……」

俄にバタバタ、ガタガタ……、

夏彦「オイ常彦、板、瀧、手傳ひして呉れぬか。……ヤアどつか往きやがったな

ア」

と窓を覗き、

「ヤア一生懸命に草をひいて居るワイ」

半時ばかりかかつて大掃除を、吐血の起こった様な騒ぎでやつてのけた。時を見計らひ悦子姫、音彦、五十子姫、ニコニコし乍ら、

音彦「ヤア俄に参りまして、エライ御雑作をかけました」

加米彦「ヤア有難う。斯う云ふ事が無ければ、モウ一月も経たぬ内に、此家は草

の中に沈没する所でした。アハ、ハ、ハ、ハ」

音彦「身魂相應の御住宅で……」

悦子姫「オホ、ハ、ハ、ハ」

茲に八つの笠の臺は、疊の上に二列に竝列した。悦子姫を始め一同は、互に久

闊を敘し、打解話に時を移す。折しも門口に現はれ来る馬公、鹿公、

「モシモシ夏彦さま、馬、鹿の兩人です。御注進に参りました」

と門口より呶鳴り込んだ。

夏彦「ヤア馬公に鹿公、よう歸つて来た。併し今日は奥に珍らしいお客さまだ。

御主人公の紫姫さま始め青彦はどうなった」

馬公「只今結構な生神さまの玉子を奉迎して、これへお歸りになります。どうぞ

座敷を片付けて、充分清潔にして待つて居て呉れいとの、青彦さまの御命令、宙

を飛んで御報告に参りました。やがて御入來になりませう」

夏彦「アーそれはそれは御苦勞でした。マア一服して下さい」

とイソイソとして奥に入り、

「悦子姫様、只今紫姫様、青彦がこれへ歸つて来るそうので御座います」

悦子姫「アーそうだらう。床の間もよく掃除して御待受けを致しませう。キツと

玉照姫様の御光來でせう」

夏彦「そんな事が御座いませうかなア。どうして又それが分りますか」

悦子姫「何事も英子姫様の御經綸、キツと今にお越しになります」

斯く言ふ所へ、丹州を先頭に、お玉は玉照姫を恭しく捧持し、紫姫、青彦、お

節の一行ゾロゾロと此一つ家に勢よく入り来る。加米彦、慌て飛んで出で、

加米彦「ヤア杏るより桃が安い。今日はモモだらけだ。モウモウ忙しうて忙しう

て、嬉しいやら面白いやら、勇ましいやら、根つから、葉つから見當が取れなく

なつた。改心致すとマサカの時に、嬉しうてキリキリ舞を致す身魂と、辛うてキ

リキリ舞致す身魂とが出来るぞよ……とは此事だ。サアサア皆さま、ズツと奥へ、

キリキリ舞ひもつてお這入り下さいませ……ドッコイシヨのヤットコシヨ……」

と面白い手つきをして踊つて居る。青彦、

青彦「コレコレ加米彦さま、早く玉照姫様を、悦子姫様に御紹介して下さい」

悦子姫は奥より走り来り、恭しく拍手し、嬉し涙をタラタラと流し乍ら、

悦子姫「玉照姫様、よくもお越し下さいました。これで愈神政成就疑なし。ア、

有難し、辱なし」

と言つた限り、嬉し涙に暮れて、顔さへあげず泣きいる。

加米彦「これはこれは悦子姫の女王様、何を此芽出度い時に、メソメソお泣き遊

ばすのだ。ヤツパリ女は女だなア。涙脆いと見えるワイ。ア、矢張り俺も何だか

泣きたくなつて来た、アンアンアン」

青彦は歌ふ、

神素盞鳴大神の御言畏み曇りたる

世を照さむと英子姫 神の仕組を奥山の

心に深く包みつつ 隠して容易に彌仙山

萬代祝ふ龜彦を 伴ひ聖地を後にして

國の榮えも豊彦が 娘のお玉に木花の

姫の命の分靈 咲耶の姫を取り懸けて

後白雲と歸り行く 心も春の山家道

折こそよけれ悦子姫 音彦、加米彦、夏彦が

川邊の木蔭に立寄りて 英子の姫の神界の

それとはなしに祕事を 以心傳心語りつつ

父に近江の竹生島 足を速めて出で給ふ。

悦子の姫は急坂を 三人の男と諸共に

辿りて、やうやう彌仙山 麓に建てる豊彦が

賤の伏家に立寄りて 俄産婆の神業に

思ひも寄らぬ貴の聲 お玉の腹を藉つて出た

玉照姫を取りあげて イソイソ歸る世繼王の

山の麓に靈場を トして庵を結びつつ

ふたり を 二人の男に留守をさせ

むらさきひめ 紫姫に何事か

囁き合ひて右左り

よしこ 悦子の姫は近江路へ

むらさきひめ 紫姫や青彦は

うま 馬、しかふたり 鹿二人を伴ひて

西北指して進み行く

ふなをかやま 船岡山の山麓に

かかる折しも夕闇を

すか 透して聞ゆる叫び聲

あをひこ 青彦、馬、しかさん 鹿三人は

こゑ 聲を尋ねて暗の路

進む折しもウラナイの

みち 道の教の瀧、いた 板が

一人の女を引捉へ

まつ 松の古木に縛りつけ

権謀術数の最中を

やみ 闇を幸ひ黒姫の

こわいろ 声色使ふ鹿公が

さつそく 早速の頓智、たき 瀧、いた 板は

おののき怖れ幽霊と

おも 思ひ誤り谷底に

スツテンコロリと轉落し

こしぼね 腰骨打つてウンウンと

やみ 闇に苦む憐れさよ

むらさきひめ 紫姫は三人の

男にお節を守らせつ

すす 進んで來る元伊勢の

稜威の御前に參拜し 天津祝詞を奏上し

神示を仰ぐ時もあれ 谷に聞ゆる言靈の

怪しき響に青彦は 紫姫を伴ひて

劍先山の深谷を 尋ねて行けば、こは如何に

顔色黒き黒姫が 二人の男と諸共に

一心不亂に水垢離 其熱烈な信仰に

何れも肝を冷しつ 紫姫や青彦は

何か心に諾きつ 俄に變るウラナイの

神の教の宣傳使 馬公、鹿公諸共に

魔窟ヶ原に築きたる 黒姫館に出て行く

高山彦や黒姫は 相好崩してニコニコと

忽ち變る地藏顔 勝ち誇りたる會心の

笑にあたりの雰圍氣は 乾燥無味の岩窟も

忽ち春の花咲いて 飲めよ騒げの賑はしさ

大洪水の氾濫し 堤防崩した如くなる

亂癡氣騒ぎの最中に 阿修羅の如き勢で

現はれ来る常彦が 瀧公板公伴ひて

青彦さまが胸の内 知らぬが佛の黒姫や

折柄来れる高姫に 喰つてかかつた可笑しさよ

可哀相とは知り乍ら 時を繕ふ青彦が

早速の頓智、棍棒を 打ち振り打ち振り常彦が

體を目がけて滅多打 地蟹の様に泡吹いて

涙を流す瀧公や 痛々しげに板公が

雲を霞と逃て行く この振舞に高姫や

道に迷うた黒姫が 始めてヤツと氣を許し

紫姫や青彦に 大事の大事の寶物

玉照姫の人質を 何の氣もなく吾々に

渡して呉れた其お蔭 綾彦、お民を伴ひて

心こころイソイソ山坂やまさかを

右みぎに左ひだりに飛とび越こえつ

於お與よ岐ぎの里さとの豊彦とよひこが

館やかたに到いたりいろいろと

一いち伍ぶ一し什じを物語ものがたる

紫姫むらさきひめの言靈ことたまに

豊彦とよひこ夫婦ふうふうは雀踊こをどりし

お玉たまを添そへて玉照たまてるの

姫ひめの命みことの貴うづの御子みこ

一いちも二にもなく奉たてまつる

大願成就たいくわんじやうじゆ、大勝利だいしよつり

長居ながゐは恐おそれ又また御意ぎよの

變かはらぬ内うちに歸かへらむと

丹州たんしう、お玉たまに送おくられて

イヨイヨ聖地せいちに來きて見みれば

思おもひかけぬは悦子よしこ姫ひめ

科戸しなどの風かぜの音彦おとひこや

心こころいそいそ五十子いそこひめ姫ひめ

竝ならぶ五月ごくわつの雛祭ひなまつり

悠々いういう然ぜんと構かまへ居ゐる

此方こなたの隅すみを眺ながむれば

常つねに變かはつた常彦つねひこが

むつかしい顔かほの紐ひもを解とき

瀧公たきこう、板公いたこう從したがへて

坐すわつて御座ござる勇いさましさ

剽輕者へうきんものの加米彦かめひこが

主人あるじの留守るすを幸さいはひに

なまくら、したる其その酬むくゐ

捻鉢巻ねぢはちまきに尻しりからげ 庭にはを掃はくやら采拂さいはらひ

そこらバタバタ叩たたくやら 戸口とぐちの外そとを眺ながむれば

蛙かわづや蛇へびの巢窟さうくつと なつた庭にはをば瀧たき、板いたの

二人ふたりは忽たちまち頬ほほかぶり 汗あせをタラタラ流ながしつつ

狼狽うろたへ騒さわぐ草くさむしり 蓬よもぎヶ原がはらを搔かき分わけて

黄金こがね花はな咲はなく今日けふの空そら 黄金こがねの峰みねに現あらはれし

木花このはな姫ひめの分わけ霊たま 咲耶さくやの姫ひめの再さい來らいと

仰あふぐ玉照たまて姫ひめの神かみ 迎むかへ奉まつりて三五あななひの

教をしへを守るまもる元津もとつ神かみ 國武彦くにたけひこの隠かくれます

世繼よつわう王山ざんの表おもて口くち 朝日あさひ輝かがやく夕日ゆうひ照てる

これの聖地せいちに永久とこしへに 鎮しづまり居あまして常闇とこやみの

天あまの岩戸いはとを開ひらきます 三みつ口のえいぬの御代みよの礎いしずと

壽ことほぎまつる今日けふの空そら 壬戌みづのえいぬの閏うる五月ごくわつ

五日いつかの宵よひの此この仕組しぐみ イツカは晴はれて松まつの世よの

榮さかえを見るみぞ目め出度でたけれ
ア、惟かむながらかむながら神かみ々々

御みたま靈さち幸さいはへましませよ〆

と青彦あをひこは聲こゑも涼すずしく謠うたひ終をはりぬ。十八じふはちバムの假名かなに因ちなみし松まつの神代かみよの物語ものがたり、松竹まつたけ
梅うめと祝いはひ納をさむる。

(大正一一・四・二八 舊四・二 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・三 王仁校正)

靈たまの礎いしずゑ (四)

一、眞神しんしん又は嚴瑞げんずゐなる主神しゅしんに認みとめられ愛あいせられ信しんぜられ又また主神しゅしんを認みとめ深く信しんじ厚あつく愛あいする所ところには必かならず天國てんごくが開ひらかれるものである。諸多しよたの團體だんたいに於おける善徳ぜんとくの不同ふどうよりして、主神しゅしんを禮拜らいはいするその方法ほうほうも亦また同一どういつでない、故ゆゑに天國てんごくにも差等さとうあり人ひとの

往生すべき天國に相違が出来るのである。併し乍ら天國の圓滿なるは此の如く不同あるが故である。同一の花の咲く樹にも種々の枝振りもあり花にも満開のもの半開のもの蒼の儘のものがあつて、一つの花樹の本分を完全に盡して居るやうなものである。

一、天國は各種各様の分體より形成したる單元であつて、その分體は最も圓滿なる形式の中に排列せられて居る。凡て圓滿具足の相なるものは諸分體の調節より來るものといふことは吾人の諸々の感覺や外心を動かす所の一切の美なるもの樂しきもの心ゆくものの性質を見れば分明である。數多の相和し相協うた分體があつて或は同時に或は連續して節奏および調和を生ずるより起り來るもので決して單獨の事物より發せないものである。故に種々の變化は快感を生ずるに到ることは吾人の日夜目擊實證する所である。そして此快感の性相を定むるは變化の性質如何にあるのである。天國に於ける圓滿具足の實相は種々の變態に歸因することを明め得らるのである。

一、天國の全體は一の巨人に譬ふ可きものである。故に甲の天國團體はその頭部

に又は頭部の或る局所に在る様なものである。乙天國の團體は胸部に又胸部の或る局所にある。丙天國の團體は腰部又は腰部の或る局所に在る如きものである。故に最上天國即ち第一天國は頭部より頸に至るまでを占め、中間即ち第二天國は胸部より腰及び膝の間を占め、最下即ち第三天國は脚部より脚底と臂より指頭の間を占めて居る様なものである。

一、天國は決して上の方而已に在るもので無い。上方にも中間にも下方にも存在するものである。人間の肉體に上下の區別なく頭部より脚底に至るまでそれぞれ意志の儘に活動する資質ある如きものである。故に天國の下面に住む精靈もあり、天人もある、又天國の上面に住むのも中間に住むのもある。天の高天原もあり地の高天原も在つて各自その善徳の相違に由つて住所を異にするのである。

一、宇宙間に於ては一物と雖も決して失はるる事も無く、又一物も静止して居るものではない。故に輪廻轉生即ち再生と云ふことは有り得べきものである。然るに生前の記憶や意志が滅亡した後に矢張個人と云ふものが再生して行くとすれば、約り自分が自分であると云ふ事を知らずに再生するものならば再生せないも同じ

ことであると云ふ人がある。實に尤もな言ひ分である。凡て人間の意志や情動なるものは、何處までも朽ないものである以上は、靈魂不滅の上から見ても記憶や意志を有て天國へ行くものである。然し現界へ再生する時は一旦その肉體が弱少となるを以て容易に記憶を喚起することは出来ないのである。又記憶して居ても何の益する所なき而已ならず、種々の人生上弊害が伴ふからである。之に反して天國へ行く時はその記憶も意念も益々明瞭に成つて來るものである。故に天國にては再生と云はず、復活と云ふのである。

一、科學的の交靈論者は人靈の憑依せし情況や死後の世界に就いて種々と論辨を試みて居るのは全然無用の業でもない。然し乍ら彼等の徒は最初と最後の此の二つの謎の間に板挟みの姿で、其言ふ所を知らない有様である。彼等はホンの少時間、時間と云ふものを最早數へることの出來ぬ世界へホンの一足許り死者の跡をつけて行くだけであつて、闇黒の中で其儘茫然としてその行衛を失つて了つて居る。彼等に對して宇宙の祕密や真相を闡明せよと言つた所で、到底ダメである。一、宇宙の祕密や真相は到底二言や三言で現代人の腦裡に入るものではない。又

本當にこれを物語つた所で到底人間の頭腦に這入り切れるものではない。人間の分際としては如何なる聖人も賢哲も決して天國や靈界の祕密や真相を握る事は不可能だと信じて居る。何となれば此祕密や真相は宇宙それ自身の如く無限で絶對で不可測で窮極する所の無いものだからである。

一、死者が矢張り靈界に生て居るならば、彼等は何等かの方法を用ゐてなりと吾々に教へて呉れさうなものだと云ふ人がある。然しながら死者が吾々に話をすることが出来る時分には死者の方に於て何も吾々に報告すべき材料を持つて居ないし、又何か話すべき程の事柄を知り得た時分には、死者は最早吾々と交通の出来ない天國へ上つて、永久に吾々人間と懸け離れて了つて居るからである。

大正十一年十二月

(昭和一〇・六・三 王仁校正)

終り